
IS / DESTINY

銀夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS / DESTINY

【Nコード】

N2022R

【作者名】

銀夢

【あらすじ】

新兵器【IS】の登場により、女尊男卑社会となった世界で、唯一男でISを扱える者が現れた。

しかし、それは始まりはおろか、コイントスですらなかった。

——次第に世界は彼に覚醒を求め始める——

第一話【駆け抜ける衝撃】（前書き）

初めまして、銀夢と申します。

初執筆となる【IS／DESTINY】をご覧いただき、ありがとうございます。

まず、この作品には、白式は登場しません。

代わりに、機動戦士ガンダムSEEDDESTINYのインパルスが主人公機となります。

・・・第二形態は言わずもがなですね。

また、この作品の一夏は性格等を変更しております。

この一夏は非常に鬼畜であり、読者様の気分を害するかもしれませんので、ご注意ください。

また、天才でもありISをカンだけで操れます。

無論、鍛練は欠かしませんが。

いずれ種が割れることでしょう。

そして私、銀夢はシャルロット党员です。

シャルがメインヒロインですが、いきなりラブラブにはしません。恋と言うものは、面倒くさいことを楽しむものですから。

また、原作でも亡国企業や東、ISの謎が解明されていないので、ストーリーは徐々に原作無視になります。

最後に、この作品はおそらく更新が遅いです。漫画を描いたり、勉強に励んだりする時の、息抜きとして執筆していますので。

注意書が多くて申し訳ありません。

では、IS／DESTINYをお楽しみください。 (^ _ ^) /

第一話【駆け抜ける衝撃】

・・・・・・行きなりな話だが、俺は実にデンジャラス&アグレッシブな人生を歩んでいると思う。

最初のデンジャラス&アグレッシブな出来事は、誘拐だ。
この日本で誘拐を体験した人は、非常に低確率だろう。

・・・・・・いや、この話は止めよう。

アレだ、胸糞悪い。

そして今日、俺は二度目のデンジャラス&アグレッシブな体験をする。

「じゃ〜な〜」

「ええ、またね〜」

俺は、以前に知り合った女性と別れ、帰宅の途についていた。
時間はすでに深夜だが、まだ人は何人もいる。

何故なら、この辺りは特殊な行為を行うために作られたホテルが建ち並んでいる場所だからだ。

俺がここで彼女と何をしていたかは、読者の想像にお任せしよう、プレイ内容も勝手に想像してほしい。

団体戦でもいいぞ、ああいう知り合いは何人もいるからな。

俺は軽快に夜の町を駆けていた。
もうラブホ街から離れ、人は俺しかない。
おそらく、昼でも人が少ないところのようだ。

・・・ここは露出プレイにもってこいだな、等と考えていると喧
しい轟音が鳴り響いてきた。

ISだ。

ISが隕石よろしく落ちてきた。

「いや、え、何で！」

と、言ってる場合ではない。
驚いている場合でもない。

幸い真上に落ちてきたわけではないが、驚きで的確なツッコミが思
い浮かばない。

と、言うわけで俺は二度目のデンジャラス&アグレッシブ
な出来事に遭遇している。

「・・・あゝもう、何か俺は悪いことでもしたのか？
・・・おい、糞神様よお、どーなってるんだ。それとも何か、俺はこ
ういう星の下に生まれてきてんのか？」

・・・愚痴っても仕方ないと考え、取り敢えず近づいてみた。
操縦者が居らず、動くことはない。

「軽く蹴ってみるか、触れるのはなんか怖いし」

警戒心と好奇心による戦いの末、俺はこのような選択をした。

ゲシッ

・・・ウィーン

動きだしたぞ？

言うまでもないが、俺は驚いている。

「・・・勘弁してくれよ、何で動くんだよ、面倒はゴメンなんだよ・・・」

・・・ISは女しか動かせないはずだろ。

篠ノ乃束博士が、作り上げたISは従来の兵器を圧倒的に上回る性能を持っていた。

さらには、とある天才馬鹿の仕業で日本に発射されたミサイルの山を、撃墜したのだ。

結果、世界の軍事バランスを消し飛ばした。

俺には、『女しか動かせない』と言う欠陥は決定的だと思うのだが・・・

しかし・・・俺の考えとは裏腹に女尊男卑の世界のとなった。

(・・・どうする、男がISを動かしたとなれば、面倒に巻き込まれるのは目に見えてんじゃねーか。・・・完全にモルモットだよ、絶対に各国が欲しがるに決まってる、・・・マスコミ共に視聴率集めの客寄せパンダにされること請け合いじゃねーか・・・パンダなんぞ、中国からレンタルする外交パンダだけで十分だよコノヤロー・・・)

はい、0・1秒考察終了。

そうして俺は一つの結論にたどり着いた。

「よしっ、蹴り壊そう、そして埋めてしまえ」

俺は他人が見ればイラツと来るような、ドヤ顔をしている。

・・・いや、ボケんのは止めよう、ツツコミがない。

いつもなら、千冬姉が暴力的ツツコミをしてくれるのだが・・・

そんなことを考えていると、再び轟音が鳴り響いた。

「・・・またかよ。もう驚かねえぞ。何が落ちてきても鋭くツツコんでやる」

落ちてきたのは、やはりISだった——ただ違うのは、明らかに敵意を持っていたことだ。

姿からして異形だ。

色は深い灰色であり、首がない。

肩と頭が一つと化しているのだ。

何より、世にも珍しい全身装甲だ。

そのISはなんと、俺に10本の指を向けている。

(・・・なんか嫌な予感がするぞ。)

その予感は悲しくも的中だった。

そいつの指から、豆のような何かが打ち出された。
それは正しく、ビームの機関銃の様だった。

「だアアアアッ、もう、んだよ、おい、神様よお、なんか俺に恨みでもあんのかぁッ、殺すぞオオオオ！！！」

虚しい悪態をつきながらも、猛攻を避ける俺はいつの間にか、最初に落ちてきたISの近くに来ていた。

瞬間だった。

そのISが俺を取り込んだのだ。

俺は一瞬、驚きを覚えるも怖くはない。

むしろ、日本刀の刃が鞘に収まるかのような安心感を覚えた。

すると、意識の中に凄まじい情報の数々が流れ込んでくる。
それが流れと来ると同時に、ISの装甲が俺に合わせるように変化して行く。

「操縦者確認

操縦者名 織斑一夏」

「シールドエネルギー正常稼働

シールドバリアー正常稼働

絶対防御正常稼働

スラスター正常稼働

ハイパーセンサー正常稼働」

「シルエットシステム使用不可

VPS装甲展開不可

武装 MMI - GAU25A / 胸部CIWS

M71 - AAK / フォールディンググレイザー対装甲ナイフ

MMI - RG59V / 機動防御」

「——全システムオールグリーン——」

「——ZGMF - X56S——インパルス——」——

——システム機動——」

もう装甲の変化は終わっていた。

初期設定の為か、その姿は至ってシンプルだ。

まるで色がないような、全身灰色だ。

大きな武器を持っている様子もない。

人の体に装甲をつけただけの様だ。

そして頭部に4本のアンテナがある。

ISの操縦は初めてだが、不思議と不安はない。

「——これが初期設定っつー奴か、……フハハハッ、
自分を使えと、この俺に言ってるわけだ……オーライ、俺の動
きに着いてこいよ、インパルス!!!!」

——衝撃が天空を駆けた——

それは鞘に納められた、刃が抜かれる様に。
それは水を得た魚の様に。

「武器は……CIWSとナイフだけかよッ、ケチ、女に嫌われ

るぞ、このIS」

相変わらず悪態をつきながらも、CIWSを謎のISに放った。
奴はCIWSを軽く避けると、インパルスに向かってきた。

「ハッ、来るか、いいさ、お望み通りの接近戦だ！」

俺はナイフを取り出すと、奴は無造作に蹴りを放ってきた。
俺は最小限の動きで蹴りを避けると、その足を掴み動きを封じ、ナイフを奴に振りかぶった。

「ラアアアアッ！！」

右肩に深くめり込んだナイフをそのまま振り抜いた。
これで右腕は動かないだろう。

しかし…………

「…………悲鳴がない…………成る程、無人か」

奴は血を出すこともなく、今度は左腕を俺に向けてきた。

「こいつ空気読めよ、せっかく達磨にして悲鳴を楽しもうと思ったのに…………けど、まあ、流石は無人ISだ。動きが直線的すぎるッ！」

奴が指ビーム（勝手に命名）を発射する直前に、俺は奴の手首を掴み、指をあさつての方向に向けることでビームを避けた。

「これを操ってるのは誰かは知らんが、俺からのささやかなプレゼントをくれてやる！」

俺は身動きのとれない無人ISに、これでもかという程のCIWSを撃って、撃って、撃って、撃って、撃って、撃って、撃って、撃って、撃ち尽くした。

元来、迎撃用のCIWSと言えども、これだけ撃てば十分過ぎるだろう。

と、言うかも、オーバーキルだ。

無人ISは最早、蜂の巣になっていた。
放っておけば蜂が来て巣にするかもしれない。

「さてさて、ここからが大変だ……チクショー、今日の朝からやり直してえ……時間よ、巻き戻ってくんないかね。」

——巻き戻るはずがない。

そんなこんなでこの俺、織斑一夏は千冬姉のツテで、IS学園に入学した。

『日本人が開発したISのせいで、軍事バランスが消し飛んだから、責任持って管理しろよ、技術は全面公開な!』と言う諸外国のために作られた学校だ。

相変わらず外交が下手すぎだ、日本。

最初は日本がISを独占保有してたんだからさ、うまく使えよ、と言いたい。

外交カードにも、抑止力にも、商売にもなるのに。

まあ、世界がどうなるうがどうでもいいか。

兵器一つでここまで混乱するような世界なんて、知るか。

まあ、少なくとも、このIS学園に居れば3年間は国際的面倒には巻き込まれないぞ。

女だらけだけど。

うん、まあ、ハーレムランドでも作ろうかな？

いや、面倒臭いな。

「・・・くん、織斑一夏くんッ」

「んー何」

呼ばれた。

あーそーいや、いまHR中だった。

俺に声をかけた女は、山田真耶と言う1組の副担任だ。

前から読んでも、後ろから読んでも、山田真耶・・・前も後ろも・・・と、言うことはアナルOKか

容姿は実に子供っぽい。（乳以外）

アレだ、中学生に高校教師をしる、と言えばこうなるだろう。

因みに最初に見たとき・・・『お前、見学しに来た中学生?』と言ったら、泣かれた。

「あ、あのツ、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるよね、あああああ、どうしよう・・・あのねっ、自己紹介が織斑くんの番なの、・・・だっ、ダメかな？」

生徒相手にあたふたぺこぺこしている。

・・・面白いな、この人、遊んでみるか。

「ダメッすね」

「えええええええ、どっ、どっ、どうしよう、どうしたら自己紹介してくれるんだろお」

訂正しよう、この人は小学生のようだ。

「まあ、まあ、落ち着けっつて、アレだ、真耶って呼んでいいなら考えてやらんこともないけど」

俺は山田真耶の頭に、手を乗せそう言った。

・・・完全に子供扱いだ。

「ほっ、ほっ、本当ですか？本当ですよ？真耶って呼んでいいから自己紹介して・・・くれるかなあ？」

「いいともオ！（笑っていいとも風）」

さて、真耶のせいで自己紹介することになった俺だが・・・なんも考えてねえな、等と考えながら黒板の前になった。

あー、クラスメイト全員、俺に注目してやがる。

やっぱこついうのは、掴みだよな。

「織斑一夏です」

……沈黙

女子全員が『まさか、これで終わりじゃないよね』的な目で見ている。

よし、こいつらで遊ぼう、と言う邪念が俺の心を支配した。

まあ、邪念に抗うつもりもないしな。

「以上ですッ」

ガタツガタツガタツ

注目していた女子数名がズッコケた。

——クククッ、計画通り——

「ひーふーみーのー、14人か、惜しいな、あと一人で半分だったのに」

ずっこけなかった女子と、真耶が怪訝な表情を……真耶は涙目だ。

その涙目な目で、軽く震えながら喋りかけてきた。

「なな、何してるんですかああ、何を数えて……」

「ああ、ずっとこけてパンツ見えてる人を数えてた」

「そそそそ、そんな不純なああああ」

「……HRがメチャクチャになった為か、もうマジで泣きかけてた。」

誰のせいになったんだろうか？……不思議だ。

まあ、そろそろ助けてやるか。

「まあ、まあ、俺はパンツなんぞ興味ない『そつ、それはそれで、不純……まさか、女子に興味がないんですか！？そつ、そんな行きません……ブツブツ……』……この女はどうやって教員資格を取ったんだろうか？」

副担任がこうなつては、HRどころではない。

まあ、俺の自己紹介は終わつたし。

そう思い、無責任にも自分の席に戻ろうとした時だった。

—————
パンツ
—————

叩かれた。

（この乾く響いた音……間違いない！）

「第六……天魔王……織田信『パンツ』」

叩かれた。

「誰が尾張のうつけか、馬鹿者」

この人は俺の姉である、織斑千冬だ。
黒髪の美人でスーツが良く似合う、きっと甲冑も似合うだろう。

第一世代IS操縦者にして、元日本代表、戦績無敗の世界最強の・
・ やっぱり魔王だ。
日本をミサイルから守ったのも千冬姉だ。

今はこのIS学園で教師をしている。
この人がここで教師をしていなければ、俺はここに入学することが
できず、面倒に巻き込まれただろう。
正直、助かった。

実のところ、俺の姉に対する感情は、尊敬や崇拜などと言う言葉で
表現できるレベルを越えている。
しかし、まあ、俺はそれを表に出すことはしない。

「山田先生、まずは落ち着け」
「はっ、はい、えーと、どうやって落ち着けば・・・・いやっ、大
丈夫ですっ、もう平気ですっ」
「そうか」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使いものになる操縦
者に育てるのが仕事だ。私の言うことは良く聞き、良く理解しろ。
出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を
十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは
聞け。いいな」

おお、長い台詞だ。
舌嚙まねえか？千冬姉

銀夢も文をつつのが大変だったみたいだ。

すると突然、教室から黄色い声援が響いた。

「キャ——！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」

随分と女子校的な雰囲気だな。

・・・ここは一応、兵器を学ぶとこだよな？

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

そんなこと言うと、また女共が反応するぞ、千冬姉。

「きゃあああああつ！お姉さま！もっと叱って！罵って」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

・・・俺とくっつけば千冬姉が本物の義姉になるぞ。

しかし、その時にお前たちを叱ったり、罵ったり、鞭で叩いたりするのは俺になるがな。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

お、喋りかけてきたぞ、魔王が。

「いや、真面目に挨拶する気がないだけだわ、千冬姉」

—— パアンツ ——

「織斑先生と呼べ」

「うえーい」

「……ん？教室が静まり返ってるぞ。
何かあったかね？」

「え……？織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男でISを使えるって言うのも、それが
関係して……」「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

「やっぱ、女子校みたいなものだから、煩いな。」

「そんなこんなで自己紹介が進み、チャイムが鳴った。」

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を
半月で覚えてもらう。その後、実習だが基本動作は半月で体に染み
込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ、
私の言葉には返事をしろ。」

「……千冬姉、ここはドイツ軍じゃねえぞ。」

—— 成田国際空港 ——

「ふう、……ここが日本かあ。」

その人物はフランスから日本の地へ足を踏み入れた。

人懐っこそうな顔、礼儀正しく、髪は金髪。

その髪を後ろで束ねている。

体は実に華奢だ。

しかし、彼とも彼女とも呼べる人物は、実に浮かない顔をしていた。

「……わた……僕は……日本に来てよかったのかなあ
?……織斑一夏くんに迷惑をかけることに……」

その独り言は、飛行機の轟音にかき消されていった――

第一話【駆け抜ける衝撃】

完

第一話【駆け抜ける衝撃】（後書き）

どうだったでしょうか、IS／DESTINYは

基本、後書きではどうでもいい雑談をしようと思います。
重要なことは前書きで書くと思います。

前書きなら必ず目にはいるでしょ？

まあ、雑談なんで堅苦しくなく行こうと思います。（、、）

顔文字、チヨー適当だけどあってるかな？

あってるな、うん。（^ー^）

では、次話でお会いしましょう。（^ー^）／

第二話【闘ぎ合う舌戦】（前書き）

何度もチェックしていますが、誤字があったり、読みづらかったりした場合は、ご報告ください。

第二話【鬨ぎ合つ舌戦】

休み時間

教室は異様な空気に満ち溢れていた。

彼以外が全員女子なのだ。

しかも、彼は『世界で唯一ESを扱える男』であり、連日ニュースに取り上げられている。

中国産パンダも、エリカ様もビックリの取り上げ方だ。

それだけでは、いざ知らず一夏はモテる。

DNAにモテ遺伝子でもあるのだろうか？

従って、クラスメイトは勿論、2年や3年の女子も集まっている。

その女たちが全員、『あなた話しかけなさいよオーラ』や『ちょっとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうねオーラ』を出している。

常人はこの空気に耐えられないだろう。

しかし、織斑一夏は気にしない。

彼の神経は図太いのだ。

例えば、アフリカの現住民族のと真ん中で『何をやっているんだ、あのへんなのは』的な目で見られながら、ウォークマンで音楽を聴きながら、ケータイでメールを打つことが出来るだろう。

「……ちょっといいか」

「ん？」

突然、話しかけられた。

教室中の女子が注目している。

『先を越されたあ．．．』とか『なに織斑くんに話しかけているのよ、あの牝豚あ！』とかが、聞こえている。
しかし．．．

．．．はて．．．誰だっ たっ け？

長いポニーテールに引き締まりながらも、年不相応の乳を持っている。

どこか日本刀を思わせる雰囲気を持つ彼女に、俺はどこか見覚えがあった．．．かもしれない。

「．．．．．」

「．．．．．」

．．．．．長い沈黙

「．．．．わ、私を覚えている．．．だろうか？」

俺はさすがに気まづくなり、何気なく窓の外に目を向けた。

．．．．校庭にうさ耳が生えていた．．．

（．．．アレだ、随分と個性的な校庭だ、学長か生徒会長の趣味か？）

現実逃避しても、うさ耳は消えない。

つか、あの天才馬鹿は何時からスタンバってんだ？

．．．うさ耳．．．天才馬鹿．．．妹．．．ほう．．．
あっ

思い出した、篠ノ之箒だ。天才馬鹿である篠ノ之束の妹だ。
6年前に引越した幼馴染みだ。

アレだ、誰が見ても俺に惚れている。

king of 唐変木でもなければ誰だって気づく。

ツンデレの上、デレたら顔を赤くするから、分かりやすい。

(・・・あー、そういやいたな、こんなん)

・・・もし喋ったら、恋する乙女の心を完全にブレイクするであろう言葉を、必死に喉に飲み込んだ。

・・・忘れてた訳じゃないからな。

ただ、記憶の引き出しから出すのに手間取っただけだ。

「・・・よ、よお、久し振りじゃねえか、箒。うん、ものすごい変わったから、俺、分かんなかったぞ、うん」

「・・・か、変わった?・・・」

「おう、可愛くなったなあ」

「そ、そうか。可愛くなったかあ・・・そうかそうかあ」

ほら、赤くなった。

しかも、髪を弄くり始めたぞ。

相変わらず、面白い恋の仕方だ。前みたいに遊んでみるか。

「そーいや、去年の剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」
「・・・」

テレレテッテレー、箒は更に顔が赤くなった。

「なんでそんなこと知ってるんだ」

「なんでって、新聞で見たし……」

「な、なんで新聞なんか見てるんだっ」

うわ、すごい無茶を言うなあ。

よし、ここで集中爆撃だ、空母を持ってこーい。
ニミッツ級な。

「……そうかあ、残念だなあ、お前の記事がないかなあって思
って、探してたんだが……もう探しちゃいけないんだなあ」

「いいいいいいいい、いやっ、さっ、探してくれて構わんぞっ。新聞
を見ないとばっ、馬鹿になるからなっ。うん、仕方ない、仕方ない
んだ」

今、箒を体温計で計ったら、40度はあるんじゃないだろうか？

これだから、こいつを弄るのは止められないっ、止まらないっ。

更に箒を弄くる方法を考えていたが、授業の始まりを知らせるチャ
イムが鳴ってしまった。

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家
の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法

によつて罰せられ――」

すらすらと教科書を読んでいく真耶。
なんだ、やればできるじゃないか。

うん、見直したぞ、真耶。

そんなことを考えている俺の机には、授業中だと言つのに教科書が置いていない。

周りの女子から『なんで、教科書がないんだろう？』とか『隣だつたら見せてあげられるのにつ！』等の視線が向けられている。

“授業”と書いて“ぼーっとする”と読むのだ。
従つて、教科書は要らんのだ。

俺は周りの視線を気にせず、校庭のうさ耳を見ている。

(……いや、まあ、うさ耳のおかげで箸を思い出したんだけど
さあ……)

……放つとくべきか、引っこ抜くべきか……

――
パアンツ――

叩かれた。

「授業を聞いているのか？貴様は」

出た、千冬姉だ。

……む、真耶が軽くうつるうつるおろおろしてるぞ。

「いや、全然、全く、これっぽちも、一切、欠片も聞いてねえ」

パンツ！

「……教科書が出てないが……参考書はどうした？」

む、真耶のうるうる度が上がったぞ。

「捨てた。エロ本を捨てる時のカモフラージュに、ちょうど良かったし。」

パンツ！

「……まったく……教科書6ページ、音読しろ、教科書を見ずにだ」

面倒くさ……いや、何でもない

「現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISだが、その中心たるコアを作る技術は一切開示していない。

現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは天才馬鹿……篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、いまだ博士以外はコアを作れない状況にある。

しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っている。

またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されている。……あーしんど、長えーよ」

む、女子が『すっごーい、織斑くんっ！』とか『キヤーツ！まさか

の教科書丸暗記イ!？」とか、騒いでるぞ。

「んんっ!、宜しい。山田先生、授業の続きを」

そんな騒ぎを咳払いで静め、戻ろうとする千冬姉に俺は小声で話しかけた。

「なあ、ところでさ、アレ、どこの天才馬鹿だ」

そう言い、校庭のうさ耳を指差した。

それを見た千冬姉は心底、嫌な顔をし……

「……知らんっ」

と言った。

……千冬姉は無視を決め込むつもりらしい。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……?」

女子が千冬姉に質問した。

いつか来る質問だと思っていたが……あ、筈が浮かない顔をしている。

まあ、当然だな。

IS技術を掌握している天才馬鹿が行方不明では、各国は気が気でない。

アルカイダやFARC等がISを持つたらえらいことになるし、逆に国が彼女を拘束すればIS技術の全てを手にいれられる。そうなれば、家族に対し執拗なまでの事情聴取が行われるわけだ。

従って、箒は連続引越しと言う嬉しくない旅に、出るはめになった。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

・・・それ答えたら、また女子が騒ぎ始めるぞお。

「ええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ISの操縦、教えてよっ」

ほら、馬鹿達が箒のところに集まり、モミクチャにされている。

うん、面白い光景だ、実に面白い、最高だ。

人のプチ不幸ほど楽しいものはない。

教えるつつても、箒はISに乗ったことないだろうし。

アレ、箒の顔が浮かない顔から、イライラ顔に変わってるぞ。

・・・大爆発寸前だ。

ここでキレればあいつはクラスで、軽く孤立するかもしれない。まあ、どうでもいいか、どうでも・・・どうでも

——ああっ、もうっ！——

「あの人はツ『はい、ちゅうもくつ!』……一夏?」

箒の怒鳴り声は、俺の声に遮られた。

予想外の人から声が発せられた事で、箒に集まっていた女子全員が俺の机に集まってきた。

「俺は箒の幼なじみだ。束の馬鹿については、箒より知ってるぞお」

この一言で、またもや女子が騒ぎ始めた。

「え、まじ、ほんとっ?」

「て、ゆーか篠ノ之博士を馬鹿呼ばわり!」

「ねえ、ねえ、篠ノ之博士ってどういう人?」

「おう、ありやなあ、人格破綻者だ。知り合っても、近寄るな」

俺が箒の代わりにモミクチャにされていると、箒がこちらを見ていた。

(一夏……たっ、助けてくれたのか……)

彼女は先程の怒りとは違う、全く別の赤い顔に変わっていた。

———— パァンツ ————

叩かれた。

「散れ、馬鹿者共。授業中だ」

千冬姉だ。

俺の机に集まっていた女子は、全員が自分の机に戻っていった。

——しかし、今の出席簿落とし（勝手に命名）は威力7割減だった——

——休み時間——

「ちょっと、よろしくて」

「いや、よろしくないですね」

「いやー、今日も平和に時が過ぎるなあ。」

「このまま、何もなかったらいいのになあ。」

「ちょっと、無視しないでくださいますか？」

「なんだよ、平和な時を邪魔しやがって。」

「お前やカダフィ大佐の様な奴が世界平和を乱すんだぞ。」

「と考えながら喋りかけてきた相手を見る。」

「長くロールのかかった金髪を持つ、いかにも面倒臭そうな女だ。」

「んー？だつて、よろしくないんだつて」

「あなたの意思なんて聞いてないですわ」

「だったら、最初から“よろしくて”なんて聞くなよなあ」

「まあ、なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのでから、それ相応の態度と言つものがあるんじゃないかしら?」

「・・・・・・・・」

ふっ、ふふふっ、この俺に舌戦を申し込むとは・・・・・・・・愚かな

絶望と悔しさのあまり、自殺に追い込んでやる。

「つか、誰」

まずは、軽いジャブからだ。
こいつは食らわなくていい。
大ダメージを食らわせるための布石だ。

「わたくしを知らない? このセシリア・オルコットを? イギリスの代表候補生のこのわたくしを? 恥ずべき無知ですわねえ」

「なあ、ヘルシア、無知な俺が質問」

「・・・・・・・・へ、ヘルシア?・・・・セシリアですわっ、なんですの、その痩せそうな名前は!?
・・・・・・・・まあ、いいですわ。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

おお、慈悲深いなあ、貴族様。

しかし、舌戦でベラベラ喋るのは良くない。

言葉が多いと、相手に付け入る隙を与えることになる。

相手の神経を逆撫でする言葉は、短く纏めろ。

「代表候補生って、何？」

ガタツガタツ。

聞き耳をたてていたクラスの女子が、数名ズッコケタ。

「あなたっ、本気でおっしゃってますの!？」

「おう、知らんもんは知らん」

さて、どういうリアクションを示す？

「信じられない、信じられませんわ。極東の島国と言うのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

ふん、馬鹿め。

俺は自分のこと以外、どうでもいいからな。
国を馬鹿にされても、痛くも痒くもない。

「で、代表候補生って？」「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……わ、か、り、ま、し、た、か」

「んなもん、最初から知ってるっつの、馬鹿じゃね？」

「あ、あああ、あなた、さっき知らないと言っていたでしょう!？」
「知らんな、俺は健忘症だから」

なんか、どんどん顔が赤くなっていつてるなあ。

筈とは違い、イライラから来る赤さだ。

舌戦と言うものは、オツムに血が上った方が負けるんだよ。

この程度の実力とはな。
残念だ。

「あああああつー！もう、なんて、腹立たしい男でしょう！？」

「やめるよ、お前、照れるじゃないか」

「誉めてませんわっ！」

なんだか、こいつ早口になってるぞ。

それに俺を直接に非難する言葉を放った。
追い詰められている証拠だ。

——最早、勝負は見えた——

「大体つ、あなた、この学園の入試で“唯一”教官を倒したこのわたくしに、よくもそんな口が聞けたものですわね！」

「む、俺も倒したぞ」

「・・・・・・はい？」

「いや、だから、俺も倒した。つーか、倒さなきゃ恥だろう、アレは」

ホント、あの教か・・・・真耶は馬鹿だったからな

——入試当日——

ISを動かしてしまった俺は、IS学園に入学するための試験を受

けに来ていた。

「あつ、試験を受ける織斑くんですねえ。私は……」

誰だ、この娘。

見学しにきた中学生だろうか？

「お前、見学しに来た中学生？」

「……は？」

「どうした、ここは見学しに来るとこじゃねえぞ。」

なんだ、この娘。

アレ、涙目？

ちよつと、親切に接してみようかな。

「お母さんとはぐれた？」

「……うええっ……ひぐっ、ひぐっ……うわあああ
ああん」

アレ、泣いた。

な、何で。

俺、なんも酷いこと言ってねえよな？

何時も人の神経を逆撫でする言葉を連発する俺だが、今は別に……
……面倒臭い……

（もう、知るか、知るものが、俺は行く、試験があるんだ。）

そう考え、無責任にも泣いている娘を放ったらかして試験会場へ向かった。

試験会場・・・と言つか、訓練場みたいなカンジだな。
広い、チヨー広い。

試験の内容は簡単だ。

ここで教官と模擬戦闘を行えばいいらしい。

「一夏、聞こえるか？」

この声は、俺をIS学園に連れてきた張本人、千冬姉だ。

「教官の準備が整った。発進しろ」

「うえゝい」

・・・しかし、随分と待たせやがったなあ、教官。
何してたんだろうか？

まあ、いいか、些細な問題だ。

「織斑一夏、インパルス、出るッ」

俺・・・そしてインパルスはカタパルトから、訓練場に出撃した。

空中に静止すると、教官が既に臨戦態勢で待っていた。

教官のISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』だ。
操縦者は・・・先程の中学生だ。

「・・・すいませーん、中学生がいます」

取り敢えず現実逃避だ。

「馬鹿者、その人はIS学園の山田真耶先生だ。貴様の試験教官を勤める人だ、因みに試験はもう始まっているぞ」

・・・まあ、やくざの娘やキャバ嬢、一桁の年齢の魔法使いが教師をやる時代だ。

中学生がやつても不思議ではない。

そう言うことにしておこう。

異論は認めん。

む、中学生教官がこちらを向いたぞ。

「・・・あのですね、学園の生徒から同年代に間違えられることは、よくあるんです・・・けど、中学生って言われたのは初めてなんですうううううう！！！！」

ラファール・リヴァイヴを駆る中学生教官は、作戦も糞もなく突撃してきた。

泣き怒り乳を揺らしながら。

訂正しよう、乳は大人だ。

よかったな、中学生教官。

そんなことを考えながら、突撃を軽く避けた。

そして、中学生教官の方へ向き直り体制を整え、ナイフを取り出す。

いくら中学生でも教官だからな。

僅かにやる気を出す俺。

・・・しかし

「フツ、フハハハハハッ」

今この瞬間、ゴングがなった。

俺の世界チャンピオンベルト防衛戦は、めでたく勝利を納めた。

俺は——ベルトを守り抜いた——

第二話【鬨ぎ合う舌戦】

完

第二話【鬨ぎ合つ舌戦】（後書き）

めでたく、一夏はチャンピオンベルトを死守しましたが……
・最後はかなりふざけてしまいました。

m (——) m マジすいません。

しかし、まあ、一夏の第への、僅かな、ホントに欠片ほどの優しさ
が見えたんじゃないかな、と思います。

彼もツンデレなのかもしれませんね？（自分で書いてて分からない）
(^ー^;))

次話では、あの人が出てきます。
もう、誰かお分かりでしょう。

校庭に生えている、あの人です。

あの人性格を再現するのは、大変でした。

それに、シリアスな雰囲気にもなります。
今まで、馬鹿一辺倒でしたからねえ。

では、次話をお楽しみに。(^ー^) ノシ

第三話【そこそこ楽しいこの世界】

ヘル……セシリアがトボトボと席に戻っていったすぐ後に、チャイムが鳴ってしまった。

あの女のせいで俺の休み時間が、潰れてしまったではないか。

「授業の前に、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

教壇には真耶ではなく、千冬姉が立っている。

……ん、クラス代表？……

「クラス代表とはそのままの意味だ。

対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……ま

あ、クラス長だな。

因みにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。

今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。

一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

千冬姉、残念だったな。

俺は向上心の欠片もないからな。

それにしても、なんて面倒臭い行事だろうか。

そんなことをやっても意味がない。

しかも代表に会議や委員会の出席をやらせるだと？

「……誰がなるかは知らんが、御愁傷様だ。」

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「……しまった、俺を推薦しないよう、さっきの休み時間に根回しするべきだった。」

「私もそれがいいと思います」

しかし、最早、後の祭りだ、何てことだ。
ちくしょう。

セシ……ヘルシアの奴が休み時間を潰しに来なかったら、このような事態は避けられたというのに。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ、いなければ無投票当選だぞ」

「……どうする……これでは、『嫌だ』と言っても、千冬姉は『他薦されたものに拒否権はない』とか言ってくるだろう。」

「……ふん、そうだな……ヘルシア・オルゴールに押し付けてやるッ！」

「待ってくだッ『俺はヘルシア・オルゴールを推薦しますッ！』……」

「へ、ヘルシア・オルゴール？……何時まで、そのネタを引っ張れば気がすみますのッ、貴方はッ！！」

む、ゲッソリ顔から復活した。

「つか、この女、何か言いかけてなかったか？」

まあ、なんでもいいか。

「とにかく、このような選出は認められません！」

大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

ふん、既にお前との勝負はさつき終わったからな。

俺の完全勝利だ。

完膚なきまでに叩き潰してやった。

最早、負け犬の遠吠えにしか聞こえんな。

「実力から行けば、わたくしがクラス代表になるのは必然。

それを、物珍しいからと言う理由で極東のイエローモンキーにされては困ります！」

わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ほう、クラス代表をやりたいのか。

向上心があつて良いことだ。

なあ、ホワイトモンキーよ

「いいですか！？クラス代表は実力トップになるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

そうだ、そうだ、お前がやれ。

俺は絶対に嫌だ、死んでもやらねえぞ。

なんか、耳が痒いな、確かポケットに綿棒が――

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛で――」

ほじほじ

ああああ、サイコー。

あ、デケーの取れた。

「……しかし、いつまで大英帝国時代を引き摺ってるんだか……あのメス豚は……」

「――今、何て言いました？」

……俺の独り言にメス豚が反応してしまった。

しまった、聞こえていたのか……

この地獄耳め。

ヘルシアの方へ向くと、怒髪点をつくと言わんばかりのセシリアが、顔を真っ赤にして怒りを示していた。

仕方ない、宥めるか。

「アレだ、とにかく落ち着け。なあ、“英国痴女”だろう」

ん、教室がシーンと静まり返っているぞ。

「あつ、貴方という男はああああつ！――！――」

・・・何故、怒る。

祖国が好きなんだろう？

“英国痴女”と言われて、嬉しいはずだろう。

それなのに・・・

なんて、理不尽な。

・・・いいだろう、もう一度、舌戦だ。

「ふん、て、ゆーか、アレだよな。イギリスはさあ——」

「なんですのっ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

・・・よし、食いついてきた。

「いやなに、お前みたいな奴が代表候補で、エリザベス女王も災難になあ、ってこと

即ち、イギリスじゃなくてお前個人を馬鹿にしたんだ。」

「——決闘——ですわ——」

ん、何かあり得ない幻聴が聞こえるぞ。

・・・ケットウ？

血統書付きの犬が欲しいのか？

血糖値の値でも悪かったのか？

「聞いているのですか？・・・決闘だと言っているのです」

・・・

い、嫌だ、無理だ、止めてくれ。

あ、ダメだ、鳥肌が立ってきた。

決闘って、お前……正々堂々の代名詞じゃないか。
そんな愚かなことが出来るものか。

戦いとは、敵の腸が煮えくり返る様な卑怯なやり方で、しかも楽しんで勝つ事こそが正義なんだぞ。

くっ、吐き気がするぞ、ちくしょう。

絶対に回避してやる、回避してやるからな。

「イヤ、アレだ。

クラス代表の座は譲るからさあ。

そんな決闘だなんて物騒なさあ。

さっきの謝るからさあ。

貴族がそんな野蛮なこと言っちゃ駄目でしょうが」

……セシリアの怒りは全く収まらない。

「……貴方は、絶対やりたくないのですね。貴方のその台詞は弱虫の台詞ですわよ」

……彼女の怒りは、言わば静かな怒りだ。

休み時間の時の、噴火の様な激しい怒りではない。

こうというのが一番、宥めづらい。

「その通り。俺はお前より弱いでもいいからさあ」

くっ、吐き気でいつもの調子がでない。

人の神経を逆撫ですることは得意だが、怒りを沈めるのはあまりや
ったことがない。

うええ、マジ吐きそう。

「…………織斑」

ち、千冬姉、助けてくれるのか？

ああ、千冬姉が女神に見える。

——いや、この人の性格はわかってる——

「やれ、嫌も降参も認めん」

最早、俺に拒否権はなかった。

……仕方ない、極力、手軽に勝つ方法を考えよう。
そう、考えを纏めた時だった。

「なんなら、ハンデをつけてあげましょうか？」

セシリアが救いの手を差しのべたのだ。

さすが、貴族だなあ。

「じゃ。攻撃すんな、防御すんな、回避すんな、ただただ俺に殺られろ」

うん、完璧だ。

これで吐き気も収ま…………

「それはハンデとは言いませんわ…………ハンデは要らないと言うことですわね」

・・・ちッ

どうやら、俺は自分でも気づかぬ内にイライラを溜めてるようだ。
アレだ、最高のストレス発散方法は、なにかを徹底的に壊すことだ。
取り敢えず、あの女を決闘という舞台で、拷問してやろう。

「ねー、織斑くん。セシリアに謝って、ハンデ付けてもらったら？
でないと代表候補生にはとても・・・」

斜め後ろの女が話しかけてきやがった。
その表情は苦笑と失笑の混じったものだ。

瞬間、俺は名も無き女の顎を指で掴み、上向かせた。

さらに、その女の顔に俺の顔をキスのギリギリ手前まで近付けた。

「・・・おい、おい、まさか、この俺がああメス豚ごときに劣る
とでも思ってたのか？・・・取り敢えず黙って見てろ。・・・
・返事は？」

ぶんぶんぶんぶん。

彼女は必死に頭を縦に振った。

「決まりだな。では勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナ
で行う。異論はないな」

その時に一夏が醸し出していた雰囲気は、千冬の雰囲気と同じモノ
だった。

教室を絶対的な威圧感のみで、押さえつけていた。

フフ———今から———決闘が楽しみで仕方がない——

放課後

俺は一階の下駄箱の靴に手をかけていた。

相変わらず周りの女子が、俺に視線を向けており、一部が声をかけようとしている。

「あつ、あれ、あの織斑一夏くんよつ。千冬様の弟らしいわよつ。」

「なんか、なんかぁ、代表候補生に喧嘩を売ったらしいわよ。流石に負けんじやない？」

「けどお、喧嘩を売った時に織斑先生並の威圧感出してたらしいわよ」

「……ああ、しんどい。」

今にして思えば、決闘に勝ったところでクラス代表だからなあ。

勝ったら地獄の釜で煮られ、負けたら閻魔に雷を下ろされる。

どっちも良いカンジの、晚餐になるだろうな。

はあ……八つ当たりの相手がいるだけマシでしょう。

そんなことを考えながら家に帰るため、校門に来た俺の前に、うさ耳があった。

（ああ、忘れてた）

つか、さっきとあった場所が違うぞ。

・・・む、何か書いた紙が貼ってある。

『いい加減、引っこ抜いてくれないかなあ。普通、放課後まで放つたらかす？』

って書いてある。

死ね、この馬鹿。

俺は徐に鞆から、スプレーの様なものを取り出した。スプレーには『さわるなキケン』とだけ書いてある。それをうさ耳に放った。

なんと、スプレーから炎が発射された。

無論、うさ耳は無事ではない。

『侵略すること火のごとし』という言葉にもあるように、どんどんと燃やしている。

すると・・・

「ギヤアアアアアアッ、アッッ、熱いよおおー！！！！」

と言う女の悲鳴が響いた。

ああ、女の悲鳴は素晴らしく心地良い。

もつと泣いてくれ、泣き叫べ。
心が洗われるようだ。

あ、スプレーの中身が無くなってしまった。

すると、

「いいいいいつ、いつくん！？前にも増して性格が悪くなってるよ
おっ！？」

土の中に埋もれていた、うさ耳の主が出てきた。

青と白のワンピースという、不思議の国のアリスを彷彿とさせる格
好だ。

取り敢えず、ピーコにファッションを貶される。

……この女こそがISの産みの親にして箒の姉、篠ノ之束だ。

「むむむ、うさ耳が燃えっちゃったよ。ガサゴソツと」

そう言うと、何処からともなく新しいうさ耳を取り出すと、頭に装
着した。

「つか『ガサゴソツ』って、口で言わんで良い。」

最早、見た目がなんなのか、何がしたいのか、どうしたいのか、何
の病気なのかが分からない。

今すぐ病院を紹介してやりたい。

俺って優しいなあ。

「む、今なんか失礼なこと考えてたでしょ。まあ、そんな事ど

うでも良いんだよ。てか、それなんなのかな、そのスプレー」

「・・・ああ、これ。アレだ、スプレーにオイルライターくっつけたカンジのやつでな、小さな火炎放射機だ。」

「ひどいつ、いつくん、ひどいつ。それ人に向けるものじゃないよお。おかげでまともな登場ができなかったよー！」

「・・・うるさい

こいつは人の話を聞きやしない。

しかも場の空気をムチャクチャにしようとする。

以前、千冬姉に俺と束は『雰囲気ぶち壊しコンビ』だと言われた事がある。

この女といっしょくたにされるとは・・・俺の人生の汚点だ。

「むう、いつくん、人の話を聞いてなーい。」

「あー、もう、いいから用件だけ言えや。『なんも、用事はありません』なんてほざきやがったら、殺すからな」

「あゝ、いつくん、せっかち『死ね』うゝ、仕方ないなあ。いつくん、IS動かしただってゝ、凄いなゝ、私も予想外！」

「まさか、それだけか」

「うん！」

ふん、相変わらずの馬鹿っぷりだ。

「・・・なら、俺の“聞きたい事”でもぶつけてやるか・・・

「・・・なあ、聞きたいことがある・・・あのISは俺に馴染む。まるで俺のために作ってあるようだ・・・どこの天才馬鹿が作ったのやら」

「ホント、どこの天才が作ったんでしょうねえ。けど馴染んで当然

だよ。そう作ってあるからねえ」

「……否定はしない……か……」

「……まだ気になることは残っている。

なんというか、世界の努力を無にしてしまうことなのだが……
まあ、こいつならあり得る。」

「……入学前にな、こいつのスペックが気になって調べたんだが、公開されている第三世代ISのどれよりも上だった。」

そう言いながら、俺は首に着けた翼のようなバッジを見せた。
待機状態のインパルスだ。

「あつたりまえだよ」。

ISの完成を目的とした第一世代。

後付武装による多様化、これが第二世代。

そして、今、世界が頑張ってる第三世代は、操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装。

けどね、けどね、なななんと！

インパルスはパッケージ換装を必要としない万能機を目指した“第四世代”なんだよ。えっへん」

「ふうん、第三世代開発に夢中な人類も可哀想にな。一人の馬鹿に振り回されて」

ほんと、この場にペンタゴンの開発者連中なんかがいたらどうなるだろうか。

取り敢えず死にたくなるだろうな。

「インパルスはまだ初期設定みたいだけど、一次形態になったら凄
いよー。」

まず、凄いのはシルエットシステム！

これこそが、第四世代の証！！

旧世代は、様々な戦闘状況に合わせてパッケージを装備して、しか
も調整しなくちゃならなかったんだよねえ。

けどこれは、機体のバックパックや装甲を瞬時に粒子化、再構築す
ることで見た目や機体性能、武装そのものを変更できるんだよ。

ほとんど、別のISになるわけだね！

シルエットはパッケージみたいに開発する必要がないからね、シル
エットのプログラムを構築すれば良いだけだから簡単簡単ちょー簡
単♪

まあ、普通の技術者なら一つのシルエットを構築するのに、一週間
程かかったちゃうと思うけど。

次にヴァリアブルフェイスシフト装甲っていう特殊装甲があるんだ
けどね。

これは、エネルギーを消費して電流を流して相転移させることで、
物理衝撃を無効にできるよお。

これのおかげで、ビーム兵器以外にはシールドバリアや絶対防御を
使わなくていいのだよー。

正しく、世界最強のISなのだっ、驚いたっ！」

自分で驚いてどうする？

……しかも長い……

作中で一番長い台詞だろう。

作者も読者も俺もうんざりだ。

小学校の校長先生の話が可愛く見える。

最早、ちよつとした拷問だ。

……しかし、聞きたいこともこれで終わりだ。

「……インパルスを初めて動かしたとき、襲ってきた無人工
Sはなんだ？」

「なんなんだろうねえ。」

僅かに二人の雰囲気が変わった。

一夏はいつもの悪態を吐かず、ただただ聞きたいことを淡々と聞く。
束は“ほとんど”変わらない、いや……。ほんの僅かに変わった
というべきか。

二人の変化には千冬ぐらいしか気付かないだろう。

「そんなの、居たんだ？」

「ああ、居たんだ。」

今は、学園の地下50メートルの空間にある。

そこはレベル4権限を持つ者しか入れない場所でな、解析の結果、
登録されていない“468個目”のコアを持っていた。

……。コアを作るのはアンタだけだろ。」

「凄いな、凄いわ、そんな事知らなかったよ。」

「いっくんはレベル4権限を持っているんだね。」

「……。クラッキングさ、アンタなら俺よりうまくやるだろう。」

「あゝ、クラッキングう。いっくん、悪い子あ。」「12カ国の
軍事コンピュータを同時クラッキングした、アンタには言われた
くないな。」

長い長い沈黙

「ねえ、いつくん。今の世界は楽しい?」

「そこそこだな」

「そうなんだ」

「少なくとも、アンタよりは楽しいな」

「なにげに一番ひどいっ!」

先程までの雰囲気は、なんだったのだろうか?

二人の雰囲気は、元に戻っていた。

すると……

「おつ、おつ、織斑くーんっ!!はあつ、ふうっ、やっと見つけた
ああああ!!」

あ、真耶じゃないか。

真耶が俺のところに走ってきたのだ。

あ、揺れてる、揺れてる。

「じゃ、そういうことで束は帰るね」

「ああ、帰れ。そして二度と戻ってくるな」

天才馬鹿はスッタタタ〜ッと、校門の外へ走り去っていった。

天才馬鹿が見えなくなると同時に、真耶が息を切らしながら俺の所で立ち止まった。

一体、何の用だろうか。

「ふうっ、ふうっ、おっ、織斑くんっ。教室で伝え忘れてたことがあって……今、誰かいませんか？」

あー、この学園はセキュリティ厳しいからな。

仮にも各国のホープを育てているからな。

厳しくて当然だ。

「いやいや、誰も居なかったぞ、真耶。眼鏡、変えたらどうだ」

そう言っと、真耶はいかにも怪訝な表情を浮かべた。

アンタがそんな顔をして、真剣さがでないな。

「うーん、ホントですか……。あれ、真耶って呼んでませんか？」

「勿論、呼んでいいつつたじゃん。それともなに、俺じゃダメか？」

「ええっ、あの……下の名前だなんて……。そう言うのは互いの事を良く知ってから……。ですね……。アレ？」

空に……。ニンジンが飛んでいた。

えー、うん、あの馬鹿、何してんだ、どんな帰り方だよ。

「あっ、あの……。アレはなんなんでしょう……。」「

「……。俺にふるなよ」

アレだ、F・2にでも撃墜されてしまえ、あの馬鹿。

第三話【そこそこ楽しいこの世界】

完

第三話【そこそこ楽しいこの世界】（後書き）

第三話、お楽しみいただけただけでしょうか？

今回、束が出てきましたが・・・

性格をうまく再現できたか、不安で一杯です。f（^ー^）；

もうお分かりでしょうが、第一話で一夏を襲った無人ISは、原作一巻で鈴との試合中に乱入した無人ISに関係があります。

まあ、現時点ではこれぐらいしか言えませんが。

原作の無人ISは、登録されていないコアでしたが、ということは“468”個目のコアということではないだろうか、と思っただけです。

たぶん、確認されてるコアは国際IS委員会かなんかが、登録という形で数を確認しているでしょうし（数を確認していなければ国際機関として無価値）。

そして、コアを作れるのは束だけなら、原作の無人ISを作ったのは束ではないだろうか？、と私は考えたわけです。

亡国企業がコアを作れるなら、アメリカやイギリスなどの大国から、強奪という危険なことをせずに、自社生産すればいいのですから。

・・・自分で言うのもなんですけど、長ったらしい考察ですね。
（^ー^；）

では、第4話で会いましょう。（^ー^）ノ

第四話【1日の終わり】

俺と真耶はニンジンミサイルが雲に隠れて、見えなくなるまで、ぽかぽかと見つめていた。

近い未来、都市伝説として広まらないだろうか？

「世の中って色々あるんですねえ」

「そんな色々は知りたくねえよ」

まあ、いい、やっと帰れるぞ。

さっさと、家で寝よう。

そう決意を固め校門を出ようとした。

真耶の用事なんて無視だ、知るものか。

等と身勝手な事を考えていると、真耶が必死に止めてきた。

「ちよつ、ちよつと、かつ、帰らないでくださああいつ！」

「・・・何々、行ってほしくないわけ？朝まで帰さないわよ的な？」

「いやいやっ・・・あのっ、そういう的なカンジではなくてですねっ、・・・あつ、いえ・・・ブツブツ・・・」

よしっ、真耶がフリーズした。

今のうちに帰ろう。

「あつ、ちよつ・・・待って、待ってくださああいつ！これ伝えないと、織斑先生に叱られるんですうう！」

真耶の奴が帰ろうとする俺にしがみつき、泣きながら止めようとし

ている。

つか、先生が先生に叱られてどうする？

小学生か、お前は。

……仕方ない

「……はあ、何？」

「いや、あのですね。家に帰っちゃダメなんです。」「……あのさあ、主語いれた方がいいぞ。状況説明も」

先生が生徒に叱られてどうする、幼稚園児か？

「あつ、はっ、はい。」

え、政府の要請で部屋割りを無理矢理変更しまして、相部屋なんですけど寮に入ってほしいんです。

すぐに個室を用意するんで、それまで我慢してください。

それと、荷物は織斑先生が送ったそうなんで、心配しないでくださいイイツ、痛あ、しつ、下咬んだあ」

そんな急いで喋るからだ、バーカ。

「ああ、それと申し訳ないんですけど、女子のいる大浴場は使わないでください。部屋にシャワールームがあるので……」

「……なに、じゃあ、アレか？風呂に入りながら酒を飲んじゃダメなのか？」

「いや、元から駄目ですよ。織斑くんは未成年ですし、酔って溺れますよ」

「けど、大浴場は別にいいと思うんだけどなあ……アレだ、この学園の女子はな、俺が迫れば嫌とは言えないんだから」

正しくその通りだろう。

それどころか俺が迫れば、全女子が尻を向けてくれるだろう。

「そつ、そんなつ、迫ればつてえ！？・・・いや、まあ、それは断りきれませんかもしれませんが・・・」

あれ、なんか日本語おかしいぞ。

『断りきれませんがもしれませんが・・・』つつたし、ホントに教師？

まあ、いいか、寮でも何でもいいから帰ろう。

「じゃ、また明日」

「あつ、大浴場は駄目ですからねー！ほんと駄目ですからねー！聞いてますー！？」

まあ、別に風呂は日本人の魂などと言う考えはないしな。
大浴場はどうでもいいか。そんなことよりも、さっさと寮で羽を休めよう。

学生寮

「1025、1025つと、ここか」

部屋を確認した俺は、ドアに鍵を差・・・..
いや、相部屋だったな。

ドアに手をかけると、思った通り開いていた。

そこら辺のホテルよりずっといい部屋だ。
まず、大きめでふかふかのベッドが二つ並んでいる。

他に、簡易キッチンやシャワールーム……は同居人が使っているようだ。

あ、段ボールがベッドの横に置いてある、俺のだろうか？
まあ、後回しだ。

「誰かいるのか？」

シャワールームから声がかかった。
……ん、聞き覚えのある声だ。

「ああ、同室になったものか。これから一年よろしく頼むぞ」

うむ、ヘルシア・オルゴールと違い、ちゃんと人間の挨拶のできる女のようなだ。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之……」

ああ、なるほど。

声の主はこいつだったか。

「よう、第」

シャワールームから出てきたのは、再開した幼馴染みだった。直前までシャワーを使っていたため、髪を下ろしている。

そして、その姿はバスタオル一枚だ。
大切なことなので、もう一度言おう。
バスタオル一枚だ。

そのバスタオルは、実に面積が小さい。

無論、色々と隠せないでいる。

シャワーを浴びていたのを証明するように、水玉がお尻から太ももへ滑り落ちる。

その上のくびれた腰は、剣の道を行く者の体をしている。

引き締まり、なおかつ女性的なラインだ。

そして胸にスイカがある。

デケースイカだ。

もう、説明はいらない。

素晴らしいスイカだ。

Oh , y e a h !

「・・・・・・・・」

む、どうしたんだろうか、箒は？

キョトンとしているぞ。

なにかビックリすることでもあったか？

たしかに、タイミングの悪いことこの上ないが・・・・・・・・

「い、い、いちか・・・・・・・・・・・・？」

「一夏だが？」

また顔が赤いぞ、箒の奴。

・・・・・・・・いや、真っ赤を通り越しそうだ。

箒の脳内でチエルノブイリ原発事故でも起きたか？

相変わらず、こいつはウブな奴だ。

「っ……！？見、見るな！」

「んゝ」

箒はサッと、体を隠すように（いや、守るように……俺をケダモノと勘違いしてんのか）後ろを向き、タオルできつく自分を抱き締めている。

後ろを向くのはいいが、俺は尻が大好きなんだ。
その尻が丸見えだぞ。

「な、な、なぜ、お前が、ここに、いる………？」

なぜか、『ギギギ』という音が聞こえてきそうなくらい、機械みた
いな動きをする箒。
面白いなあ。

「……そうだな、うん、同棲？」

「どっ、どっ、どどどどどーせー！！？」

「……んー、アレか、夫婦？」

「ふっ、ふっ、ふふふふふふーふー！！？」

あー、やべ、人間って面白っ！

……む……壁に立てかけてあった木刀を手に取ったぞ？
しかも、なんか呻いてるぞ？

「……う……」

「う？」

「うううううう」

「うっうっうっうっ。」

「うがあああああああつ！！！！？？？」

「わお」

箒はくるり一回転して上段打突の構えをしている。

そこから基本に忠実な低腰短歩で一氣に間合いを詰めてくる。

まあ、流石、全国剣道大会優勝者。

「つか、そんなことしたら……ほら、タオルが床に落ちて体が丸見えだ。」

「バシッ！」

「お前さ、お前さ、ツッコミつてのを根本的に勘違いしてるぞ。」

俺は真上から迫り来る木刀を、真剣白羽取りで受けたのだ。

さらに、木刀から手を離し箒の手首を掴み、身動きがとれないようにする。

箒は今、生まれたままの状態だからな……襲うか？

「ちよっ、はっ、離してくれ。たっ、頼む。ふ……服を」

（みつ、みつ、……見られたっ、裸全部……あああああっ！？）

渾身の一撃を放ったのにも関わらず、それを軽く封じられた箒は……
……悔しいつか、顔真っ赤で分かんないな。

俺が手を離すと、電光石火の早さで服を着た。

「それにしても．．．そうか、嫌か。そんなにも嫌か、俺と同室は」

「あああつ、あのつ、違うぞ。同室になったのならしつ、しつ、仕方がないからなっ．．．いや、寧ろ、よっ、よっ、よっ、喜ばしいっ．．．おっ、」

「お？」

「お前から、希望したのか．．．？私の部屋にしろと．．．」

．．．もう、顔真つ赤にしてやるのは止めるか。
次は、頭を冷やしてやろう。

「そんな馬鹿な」

「馬鹿．．．馬鹿だと？そうかそうか．．．」

俺は神経を逆撫でしてやろう、と思った。
だがしかし、冷やしすぎたらしい。

沖田総司もビツクリの突きが放たれたのだ。

「．．．あれだぞ、お前。剣をたしなむ者が、剣で丸腰の人を傷つけていいと思ってるのか？」

俺は木刀を避けながらドアへ下がりながら、説得を続ける。

しかし筈の顔は、血管が浮き出すぎて、血が間欠泉の如く出そうになっている。

これ、キレてんな。

今すぐ、八つ当たりのためのサンドバッグが要るぞ。

そう考えた俺は、サンドバッグ探しの旅に出るため、ドアを開けて廊下に出たのだ。

「なになに、織斑くんだあ」

「えー、ここつて織斑君の部屋なんだ！いい情報ゲットー！」

たまたま、廊下を歩いていた名も知らん女子二人が俺に気づいた。

お、中々に良い格好をしているな。

一人は長めのパーカーを来て、下にはズボンでもスカートも穿いておらず、逆三角形のものが見えていた。

もう一人は、羽織っただけのブラウスから肌色の胸元が見えている。

・・・しめた

「いや、まいったよ。ルームメイトに追い出されてな」

「えゝ、かわいそゝ」

「何で、追い出されちゃったの？」

「わからん。しかし今日はどこで一夜を過ごそうかなゝ・・・」

そつだ、お前らの部屋で過ごしても良いか、いいよな」

俺が爆弾発言をすると、女子が二人が顔を赤らめた。

「ふえつ、私たちの部屋につ？」

「いつ、嫌じゃないけど、寝るところどうしよう？」

「一緒に寝りゃ良いじゃん、同じベッドでさあ」

「マッ、マジ！？」

「キヤー！生きててよかったああ。じゃない、もう一度シャワー浴びなきゃあ」

「ああ、それと、俺の夜はマニアックで激しいからなあ」

「「キヤ——！！！」」

ふつ、チヨ口いな。

ほらな、真耶。

俺が迫れば嫌とは言えないんだよ。

女子とワイワイ騒いでいると、俺が追い出された部屋の扉が開いた。

「いつ、一夏……」

当たり前だが、筈だ。

部屋を飛び出してから、音沙汰のない俺が気になったのだろうか？

「いつ、一……夏……何をしている？」

俺が女子二人と仲良くしているのが気に障ったようだ。
所謂、嫉妬というやつだ。

「ああ、部屋を追い出されちゃったからさあ、この二人と夜を過ごそうかな」と

「……ふ……ふふつ、そうか。お前は相変わらず、人の神経を逆撫でしようとする……」

鬼神だ、鬼神がいる。

木刀を強く握りしめ、俺と女子に殺意を込めた目で見つめている。
女の嫉妬って怖いよなあ。

なんだか、昼ドラみたいだ。

と、まあ、そんなことを考えている暇はない。

命がヤバイ、いや、マジで。

うん、仕方ない。

「なあ、俺はお前たちを愛している」

「ふえっ！」

「今、なんて……」

俺の告白に顔を真っ赤にする女子二人。

……許せ、名も知らぬ女子よ。

「だから、俺のために死んでくれ」

「はい？」

「あの鬼神のサンドバッグになってくれ」

「……え……」

「じゃ、そういうことで」

そう言い残すと、俺はすぐにその場を離れた。

その時の俺は、それはもう清々しい笑顔だった。

「ちよっ、織斑くん!？」

「……どっ、何処に行くの!？」

後ろで、俺を呼ぶ声が聞こえるが、そんなことは気にしない。
罪悪感?、そんなものはない。

後、面倒臭いから骨は拾わねえ。

それとも冗談でも『くっ、お前たちのことは忘れない』って言う
けば良かったかな?

残された女子二人は、走る一夏をぼーぜんと見つめていた。
二人は何も喋らない、いや、喋れないのだ。
後ろに振り向くと、鬼神が立っているからだ。
恐ろしくて喋ることも、振り向くこともできない。

しかし……。鬼神は彼女等に慈悲を恵むことはない。

「ううううう、あああああ……。ガアアアアア！……！」

「イヤアアアアアアア！……！！……！！……！」

合掌

一時間ほど時間を潰した俺は、自分の部屋に戻ってきていた。

あの女子二人は生存しているだろうか。

もしや今頃、食べ頃になっているのではないだろうか。

木刀で叩かれ続けて、ネギトロみたいなカンジになって。

可哀想に、ご冥福をお祈りしたいが……。まあ、いいか。

少なくとも、もうそろそろ逆鱗は収まっているだろう。

そんなことを考えながら、俺は部屋の扉を開けた。

「よう、篝。」

「成敗してくれるっ、この外道!!」

木刀が目の前に迫る。

また突きだ。

まだ完全に収まってないのか。

無論、それに当たってやる理由はない。

体を横にずらし突きを避けると、後ろに回り込み箒の両腕を掴み拘束した。

ちよつと落ち着かせてやるか。

「やっぱ、暴れた後は汗をかくな。シャワーを浴びようか。」

そう言うのと、俺は箒を拘束したまま脱衣場に入ろうとする。

「ちよつ、なつ、何をっ!？」

「いやなに、俺もシャワー浴びなきゃな、と思って」

箒の顔はみるみる赤くなっていく。

どうやら、怒りよりもドキドキの方が上なのだろう。

俺が迫れば、嫌とは言えないんだよな。

「だからっ、てっ、一緒に脱衣場にはいる必要はっ、……………はっ、離せっ!」

「別々に入ったら水がもつたいないでしょーが。世界には泥水を飲んで、暮らさなければならぬ子供たちもいるんだぞ、可哀想だぞ」

そんな心にもないことを言い放ち、簾を脱衣場に引きずり込んだ。

「そつ、そつ、そうかつ、世界のためだつ、仕方ない……」
「そうか、嫌か。じゃ、ごゆっくり」

俺は簾を残し脱衣場を出た。

脱衣場で簾がブククサ言っているが、気にしない。
と、いうのもこの部屋でやるべきことがあるのだ。
簾に見られるのは少々マズイ。

俺は部屋のコンセントに近づいた。

そこに刺さっているテレビや充電器等の電源を、引っこ抜いた。
更に、コンセントのカバーを外した。

そこには、通常のコンセントにはない、見慣れぬ小さな機械があった。
俺はそれを外し、指で押し潰した。

それは——盗聴器だ——

俺がISを動かし、世界の注目的になってから、各国大使や国防関係者、明らかに身分を偽った者たちが家に押し掛けるようになった。

国際IS委員会は俺をどこの国の所属にするか、勝手に決めようとまでしているのだ。

無論、この国……そして、公安警察は気にくわない。

奴等は『もしかしたら怪しい可能性がある……かもしれない』
という段階で徹底監視を始めるからな。

これまでも、ハムの監視をあしらったのは一回や二回ではない。
ああ、因みに『ハム』とは、公安警察の『公』の文字を崩すと『ハム』になるため、そう呼ばれている。

そんな考えを張り巡らしながら、部屋中の盗聴器を破壊した。

「……まったく、一夏の奴め。ますます、性格が悪くなりおつて」

箒は女子二人への裁きで汗をかいたため、二度目のシャワーを浴びていた。

先程、一夏に晒した裸体を水が滴り落ちる。

「……なんで、あんなのに惚れ……まあ、時折、優しいが……」

箒は今日の授業中の出来事を思いだし、一夏への思いに耽っている。

篠ノ之束の話が出てきたときに、一夏が箒の言葉を遮らなければ、あのまま怒鳴ってしまっただろう。
そうなればクラスで孤立した筈だ。

「……昔からそうだ。ああ、もう、ズルい奴だ……やっぱ、シャワー一緒に……」

箒はシャワーと一緒に入らなかったことを、今さら後悔している。

（……一緒にシャワーに入ってたら……もしかしたら、今

日・・・・・・・・・・一夏と)

自分の破廉恥極まりない妄想に、顔を真っ赤にしていく筈。

「いやっ、駄目だっ、なんと破廉恥なっ！・・・・・・・・同居はまだ当分は続くんだ・・・・・・・・あっ、焦ることはない！」

・・・・・・・・この決断をした今の自分を、呪うことになろうとは、このとき筈は微塵も思っていなかった。

一夏はベッドに寝転びながら、待機状態のインパルスを見る。

(・・・・・・・・インパルスと無人ISは束が作ったものと仮定して・・・・・・・・何故あの時にインパルスが落ちてきた？

そして、何故あの無人ISは俺を襲った？

それに、戦闘に送り出すには素人の俺でも、倒せる程度の完成度だった。

インパルスを破壊したいなら、俺を狙う必要はない筈だ・・・・・・・・第一、あの天才馬鹿は何を考えている？

・・・・・・・・かつて俺を誘拐した、亡国企業と関わりが？

それともキナ臭いドイツ軍か？

・・・・・・・・情報が少なすぎる)

そう、一夏の考察は無意味だ。

情報が無さすぎる。

今は静観して、何が起ころうとしているのかを見極めるべきだろう。

(今は考えても無駄か・・・・・・・・それにしても、同居人が筈で良か

ったか・・・)

——人は嫌いだ——

ん、篝が出てきたか。

しかし、今日は疲れた。

シャワーを浴びて、とっとと寝るか。

第四話【一日の終わり】

完

第四話【1日の終わり】（後書き）

皆さん、三日ぶりです。

銀夢です。（＾・＾）ノ

皆さんの中には、お気づきの方がいるかもしれませんが待機状態のインパルスは、まんまフェイスバツジです。

以前の後書きで書いておくのを忘れちゃいました。

（＾―＾；）

同じく、気づいているかもしれませんが、私は約三日おきに更新しています。

・・・他の作者様と比べて、早いのか遅いのか分かりません。

（＾―＾；）

では、もう書くことがなくなっただんで、三日後に会いましょう。（予定通りに行けばですが・・・）

（＾―＾）ノ

第五話【遅れてきた貴公子】（前書き）

ようやく、メインヒロインの登場です。

まあ、第一話の最後で少し登場してますが……（^| ^;）

第五話「遅れてきた貴公子」

— H R —

「ええと、今日はなんと、新しいお友だちを紹介しますっ」

今は一時間目の前に行われる、H Rの最中だ。
教壇に立っているのは、真耶だ。

「……しかし、『新しいお友だち』って、ここは幼稚園か。
普通、転校生だろ？
そんな空気が教室を包んでいる。
すると……」

「ちっ、違うんですよ、転校生ではなく、えっと……家庭
の事情で入学式に間に合わなかっただけなんです！」

空気を読み取ったのか、真耶が必死に弁明を始めた。相変わらずア
タフタしている、涙目で。

しかし、俺は半分聞き流している。
あんま、興味ないからなあ。
む、真耶の弁明が終わったようだ。

そして、遅れてきた新入生が入ってきた。

「失礼します」

「ほっ」

俺は素でビツクリした。

まあ、オーバーリアクションを出す気はないが。

なぜなら、彼は男だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不馴れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

人懐っこそうで中性的な顔と素直な瞳。

首の後ろで丁寧に束ねられた金髪。

そして華奢なほどスマートな体を持つシャルルは、にこやかな顔でそう告げて一礼する。

クラス中が、あっけにとられている。

俺は、まあ、『ゾウの群れの中にマンモスがいた』カンジで見ている。

すると……………

「お、男……………」

誰かがそう呟いた。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて、本国より入学しに来ました。

山田先生が言う通り、急な入学だったので、入学式に間に合わなかったんです。」

…………俺とは違い、笑顔に嫌みがない。

しかし、こんなのが現れれば、女子が騒ぐぞお。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃああああ——！」

ほら、な。

まったく、喧しい。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！男の娘！」

「地球に生まれて良かった〜！」

なんか、もう、女子どもの喧しさは慣れたな。

まあ、昨日は部屋に何人も押し掛けてきやがったからなあ。

しかし、この時こそ千冬姉の番だ。

行けッ、行くんたッ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

さっすがあ、一組の抑止力う。

女子はシーン、と静まり返りHRが進んでいき、休み時間となった。

「君が織斑君？初めまして。僕は——」

「あー、一夏でいい」

シャルルが喋りかけてきた。

まあ、二人だけの男子だからな。

声をかけたくなるよな、俺は声をかけようとは思わないけど。
すると……

「ねえねえ、織斑君さあ！」

「デュノア君、質問しつもん！」

「今日のお昼暇？放課後暇？夜暇？」

女子共が襲いかかりそうな勢いで、俺とシャルルに迫って来たのだ。
もう出遅れるわけにはいかないのカンジか。

「な、なに？何でみんな騒いでるの？」

シャルルは状況が飲み込めず、困惑な顔をしている。

「あー、アレだ。こいつらは男に飢えてるのさ」

「………？」

む、反応薄いな。

「女子校みたいな所に、モテスキルを持つ男が入れば、こうなるのは必然だろ」「あつ！……ああ、うん。そうだね」

IS学園に男子など、ライオンの檻に松島トモ子を差し入れするよ
うなものだ。

……アレ、ライオンの群れ（女子共）の中で、なにかがモミ
クチャにされているぞ？

誰だ？

あ、倒れた。

「おつ、織斑くーんっ、デュノアくーんっ、ちょっとお、いいですかああ!？」

真耶か、やっぱりな。

真耶が泣きながら俺達を呼んでいる。

相変わらず、威厳のない教師だ。

っーか、なんの用だ？

「あ、あの大丈夫ですか？」

シャルルが真耶に心配そうに声をかけた。

俺は声をかけない、モミクチャにされようが、踏まれようがどうでも良いからな。

「だッ、大丈夫です、はい。・・・えつとですね、寮の部屋の事で話がありまして、ちょっと廊下のほうへ・・・あつ、篠ノ之さんも来てくださーい」

呼ばれた篠ノ之と俺達は、廊下に出ようとする。
すると・・・

「っーえゝっ、行っちゃうのゝっ!!!!」「っー」

机に集まっていた女子共が、残念そうな声を出した。

・・・こいつら宥めんの、俺たちしかいねーじゃねーか。

仕方なく、俺達は彼女等を落ち着かせた。

しかし、落ち着かせた言葉が、俺達の性格の違いを際立たせた。

「ふん、なら次の休み時間までに、ノーブラノーパンになって待つ

てな。相手してやるよ」

「僕のような者のために、貴女方の大切な時間を奪うわけには……」

「……嫌み臭さが無い、なんか、堂々と尚且つ儚げに輝いている。」

「それで、底抜けに優しい。」

しかし、こんな台詞を聞いて女子共が騒がないはずがない。

「「「きゃあああああ!!」「」」」

「超肉食ううう! 犯られちゃううう!」」

「私の白馬の王子さまああ!!」」

男に飢え過ぎだろう、こいつらは。

なんつつか、シャルルの奴、困惑の極みっていうカンジの顔してるな。

「……しゃあない。」

「ええと……『バツ!』うわっ!」

「貴公子、女子の相手してる暇ねえっ、トトト」

俺はシャルルの服の襟を掴み、引き摺って連れていこうとした。

しかし、シャルルが転びそうになったため、一瞬だがお姫様だっこの様な形でキャッチした。

まあ、俺には男をお姫様だっこする性癖はないからな、すぐ放した。

「……アレ、こいつ顔が赤いぞ。」

こいつ、ホモか?

「ちよつ、一夏……」^じ、強引だよ」

……なに、女みたいなこと言つてんだ？
……しかし、違和感ないな。

まあ、とにかく真耶の用事を済まそう。

「実は、部屋を変わつてほしいんです。」

「いや、だから主語入れろつーの。それともなにか、真耶は俺と同じ部屋で暮らしたいのか？」

「あつ、いやつ、じゃなくつ……そつ、そんな、先生と生徒ですよ……いつ、いけませんつ……」

経験しねえな、この教師。

前もこんなやり取りしたぞ。

「一夏……なにやつてるの？」

シャルルが軽い非難を込めた瞳で、俺を見つめていた。

「いやなに、真耶つて弄くると楽しいんだわ」

……なんちゅうか、シャルルがおいたをしたガキを叱る親の目をしてるんだが……

「どした？」

「もう、とりあえず山田先生の用を聞こうよ」

「あ、ああ」

「……正論で論破されてしまった。
なにゆえ？」

俺に皮肉言葉を考えさせない程、素直な瞳なんだが……
なんつうか、こんな瞳、見たことあるぞ。
赤ちゃんや犬の、疑うことを知らない瞳と同じだ。

まさか、こんな方法で俺の皮肉を封じてしまうとは……
今まで唯一、千冬姉だけが俺の皮肉を止められたが、千冬姉は基本的
に暴力で封じていたし……

「……まあ、取り敢えず、真耶の用事を終わらせるか。」

「えつとですね、男子が二人になったんで、織斑くんとデュノアくん
を相部屋にしたいんです。
なので篠ノ之さんに引越してほしいんです。」

まあ、当然だな。

若き男女が一つ屋根の下はマズイ、と判断したんだろう。
「……箒がポカンとしているが……」

「ま、ま、待ってください。それは、今日すぐでないといけません
か？」

箒から予想通りの言葉が出る。

まあ、真耶には予想外だったらしく、パチクリと目を瞬かせていた。

「それは、まあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活をする
というのは問題がありますし、篠ノ之さんも寛げないでしょう
？」

「い、いや、私は……」

うむ、真耶も面白いイベントを持ってきてくれたものだ。
さあて、箒を弄ろう。

「箒、今、何を良いかけた？」

「ふえつ、いや、私は……」

「私は？」

おお、箒の顔が赤くなっていく。
虐め甲斐があるなあ。

「……引つ……した……ない……」

「異論無さそうだな、じゃあ……」

（ああああああつ！！……このままでは、私と一夏の同棲生活がああああ！！！！！！）

「一夏、篠ノ之さん困ってるよ。篠ノ之さん、部屋を変えるのが嫌なら、僕は別にいいけど……」

うおつ、シャルルが箒に助け船を出してしまった。

しかも、丁重に丁寧を二乗したような台詞だ。

徹底的に箒を虐めよう、と思ってたのに……

「べつ、別に嫌ではないぞ。しかしつ、まあ、うん、デユノアがそう言うなら、仕方ないなっ！」

……あれ？

なんか、ターミネーターかダースベイダーの音楽が鳴ってるぞ。

あ、誰かの携帯か。

．．．．．それにしても、この威圧感は．．．．．

「ほう、学園の決定に逆らうか。中々に度胸があるな、篠ノ之」

「お、お、織斑先生．．．．．逆らうなど、滅相も御座いません．．．．．」

「

うわっ、出たっ、千冬姉だ。

さすがの箒も反論できずに、自分の席に戻っていった。

おお、箒がこの世の終わりみたいな顔をしているぞ。

「じゃあ、よろしくね。一夏」

「あ、ああ」

シャルルがエンジェルスマイルを向けてきた。

しかし、まあ、シャルルのせいで箒を弄くることが、できなかった
ワケだが．．．．．

なぜか、シャルルスマイルを見ていると、恨み言が出てこない。
不思議だ、初めての経験だ。

シャルル、恐ろしい娘っ！？

「．．．．．はあああああ．．．．．」

教室中にため息が鳴り響いた。

自分の席に着いた箒のため息だ。

教室中の女子が、なんだなんだと注目しているが、彼女に声をかけることができないでいる。

彼女の暗すぎる雰囲気、誰も近づけないのだ。

「昨日……もつと積極的に………はああああ」

後悔しても時間は戻らない。

放課後

うん、今日は平和に学校を終えたぞ。

昨日の誰かみたいに決闘などと言う、悪の誘いを受けずにすんだ。女子の追っかけも、シャルルがいたおかげで分散されたようだ。

「ねえ、一夏」

ん、この声の主は……シャルルだな。

「一夏って、確かイギリスの代表候補生のオルコットさんと決闘するんだってね」

「……あー、吹っ掛けられたな、そっぴゃ」

誰かに聞いたのだろうか？

ああ、今、思い出してもおぞましいな、決闘なんて。

「多分、オルコットさんは専用機持ちだと思うけど………一夏は？」

専用機……国家や企業に所属している者のみに与えられるものだ。

ISは表向き467機しか存在しないことになっているからな。専用機持ち「エリート」ということだ。

「ああ、ホレ」

「ああ、良かった。持ってたんだね」

俺は襟につけた待機状態のインパルスを見せた。

因みに、日本政府や国際IS委員会、IS学園に『インパルスを渡せ』とは言われなかった。

本来、ISが落ちてきたなどという奇怪な事件が起きた以上、落ちてきたISを調べるのは当然だ。

実際、無人ISは学園の管理下にある。

あの天才馬鹿が根回しでもしたのだろうか？

あいつは“俺にインパルスを使わせたかった”ようだし。

そんなことを考えていると、『昨日の誰か』の声がした。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

セシリアだ。

何しに来たよ、このアマ。つか、俺とシャルルの会話を盗み聞きするなよ。

「そうか、安心したか。良かったな。俺が訓練機を使っていたら、セシリアが負けたときの言い訳ができないもんな」

「くうつ、馬鹿にしないでくださいます!?・・・わたくしも専用機を・・・」

「ああ、知ってる、聞いた。こんな奴に専用機とは、エリザベス女王も太っ腹だな、さすがイギリスだ」

「なっ!?!」

「おー、おー、悔しがってんな」

しかも、俺は一応、イギリスを誉めたもんだから、言い返す言葉が見つからないんだな。

「舌戦では必ず負けると分かっているのに、挑戦しに来るとは・・・
・・・見習うべきチャレンジ精神だな、凄いぞ、セシリア」
「もうっ、いいですわっ!?!・・・男がもう一人増えたみたいですがつ、どっちにしろクラス代表に相応しいのはわたくしですしねっ!?!」

「・・・怒って帰っていった。

ホント、何しに来たんだ?

「オルコットさんって、典型的な女尊男卑みたいだね・・・」

「あー、別にどうでも良いっつーの。S女M男世界なんて」

「・・・シャルルの奴、男として頭にきてるってカンジじゃないな。

「一夏、負けないでね、決闘」

「決闘を思い出させないでくれ、シャルル」

決闘なんてものを、俺がやる羽目になるとは・・・

ああ、黒歴史だ、軽く鬱になってきやがった。

・・・俺の考えていることが筒抜けなのか、シャルルがクスツと笑っていた。

そのしぐさはどこことなく、女らしかった。

・・・まさか

俺とシャルルは、一緒に寮の部屋に帰ってきた。

「じゃ、改めて宜しくね。一夏」
「ん」

俺は適当に返事を返すと、とある考え事を始めた。

・・・シャルル・・・ホントに男か？

俺がそのような疑念を持つ理由は、いくつかあるが・・・

まず真面目な理由として、シャルルはあまりニュースにはなっていない。
俺の場合は、全世界のニュースに登場し、各家庭の夕食の話題になった。

果ては、各国の軍や諜報機関、国連までもが俺の話題で持ちきりになった。

しかし、シャルルの話題は聞いたことがない。
こんなおかしい話はないだろう。

そしてふざけた理由は……俺の股間センサーが反応したのだ。

……鎌を掛けるには十分な理由だ、やってやるか。

「ふう、今日も一日、勉強に励んだなあ」

「そう言うわりには一夏、授業全部寝てたよね」

「睡眠学習だ」

「ぷっ……あははっ！なにそれ。ふ、ふふっ。一夏っておかしいなあ」

俺はシャルルとたわいもない会話をしながら、制服を脱ぎ始めた。

しかも、下から。

すると……

「わあっ!？」

「ん、どしたどした」

おお、顔真っ赤だ。

やはりな……

「なっ、何をしてるのっ!？」

「着替え。パジャマっ子だからさ、俺。」

「なっ、ならシャワーの後に着替えなよ!」

「無理、すぐ着替えたい。制服は堅苦しいしさ。お前も着替えたら?」

「う、うんっ、シャワーの後でねっ!」

そう言いながら、シャルルは壁の方を向いた。

……けど、ヤッパ、気になるんだろうな。

チラチラ見ているぞ。

面白いな。

「なあ、シャルル」

「なっ、なにかなっ!？」

「さっきからチラチラ見てるけど……見たいのか？」

俺はそう言いながら、パンツ一丁の体をシャルルに向けた。

「……む、シャルルから、なにか『ボンッ!』って音が聞こえたぞ。」

「ぼっ、僕、シャワー浴びてくるっ!」

「……逃げたな……計画通り……」

さあ、昨日ちょうど切れた、シャンプーとボディークリームを届けてやろう。

「……クククッ」

待っている、シャルル。

日本男子はな、裸の付き合いが大切なんだ。

第五話【遅れてきた貴公子】

完

第五話「遅れてきた貴公子」（後書き）

予定通りの投稿ができました。

さて、シャルの登場時期が原作とは違いますね。
まあ、メインヒロインですから。

シャルは可愛いです。

大切なことなので、もう一度言います。
シャルは可愛いです。

何よりも性格が良いんですね。

第六話では、シャルの父親と本妻に凄まじい憎しみを抱きながら、
執筆しましたよ。（*、D、）ノ！！！！

もう十回ぐらい、頭の中で虐殺しましたよ。

旧ソ連のKGBもビックリの殺し方です。

……実は私、原作では、一夏とシャルは同居していましたが、
そのときの雰囲気夫婦に思えたんです。
原作でも二人がゴールインしちゃうんじゃないでしょうか？

作品のヒロインは算かもしれませんが、『作品のヒロイン』一夏の
ヒロイン』とは限りませんからねえ。

……何が言いたいかと言えば、『シャル、頑張れ』です。
（* 0 ）b、

さて、話は変わりますが、今日、相棒最終回を見ました。

まさか、劇場版のネタバレがあるとは……
私は家庭の事情で、映画を見に行けなかったんで、ビックリしました。

……ホント、どうでも良いことですね。(^ー^;))

私の住まいは大阪なんで、今日の一時にISが放送されます。
楽しみだな。(、、)

では、皆さんも次話を楽しみにしてください。

(^ー^)/

第六話【偽りと告白】（前書き）

東北地方太平洋沖地震にて被害を受けた皆様に対し、お悔やみ申し上げます。

第六話【偽りと告白】

「ふう……………」

僕は一夏から逃げ、シャワールームにいた。

……………逃げてきたけど……………変に思われてないかな？
というより、一夏は何であそこまで僕に迫るんだろう？

……………今日、一夏と知り合ったけど……………なんとというか、
意地悪っていうか……………

アレ、シャンプーがない……………あ、ボディーソープも……………

僕は、新しいシャンプーとボディーソープを取ってくるため、シャ
ワールームと脱衣場を区切る扉を開け、脱衣場に出ようとした。

——瞬間だった

「よう、シャルル」

……………いち……………か……………？

脱衣場に、一夏がボディーソープを持って、立っていた。
……………なんで、一夏がいるの……………

「い、い、いち……………か……………？」

「おう。はい、ボディーソープ」

「あ、あ、ありがと・・・・・・・・」

ああ、一夏はボディーソープを届けに来てくれたんだ。

・・・・・・・・・・ちょっと待って・・・・・・・・・・今の状況を整理しよう・・・・・・・・・・

今、僕はシャワールームに居て、扉は空いている。

脱衣場には一夏がいる。

僕はさっきまで、シャワーを浴びていた。

僕は自分の体を確認した。今まで、男装コルセットで隠していた平均以上の胸がある。

その胸を腰の括れが実際の大きさ以上に、強調していた。

さらに、スラリと長く伸びた足は、上半身と同じく美しい。

まさに、黄金比。

長い長い沈黙

「きゃあっ!?!」

ハッと我に帰った僕は慌てて、胸を隠しながら扉を閉めた。

はあああっ、はあああっ

僕・・・・・・・・今、裸だ。

見られちゃった、完全に。

どっ、どうしよう・・・・・・・・・・えっと、こういう時は・・・・・・・・・・

ガチャッ！

「わあああつ！？」

「シャルル」

まつ、また一夏がつ！？

しかも、シャワールームの扉を開けてきちゃったあ！？

「はい、シャンプー」

「あつ、りよりりよつ、了解つ！？」

「じゃ」

一夏は扉を閉めて、部屋に戻っていった。

ていうか、もうつ、会話が成立してないよおお！？

ガチャッ！

まつ、また扉が開いたあああ！！！？？

「こつ、こつ、今度は何いいいつ！！？？」

「そのシャンプー、リンス配合だから」

そつ、そんなことで来ないでよお！？

「わつ、分かってるよおお！！！？そつ、そそそれより、早く閉めてよお！？」

「その前に、そのリンス納しとくから」

ええつ、とつ、あった、リンスだ。

私はリンスを手にとると、一夏に向き直り、リンスを手渡した・・・が、一夏はリンスのことなど無視し、私を舐め回すように見ていた。

「そつ、そつ、そそそそんなに見ないでよおっ！早く閉めてよお！・・・一夏のえっち」

「おう、ごゆっくり」

もうっ、完全に僕で遊んでるよおっ！

・・・そういえば一夏・・・僕の裸を見てもビククリしなかったなあ・・・

まさか、もう、女だつてバレてる・・・？

言わなきゃ

—— 本当の事 ——

「いや、すごい慌てっぷりだったなあ、面白かったあ」

俺は脱衣場から戻ってくると、ベッドに座った。

十分に楽しませてもらったが・・・重要なのはここからだ・・・

(・・・シャルル・デュノア・・・なぜ俺に近づいた・・・)

性別を詐称までして。

デュノアの名字がらみか・・・)

俺は少し考えると、机に座りパソコンを立ち上げた。

そして、デュノア社社長と家族に関することを調べ始めた。

簡単に調べても、シャルル・デュノアに関する項目は出てこない。
俺はそれならと、デュノア社のサーバーに不正侵入を試みた。
ファイアウォール等の突破は容易だった。

この程度、IS学園のセキュリティに比べれば、大したことはない。

クラッキングの最中、シャワールームの扉が開く音がした。
タイムアップ……か……

俺はクラッキングの痕跡を消すと、パソコンの電源を落とした。
……まあ、シャルルに聞けば良いか。

『浜田、松本、山崎、アウト』
バシッ！、イッタア！
バシッ！、アカンツてこれ！
バシッ！、もっとお！』

「あ、上がったよ……」
「あゝ」

スポーツジャージ姿のシャルルが、脱衣場から出てきた。
女であることがバレてしまったためか、男装コルセットをしていない。

俺はベッドに寝転がり、シャルルはもう一方のベッドに腰を掛けた。
しかし、俺は芸人が尻を叩かれるところを見ながら、なんとも気の
抜けた返事をする。

あ、また松本笑った。

……まあ、シャルルのことだ。

放っておけば、勝手に話始めるだろう。
今日一日でシャルルの性格は把握した。
誠実で優しく、誰にでも好かれる奴だ。
だから、ことここまで来て、黙りを続ける筈がない。

・・・長い沈黙

二時間の番組が終わってしまった。

どうやらシャルルは、気まずいようだ。

話すタイミングが見当たらないらしい。

因みに、最も尻を叩かれたのは松本だった。

他人の尻が真っ赤になるのは、素晴らしいな。

・・・はあ、仕方ない、俺がふるか。

「何で男のフリなんか？」

声をかけるとシャルルは、ビクツと身を震わせる。
そして、段々と顔を曇らせながら話をした。

「それは、その・・・実家の方からそうしろって言われて・・・

・・・」

「ふうん、デユノア社か」

「そう、僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

・・・妙な違和感だ・・・
まるで父親を他人のように・・・
・・・ああ、そゆこと

「僕はね、一夏。愛人――」

「シャルル」

シャルルは暗い顔のまま、俺を見た。

「みなまで言うな」

「ああ、うん……ありがと、一夏」

少しシャルルの表情が晴れたように見える。

それでも、シャルルは精一杯の作り笑顔を浮かべている。

クラッキングをしても、シャルル・デュノアの情報は出てこなかった。

だとすれば、ある程度頭の回転が早ければ分かる。

シャルルは愛人の子だ。

それは即ち、不幸な生まれであることを意味する。

「引き取られたのが二年前。」

ちようどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやって来たの。それで色々と検査をする過程でIS適応が高いことがわかって、非公式ではあつたけれどデュノア社のテストパイロットをやることになったね」

ああ、俺……シリアスな空気は苦手だ。

出来るなら、テレビでも見たい。

……しかし、なぜか俺は、彼女の話を聞こうと思った。なんつうか、俺らしくないな……

「父にあつたのは二回くらい。
会話は数回くらいかな。

普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。
あの時は酷かったなあ。

本妻の人に殴られたよ。

『泥棒猫の娘が!』ってね。

参るよね。

母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

シャルルは相変わらず、作り笑顔を浮かべている。

それは、いつものシャルルスマイルではないことは明らかだ。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったの」

「……第三世代型……か……」

「うん、デュノア社製のラファール・リヴァイヴは結局は第二世代型。」

ISの開発っていうのは物凄くお金がかかるんだ。

殆どの企業は国からの支援があつて、やっと成り立っているところばかりだよ。

それで――」

「フランスはEU統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されていたな。

国防のためでもあるし、資本力で負けるフランスが最初のアドバンテージを取るため……第三世代型の開発は必須……
・だろ？」

「……そう、よく知ってるね。」

第三次イグニッション・プランの次期主力機のトライアルに参加してるのは、イギリスのティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型……この三機に負けないのが必要だったの」

国防となれば、どの国も躍起になる。
それが大国となれば尚更だ。

「話を戻すね。

それでデユノア社でも第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第二世代型最後発だからね。

圧倒的にデータも時間も不足していて、中々、形にならなかったんだよ。

それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。

そして、次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

……しばらく沈黙が続くと、シャルルが視線をそらした。
そして苛立ちと申し訳なさを含んだ声で、続けようとした。

「それで、何で男装してたかだけど――」

「注目を浴びるための客寄せパンダ。

俺という特異ケースと接触し、使用機体と俺のデータ取り……さっきも言ったが、みなまで言うな」

最大に好意的な言い方をして、スパイみたいなものだ。
それにしても俺は、またシャルルの言葉を遮っていた。
……最近、遮ること多いな。

「うん……ありがと……僕の言いたくないことを代わりに言ってくれて……」

自分の子が可愛くない親など、珍しくない。

そんなモノは、吐いて捨てるほどいる。

ただ、使える道具は使う。

それが、その父親の考えだろう。

シャルルは優しいが、さすがに屑を親だと思うことはできないのであろう。

できるはずがない、俺もだ。

「とまあ、そんなところかな

。でも一夏にバレちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。

デユノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、ど
のみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでも良い
ことかな。

……ああ、なんだか話したら楽になったよ。

聞いてくれて、ありがとう。

それと、今までウソをついていてゴメン」

深々と頭を下げるシャルル。

頭を上げると、うつすら涙を浮かべながら、笑顔を作っていた。

……痛々しい笑顔だ。

……あつ、クソッ……今日の俺は、なぜか饒舌
だ。

こんな俺は、生まれて初めてだ。

「・・・・・・・・『楽になった』じゃないな、それは。」
「えっ？・・・・・・・・」

「それはなシャルル、投げ遣りって言っんだ」

長い長い沈黙。

本当に長い沈黙だ。

それこそ、無限の時間が経っているように思える。
俺の言葉は、シャルルの本心を突いたのだ。

そして――

「・・・・・・・・だっ、だって仕方ないよ・・・・・・・・
フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は
代表候補生をおろされて・・・・・・・・
よくて牢屋とか・・・・・・・・だよ？・・・・・・・・」

彼女は・・・・・・・・涙を必死に堪えていた。

彼女は、絶望を通り越し諦観を決め込んだ。
しかし、一夏はそれを良しとはしなかった。

「お前の人生はそんな“屑親父”のために、棒に振るようしょう
もないモンじゃないだろう。」

シャルルは涙を堪えながらも、一夏を見つめた。

（シャルルの人生を、親の下らん事情で台無しにしてなるものか。
・・・シャルルはまだ間に合うのだから）

いつもの一夏なら、シャルルを放っておくだろう。
しかし、なぜか今の一夏にその選択肢はなかった。
シャルルを救う以外の選択肢など、無かったのだ。

「シャルル・デュノア、特記事項第21を述べる」

シャルルは、いきなりの一夏の問いに慌てるも、一夏の強い瞳に担任である織斑千冬を見た。

それに逆らえず、思い出しながら述べ始めた。

「・・・えつと・・・本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。
本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする・・・」

「そうだ。」

フランスが何を言おうが、全て無視できる。
その間になんとかできるだろ。

「ここにいろ」

「・・・一夏・・・」

彼女の雨は・・・晴れていく。

土砂降りだった空は、雲の隙間から太陽が覗いていた。

「……………」ありがとう

誰にでも降り注ぐ太陽は、シャルルスマイルを取り戻していた。

——ここにいろ——

シャルルはその言葉で、笑顔を取り戻した。
その言葉は、彼女の心に深く刻み込まれた。
それと同時に、彼——一夏のことをもっともっと、知りたくな
ったのだ。

シャルルはふと、思い出す。

（さっきの一夏の“屑親父”って言葉……………妙な違和感があっ
たようない……………）

「一夏……………その、一夏の両親は……………」

瞬間、一夏はビクリと体を震わせた。

（……………あ）

シャルルは悟った。

自分は言葉の棘に触れたどころか、地雷を踏んでしまったかもしれ
ない、と。

「その……………ゴメン……………答えたくなかったら別に……………」

」

「なに、大したことじゃない・・・日本昔話みたいなもんだ」

一夏はさつきと打って変わって、淡々と返した。

その淡々とした反応が意外だったシャルルは、一夏の言葉に耳を傾けた。

「まったく、人の最大の不幸は、生まれ方を選べないことだ。

お前も、俺もな。」

シャルルは、愛人の子として、この世に生を受けた自分を思い起す。

家庭の中で酷い目にもあったが、生まれたことを母親には、感謝している。

「まず、俺は親の顔も名前も知らん。

物心つく前には、俺と千冬姉を捨ててどこか行っちゃまって、生死不明。

どこで油売ってるんだかね？

油の売りすぎで、中東の石油王にでもなってるんだな。

リビアで死んでくれればいい」

・・・だから、一夏の“屑親父”という言葉に棘・・・地雷があったのだ。

しかし、一夏は自分のことを、まるで他人のこのように話している。

シャルルは、そんな一夏にどこか危うさを感じていた。

「しかし、まあ、問題はこっからだな。

・・・第二回IS世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦当日。

織斑一夏は拉致られた。」

一夏の言葉を聞いたシャルルは驚愕する。
そして、ただただ一夏の話に耳を傾ける。

「拉致りやがったのは、『亡国企業』。

第二次世界大戦時に生まれた連中らしいが、まあ、調べても良く分からん。

で、なぜ拉致ったかまでは、知りやしねえ。

……まったく、拉致るんなら、他の誰かを拉致りやいいのにな。」

(……一夏……辛いはずなのに……)

一夏は、いつもと変わらぬ口調で、暗い過去を喋り続けている。
そんな一夏を見たシャルルは、段々と居た堪れなくなっていく。

「ドイツ軍からの情報提供を受けた千冬姉が、決勝戦をすっぽかし
て助けに来たことで、事なきを得たわけだが……

ドイツ軍への借りを返すため、千冬姉はドイツ軍で一年の間、教官
をするはめになった。

と、まあ……どした？……通夜か？」

「だって、そんな辛いこと……」

それは、シャルルが辛さを見せない一夏を見て、代わりに辛さを感じ
ているかのようだ。

「……取り合えず、続きを聞け、な。」

「……続き？」

シャルルは、まだ何かあるのだろうか、と思いを聞き続ける。

そして――驚愕がシャルルを支配した。

「そんなときにな、俺、亡国企業の連中を何人か、

――殺しちゃってなあ――

第六話【偽りと告白】

完

第六話【偽りと告白】（後書き）

第六話、お楽しみいただけただけでしょうか？

次話にて、一夏の誘拐事件が語られますが――—そんなことを、書いている場合ではありませんね。

前書きでも書きましたが、被災した皆様にお悔やみ申し上げます。

私は大阪の住まいだったのですが、震源地から遠く離れているにも関わらず、揺れを感じました。

実は私の親戚も１１日に連絡がとれなかったのですが、今日、無事であることがわかりました。

まあ、親戚が住んでいるのは千葉なんで、電話の回線が混んでいただけだったのでしょう。

取り合えず、良かったです。

しかし、今の被災地のことを考えると、心配は止みません。テレビで津波に襲われた町を見て、私は啞然としました。

津波は本当に、町を丸ごと消してしまいました。

こういった町の、一刻も早い復興を願っております。

各国の支援の輪も広がっていますね。

こういうときに、米軍の空母は有り難いです。

韓国の救援隊も来ているとのことですよ。

日本人の底力は、こんな地震に負けはしません。

日本は戦後の焼け野原から復活し、経済大国となった誇り高き『神の国』なのですから。

では、皆さん第七話でお会いしましょう。

第七話【目覚める殺意】

——第二回IS世界大会『モンド・グロッソ』決勝戦当日——

暗い暗い何処か。

彼——一夏は、誘拐され真つ暗な場所に監禁されていた。

（……なんつつか……俺は囚われのお姫様やるような奴じゃないだろ。

……はあ）

一夏は、剣道の覚えがある。

かつて、箒の実家である剣術道場に通っていたのだ。

それだけでなく、他の武術を独学で学び独自の格闘術を編み出していた。

そんな一夏がなす術なく、拉致られたのだ。

そのため、誘拐犯はプロの類いだと推測できる。

（……決勝戦当日にこれか……

大会がらみの誘拐か？……

各国の威信がかかっている大会だ。

決勝の対戦相手国の犯行か……

誘拐してでも優勝を……いや、バレたら終わりだ。
さすがにあり得ない……）

一夏は考えを回らせるも、結論はでない。
情報が少なすぎるのだ。

第一、今は脱出を一番に考えるべきだろう。

犯人特定を諦めた一夏は、拘束を解くべく、縄脱けを始めた。
彼は、縄脱けを技術としては知っていた……いや、見たただけだ。
見ただけで縄脱けの方法を、覚えたのだ。
無論、縄脱けを過去にやったことなど無い。

（確か……腕を前に……回して……よしっ）

初挑戦であることが信じられないほど、あっという間に縄脱けは成功した。

しかし、日頃の行いが悪い彼は神に見放されてしまった。

カチャ……ギイイイツ……

鍵が開けられ、扉が開いたのだ。

この扉を開けるのは誘拐犯しかない。

（チツ、神に嫌われてんなあ、俺もお前なんて嫌いだ、馬鹿、死ね）

一夏はいつもの愚痴を吐き、先手を取るべく扉が開ききる前に、襲いかかるうとした。

しかし……

襲いかかるうとした手首を何者かに掴まれ、そのまま押し倒された。

「ふむ、凄い暴れものだな」

扉を開けて入ってきたのは、三人だ。

喋りかけた男は、白衣にボサボサの髪に眼鏡をかけている、科学者

のような風貌だ。

俺の手首を掴んでいる男ともう一人は、腰に拳銃——コルト・ガバメント1911A1がホルスターに収まっている。

（さて、絶体絶命だな……）

一夏は冷静に状況を判断し、手首を掴んでいる男のコルト・ガバメントを奪うため、手を伸ばそうとした。
その時だ。

「君も不幸だな、同情するよ。」

あの“親”の元に生まれなければなあ。」

（——親だと？）

一夏は監禁されてから一度も、動揺や絶望するなどのことはなかった。

しかし“親”と言う単語を聞いて、初めて動揺したのだ。

（どういう事だ？

なぜ親と言う言葉が出てくるッ？

……今は生死不明だろう。

クソッ！）

一夏は段々と冷静さを失っていく。

押し倒された状態でジタバタと暴れ、無駄に体力を消費しているのだ。

呼吸も荒い。

一夏を押さえつけている男は、暴れる一夏を鬱陶しく思ったのか、

苛立っているようだ。

そして……

「ええいッ、コイツッ！」

コルト・ガバメントが火を吹いた。

放たれた鉛は、一夏の二の腕を容易に貫いた。

「ヒッ、ガアアアッ！！！！！！……」

一夏の悲鳴が、部屋に響いた。

暴れはしなくなったが、急に頭が冷えていった。

本能が死を感じ始めたのだ。

初めて受けた銃の痛みは、彼の想像を絶するものだった。

そして……意識は遠くなっていき……

「覚醒の子も、今はただのガキ……か」

覚醒

本能

死ぬ

俺は

死んでエッ

たまるかアアアアアッ!!!!!!!!!!

!!!!

種は割れた

瞬間、感覚が鋭敏になり、情報が脳では扱いきれない程に流れてくる。

すると、急に頭が冷え、瞬時に敵のありとあらゆる殺害方法を思考する。

そして、一夏は殺意の塊となり、牙を向く。

一夏はコルト・ガバメントを放った男の腹に、膝蹴りを放つ。部屋に『ボギイツ!』と言う、嫌な音が響き渡った。

肋骨が何本も纏めて折れたのだ。

男は激痛に耐えられず、一夏の手首を放し床に転げ回る。

「「なッ!!!!!!!!?」」

他の二人は、何が起ったかも理解できず、ただ、驚きの声をあげる。

さらに、一夏は白衣の男のポケットに入っていたボールペンを奪った。

そして、そのペンを白衣の男の首に突き立てた。

突然、部屋が衝撃に揺れた。
壁が崩れたのだ。

そこから光が差し込んでくる。

「一夏ッ！居たら返事をしろ……一夏！」

決勝戦を放棄し駆けつけた、織斑千冬だ。
ISを装備した彼女は、心配と焦りを含む表情で、部屋に入っている。

すると彼女は、部屋の違和感に気づいた。

（……なんだ……この重く湿った空気は……）

ふと、部屋の扉に目をやる。

そして、違和感の正体を理解した、理解してしまった。

「……一夏……」

織斑一夏の周りには、三つの亡骸が横たわっている。

白衣の男の首には1?程の穴が開き、大量の血が吹き出ていた。残る二人にはそれぞれ、額と胸に45口径の穴が開いていた。

そして、コルト・ガバメントを力無く手に持つ一夏は、無表情で立ち尽くしていた。

その瞳は、この世のものとは思えないほど冷たかった。

その冷たさは、悍しく、禍々しい殺意であった。

彼の殺意が部屋のすべてを支配していた。

「その後、ドイツ軍が殺しを無かったことにしてくれてな、少々、きな臭いが。」

そんなこんなで、『織斑一夏昔話』は終わりだ。

しかし、死ぬ直前になれば人間は何が起こるかわからんもんだな」

一夏は話を終えた。

いつものふざけた雰囲気だが、シャルルはそれを痛々しく思っていた。

命の危機に陥って、『何か』が一夏の身に起きたのだ。

「い、一夏……その時の、火事場の馬鹿力……みたいなのって、一体……？」

「知らん、因みに、ああなったのは、後にも先にもあれ一回きりだ」

二人はその『何か』を、今この瞬間に知ることは出来ない。

少なくとも人を殺したといっても、そんな状況では仕方ないだろう。

その時の一夏は正気があったかも、さだかではないのだ。

しかも、誘拐の原因は両親にあるかもしれない。

ドイツ軍が隠蔽したらしいが、そんなことをしなくても正当防衛か何かで、決着しただろう。

それでも、殺した一夏の心には取り返しをつかない、大きく深い傷を負ったに違いない。

しかし、一夏はそれを表には出さない。

シャルルには分かっていた。

一夏が感情を押し殺していることに……

（まるで、さっきの自分みたい……）

「シャルル、俺のことは心配せんでいいぞ」

「ふえっ!？」

シャルルは自分の心の声を聞かれたような気がして、変な声を出してしまった。

「イライラは全て、亡国企業にぶちまけるからな。

奴等全員、生きたままデケーミキサーに入れて、ミンチにしてやる。
最終的に豚の餌にでも混ぜてやるさ。」

…… 絶ッッッッ対にして殺してやるからな、あいつら」

そう言った一夏は、今までのふざけた雰囲気から、打って変わって鬼のような顔をしている。

その顔は、『泣く子も黙る』ことはおろか、『泣く子もショック死』してしまいそうな怒りっぷりだ。

シャルルは絶望という感情を押し殺し、一夏に全てを明かした。

しかし、己の過去を話した一夏が押し殺していた感情は、シャルルの物とは随分と違っていた。

一夏は亡国企業に対する、『憎しみ』『恨み』『怒り』『殺意』といった感情を押し殺していたのだ。

…… 健気なシャルルとは、全く違う、断じて。

しかも、どこか楽しそうだ。

亡国企業の連中が豚の餌と化す瞬間を、想像しているに違いない。それを見たシャルルは、亡国企業を哀れに思わざるを得なかった。

(…… 一夏が言うと、しゃ、洒落になってない……
いざとなったら、止めなきゃ…… はあ)

「それにな、シャルル」

一夏は、浮かない表情をしているシャルルに歩み寄る。

そして、指をシャルルの口に突っ込むと唇を左右に引っ張り、無理矢理に笑顔を作った。

「いつ、いひゃいつ、いひゃい（いつ、痛い、痛い）」

「お前、俺がせっかく励ましてやって、シャルルスマイル取り戻さ

せてやったんだぞ？

笑え、いいから笑え。

笑わなかったら、励ました俺の労力、返せや。

もつと言えば、体か金で。」

一夏は実に楽しそうな顔でそう言い終えると、やっと指を引っ込めた。

笑顔とも口裂け女とも、言えないような顔をしていたシャルルは、元に戻った顔を押さえている。

顔を真っ赤にしながら。

（いッ、一夏っ、いきなり口に指なんてえっ！？……うっっ、ドキドキが止まらないよぉ〜）

シャルルはそんなことを思いながら、一夏の指が“挿入”してきた口の中を、舌で舐め回している。

すると、なんと一夏がシャルルの唾液で濡れている自分の指を、しやぶり始めたのだ。

シャルルは一夏のとんでもない行為に一瞬、頭が別世界に飛びそうになる。

しかし、必死に自分を現実に戻した。

「ちよっ、ちよっ、いいいい一夏ああ！！！！？？？？

ななななななっ、何をおおおお。 □ !!!!!!!!!!!??

??」

もう、最後は何を言っているのか、分からない。

シャルルは再び、別世界に旅立ちそうになった。

もう、別世界行きの新幹線に乗り込もうとしている所だ。

「いやなに、お前のリアクションが面白くて――」

コンコン

「い、一夏。」

まだ、夕食を食べていないようだが、体の具合でも悪いのか？」

突然のノックに驚の声。

しかし、シャルルは未だに別世界から帰ってきていない。

「入るぞ、一夏」

この一言を聞いて、ようやくシャルルは別世界から帰ってきた。それと同時に、軽いパニックに陥っていく。

シャルルはスタイルが良く分かるジャージを着ている。

今、部屋に入られたらどんな馬鹿でも、シャルルが女であることに気づくだろう。

要するに、ピンチなのだ。

「ど、どうしよう!？」

「ん、取り合えず、隠れる。」

いや、なんで、クローゼットなんだよ。

ベッドに入っとけ……そうだな

あらよつと

「ふえっ、いッ、一夏あつ、何を!？」

「入るぞ、一夏」

箒は今、一夏の部屋に着ている。

部屋がバラバラになったとはいえ、いつまでも落ち込んでいられないと思ったのだ。

そこで、夕食と一緒に取るために、食堂で待っていたのだが、いつまで経っても一夏は来ない。

そういうわけで、部屋まで足を運んだが……
ノックをしても、返事はない。

ガチャ

業を煮やした箒は、部屋に入った。
その瞬間、箒は啞然とした。

「……何を……している？」

シャルルが布団を頭まで被っていた。

いや、それだけなら、ゴキブリか何かが出ただけなのかもしれない。

しかし、あるうことか、一夏は今にもシャルルのベッドに入ろうとしているのだ。

このまま、ベッドに入ってしまうえば、二人は添い寝することになるだろう。

「いやな、シャルルが風邪気味らしくてな。

寝てるところを襲おうかなと」

「なんだとっ！！？」

「ちよっ、一夏あ！？」

一応、言っておくが箒はシャルルのことを男だと思っている。

つまり、箒には二人がそんな行為に及ぶことを、とんでもなく不潔極まりないことに見えるわけで……

「わつ、私の居ない間に、お前がそのような男色趣味に走ろうとはあつ！

ええいつ、恥を知れええつ！！！」

結果、刀による突きが放たれるのだ。

因みに、箒が今、突きを放った刀の名は『緋宵』。

名匠・明動陽晩年の作であり、篠ノ之家に江戸時代から伝わる名刀だ。

女剣士を伴侶としたことから、男が使うのが当然である刀を、『女のための刀』として作ったのだ。

決して、R指定ギリギリのボケに対するツッコミとして使われる物ではない。

と、まあ、そんな凄い刀が今この瞬間に、一夏に向けられているのだ。

しかし、一夏は緋宵の鍔を掴み、突きの直進する力を利用し引つ張った。

「なああつ！？」

箒は体制を崩し一夏に倒れ込んだ。

それはシャルルには、まるで、箒が一夏に抱きついているようにも見えた。

「なっ、一夏――」

「おい、バレンゾシャルル」

「あっ！」

シャルルが一夏と箒の状況に耐えられず、ベッドから飛び出そうになるが、一夏の一言により正気に戻る。

幸い、箒にはシャルルを見られていないようだ。

その箒は、一夏に抱きついているのが恥ずかしかったのか、すぐ離れてしまった。

しかし、離れた後も顔を真っ赤にして、なんか、モジモジしている。

（ああっ、何でそのまま、抱きついておかなかったんだああっ！！？私の馬鹿っ！！）

「すぐ離れるなんて、酷い奴だな」

「なっ……いッ、いッ、一夏が良ければ……」

「しかし、あれだな。」

俺に女の素晴らしさを、お前が身を持って教えてくれればさあ。

もしかしたら、俺、男色家から抜けれるかもしれないんだがなあ」

一夏の台詞に、今度は箒が別世界へ出発しようとしている。

しかし、別世界行きの飛行機は一夏の、今までのやり取りをぶち壊す台詞によって、欠航となる。

「まあ、俺、男色家じゃないがな」

ガシッ！

一夏が喋り終わると同時に、箒が一夏の腕に自分の腕を絡ませた。その勢いのまま、一夏を廊下に連れ出そうとする。

「ええいつ、お前のふざけにはもう、耳はかさん！
さっさと、食堂に行くぞ！」

そう言い放った篤は、怒りと恥ずかしさで顔を真っ赤にしていた。
そして、部屋の扉を開けた。
無論、一夏の意味確認などしていない。

「あゝ、拉致られるゝ
篤も積極的だなゝ」
「……ごゆつくり」

それでも、一夏はいつも通り面白がっていた。
さっきのやり取りと、今のニヤニヤした一夏を見ていたシャルルが、
ムスツとした表情で二人を見送った。

（……僕……嫉妬してる……）

瞬間、シャルルは己の中の邪念を追い払おうとする。
そんな気持ちを抱いちゃダメだ、と。
いや、しかし、嫉妬はいつまでも、いつまでも彼女の中に燻り続ける。
そして、彼女は一夏の帰りを悶々とした気持ちで待ち続ける。

恋した乙女の心は、もう止まりはしないのだ。
「……一夏のばか」

第七話【目覚める殺意】

完

第七話【目覚める殺意】（後書き）

更新、ちょっと遅くなりました。

大体、0時ぐらいの更新を心がけているのですが……（^|^-;）

ああ、明日の朝、早いのに……OTL

今回から、『……』を使わず、『……』を使いました。

……実は、今日の深夜に『……』を『……』に変え始めたもんだから、こんなに遅くなったんです。（^|^-;）

第一話から第六話も修正したいと思います。

さて、誘拐事件の一夏は見事に暴走しました。

……まあ、機動戦士ガンダムSEEDシリーズの種割れですね。

原作では一切触れられなかったSEEDですが、今作では深くストーリーに関わっていきます。

ここ、テストに出るので、覚えておきましょう。

＼（^|^-）

15日、静岡県で震度6強を観測しました。

さらに、原子炉の状況も心配です。

第六話を投稿するときに、『第七話の投稿の時には、被害が収まっ
ていて欲しい』と思っていましたが……

もう、これ以上、被害が広がらないことを切に願うばかりです。

では、第八話でお会いしましょう。

その時には、被害が小さくなってくれることを祈ります。

第八話【だあい好き】

俺は夕食を終え、シャルルの待つ部屋に戻ってきていた。無論、食堂で箸や他の女子を弄ぶことも忘れてはいない。たつぷり、遊ばせてもらった。

そんな俺は、なぜか、焼き魚定食を持ってきてしまった。

自分で思っのもなんだが……なんで？

この焼き魚定食は、誰のために持ってきたんだろう？

いや、まあ、そんなことは決まっている。

シャルルのためだ。

この俺が他人のために、わざわざ食堂から焼き魚定食を持ってくるなど……あり得ない。

例え相手が箸でもだ。

『なんでも自分で出来る女が好みなんだけどな』と言ひ箸を納得させた筈だ。

なんか俺……シャルルに甘い気がする。

まあ、取り合えず部屋に入ろう。

ガチャ

「泣いて喜べ、たつぷり感謝しろ。

焼き魚定食を持ってきてやったぞ」

俺は、感謝するのが嫌になるような言葉を吐きながら、焼き魚定食をテーブルに置いた。

しかし、相手は優しさの化身シャルルだ。

「おかえり、一夏。」

焼き魚定食、ありがとう。
「いただきよ」

ちゃんと、感謝を言い椅子に座った。

まあ……シャルルらしいよな。

しかし、焼き魚定食を見たシャルルは表情が固まってしまった。

「どした、椅子が三角木馬にでもなつてたか？」

「いッ、いや、そんなことないよっ。」

うん、いただきます」

どうにも、ぎこちない笑みを浮かべるシャルルを不思議に思っていたら、その表情の訳はすぐに分かった。

「あっ……」

ぽろっ

「あっ、あっ……」

ぽろっ、ぽろっ

シャルルは魚の身を落とし、情けない声をあげた。
皮を取る、魚の身をほぐす、そこまではいい。

しかし、上手く掴めずにテーブルに落としている。

何が言いたいかというと、シャルルは箸が苦手なようだ。

つか、骨が刺さるかもしれないな、喉に。

しかし、食べようと掴んでは落とす光景は、中々に面白いな。
豆を掴んで皿に移す大会みたいだ、ハハハ。

「うつうつ……」

シャルルは、低い唸り声を発する。

わざわざ持ってきた夕食が食べられずに、俺に申し訳ないって表情だ。

……これ、俺が助けなきゃダメなのか？

誰か、スプーン持ってきてくれないかねえ。

俺は嫌だからな。

俺は、関係ない、知らんぞお、一切無関係だ、シャルルよ頑張れ、応援してやるからな。

「……ああっ」

びちゃっ

味噌汁の豆腐を落としてしまった。

「ああ……」

ぽとっ

つまんだご飯が落ちてしまった。

やっぱり俺がスプーン持ってこなきゃ、駄目なのか？

……ああ、カルボナーラでも持ってきてくりゃ良かった。

このままじゃ、らちあかねえよ。

俺は苦虫を噛み潰したような表情で、部屋を出ようとする。

「ああ、スプーンだな。

はあ、待ってろ」

「ええっ？ い、いいよ、そんな。

箸の練習にもなるし」

「ふうん、そう」

さすがは、一に遠慮、二に辞退のシャルルだ。
俺の手間が省けるなあ。

「はむっ」

……お、漸く口に魚の身が到達したぞ。
シャルルは、ちよつと嬉しそうな表情をする――が

「いたっ!？」

口に骨が刺さってしまった……

上手く骨を取れなかったらしい。

シャルルは段々と、涙目になっていく。
な、なぜだろう、見てられん……

ああっ、もうっ！

「スプーン持ってきてくりやいいんだろ、持ってきてくりやあよお！
遠慮したらシバき回すからな」

俺は半ば、ヤケクソになりながら食堂に行くため、部屋の扉に向か
った。

シャルルは俺の勢いに押された様子で、口を開いた。

「じゃ、じゃあ、あの……」

「あー、スプーンか、フォークか？」

「え、えっと、ね、その……一夏がたべさせて」

……はい？

モジモジと言いくそうにしていたシャルルから、予想外の言葉が出てきてしまい、俺は惚けてしまった。

シャルルは顎を引いた上目遣いをして、俺に迫ってくる。

そうか、お前も一夏争奪戦争に参戦するか……

まあ、さっきの筈に嫉妬したんだろ。

それにしても、そうかそうか。

そんなに、俺に世話して欲しいか。

良いだろう、世話してやろう。

「よし、“世話”してやろう」

「う、うん」

シャルルはどことなく顔を赤くしている。

嬉しくも恥ずかしい、カンジだな。

フフフツ、これからどんな目に遭うのかも知らずに……

とりあえず、俺は茶を沸かした。

飲んだら、唇も舌も喉も焼けただれそうなほどに、熱々の茶にしてやった。

そして、シャルルのもっていた箸を受け取り、さっき落としていた分と合わせて鯖の身をつまんだ。

「はゝい、口開けてゝ、あゝん」
「あ、あゝん」

もぐもぐと咀嚼をするシャルル。

なんだか、一生懸命にひまわりの種を頬張るハムスターみたいだ。
それにしても、俺ってシャルルに甘いなゝ、ホント。

「うまい？」

「う、うん。おいしいね」

「そうかそうか」

「じゃ、じゃあ、その、次はご飯が――」

俺はシャルルの言葉を無視し、お茶を手を持った。

そんな俺の行動を疑問に思ったシャルルは、怪訝な表情を浮かべる。

「……一夏？」

「飲め」

「へっ？」

シャルルは俺の発した言葉が理解できず、変な声をあげてしまう。
そうか、分からないか。

俺はお茶を、シャルルの口元に持っていた。

そして、シャルルは俺の行動の意味を理解した。

「飲ませてやるから、飲め」

「えっ、いつ、いや、お茶ぐらい自分で飲めるよお!？」

「そうか、こんなに、熱くては飲めないな」

俺は再び顔を真っ赤にしたシャルルの言葉を無視し、お茶を自分の

口元に持っていく。

そして、熱々のお茶を冷ますために、ふーっふーっと思を吹き掛けてやった。

俺って優しいなあ。

と思っていると、シャルルはドキドキを簡単に越え、混乱の極みへと落ちていった。

（ああああああっ、ぼっ、僕のお茶に一夏のいつ、息がああああっ！！？）

いやー、面白いなあー。

手足を無駄にジタバタさせ、顔を真っ赤にし、それでも拒否はしない。

唐変木が見れば『なに暴れてんだ？』とでも言うだろうな。

「そっか、暴れるほど飲みたくないか。

じゃあ仕方ない——んくっ」

俺は、冷ましたお茶を口一杯に含んだ。

シャルルは顔を真っ赤にしながらも、俺を凝視した。

そして、俺が何をしようとしているのか分かった、いや、分かってしまった。

「い、一夏……ま、まさか」

俺はお茶を含んだ口を、思考が飛びかけているシャルルに近づける。そして、シャルルは混乱しながらも口を少し開き始めた。

二人とも、どこか淫靡な雰囲気を出している。

端から見れば、恋人同士の“あの行為”に見えることだろう。

一夏が迫り、シャルルはまんざらでもない様子だ。

——口移しだ。

俺は口移しで、お茶を飲ませてやるつもりだ。

彼女はまだ、混乱の中にある。

しかし、瞳を閉じて俺を受け入れる準備をしているようだ。
ふふふ——

淫靡な雰囲気は、より一層強まっていく。

二人の唇は交わる瞬間を、今か今かと待ち続ける。

そして……二人の唇は——

ごくん

「……………」

「……………」

——交わらなかった。

俺は唇が交わる直前に、口に含んでいたお茶を飲み込んだ。

口一杯のお茶が喉を通っていく。

喉を潤した俺は、満足そうな表情をしながら、シャルルから離れていく。

無論、シャルルは呆気にとられている。

しかし、どこか残念そうな表情をしているのが分かった。

「残念そうだなあ、シャルル」

「……い」

「い？」

「一夏のばかつ！」

『シャルル様、神様、仏様』の通り名を持つシャルルも、さすがに怒ってしまった。

まあ、当然と言えば当然だがな。

しかし、俺は十分に楽しませてもらった。

そろそろ宿めてやろう。

俺は、幾分か冷めてしまった味噌汁の豆腐をつまむと、シャルルの口に持っていった。

「いやー、悪かった悪かった、アハハハハハ。
ほら、あゝん」

シャルルは未だ、怒りながらも俺の『あゝん』を受け入れた。

「……むう……あ、あゝん」

シャワーのが床に落ちる音が、響き渡る。

シャルルのあゝんを終わらせた俺はシャワールームで、シャンプー

の泡と一日の疲れを洗い流す。

しかし、今日も疲れたな。

こんな調子で体力を消費していったら、俺死ぬっつの。

そんなことを考えると同時に、とある疑問が俺の頭を過る。

――デュノア社は、インパルスの事を何処で知った？

俺がインパルスで戦った事は、今までに二度だけだ。

一度目は、初めてISを起動し無人ISと戦った時。

この時は、誰も見ていないところで戦った。

二度目は、真耶との試験の時。

この時は、そもそも戦闘にすらなっていない。

真耶の奴、勝手に自滅したからな。

今思い出しても、爆笑ものだ。

何が言いたいかと言えば、デュノア社はインパルスの性能を知らないはずだ。

普通ならば、戦いも見ず、性能も知らずに、詳しいデータを取ろうとはしない。

よく分からないインパルスのデータを欲しがるより、『ブルーティーズ』や『シヴアルツェア・レーゲン』等のちゃんとした第三世代のデータを取ろうとする筈だ。

少なくとも、俺ならそうする。

しかし、デュノア社は俺とインパルスのデータを欲しがった。

一体、どういうことだ。

デュノア社の接近が、公の場で戦うセシリアとの決闘の後なら分かる。

インパルスの戦いぶりを見た後なら、詳しいデータが欲しいと考えるだろう。

インパルスの性能が外部に漏れた、ということもないだろう。インパルスはIS学園にも、国際IS委員会にも渡したことはない。従って、俺と天才馬鹿にしかインパルスの性能は分からない。

……いや、千冬姉も知ってそうな気がする。たとえ知らなくても、いずれ、天才馬鹿に聞いただすかもしれない。と、まあ、今はどうでもいいか。

つまり、“誰か”がインパルスの性能をデュノア社に流した。だから、俺に接近しデータを取ろうとした。

しかし、その誰かはインパルスが第四世代であることまでは、流さなかったらしい。

第三世代を作るために、第四世代のデータを取るのはおかしいだろう。

……情報の一部を隠したことから、その“誰か”は何かしらの意図を持って、性能を流した、ということだろう。

その“誰か”は、今は分からない。

あの天才馬鹿と決めつけるのは時期尚早だ。

仮に、天才馬鹿だったとしても、意図は全く分からない。

……今は考えても無駄ということだ。

しかし、まあ、デュノア社のスパイであるシャルルに対し、なんで俺はこうまで甘いんだ？

いつもの俺なら、デュノア社の機密を世界に流し、株を大暴落させてな。

ついでに、シャルルを社会的にも物理的にも、抹殺してやるのに。

今の俺は、なんか、俺じゃない。

シャルルを励まし、ここにいるよう説得した。

しかも、俺の過去まで喋ってしまうとは。

さらに、シャルルの夕食を部屋まで持ってきた……

ハッキリ言って今の俺には、『デュノア社に性能を流した誰か』よりも、『なぜ俺はシャルルに甘いか』の方が深刻な問題だ。

俺のモテスキルは、今まで大量の女を落としてきた。

シャルルもそうだ。

そういった女は平等に扱ってきたはずだ。

しかし、シャルルだけに甘い……

他の女に無くて、シャルルに有るもの……

シャルルスマイルが見たかったのか……

何で、そんなものが見たかったんだろうか？

考えても考えても、答えはでない。

くっ、意味わからん。

……シャルルスマイルの効果だと言っことにしておこう。

それしか、思いつかん。

あろうことが、一夏は周りの女心には鋭いが、自分の心には疎いのであった。

一夏がシャワーを浴びているとき、シャルルはベッドに寝転がっていた。

その表情は怒っているようで、恥ずかしがっているようにも見える。乙女心は、隕石衝突時間の計算よりも複雑なのだ。

「一夏のばか……あんな迫り方って……」

シャルルの胸の鼓動は、いつまで経っても、収まらない。

一夏が迫ってきた。

その淫靡な雰囲気は、シャルルをその気にさせるには十分だった。

そして、あともうちよつとという所で、一夏は離れていってしまった。

それは、恋の炎で高温を持った溶岩に、大量の冷水を浴びせられたかのようなだった。

「……うつうつ」

変な唸り声上がる。

そんなシャルルは、怒るべきか、恥ずかしがるべきか、今度はこちらから迫るべきか、悩みの境地に立っていた。

無論、彼女は自分の心を持て余している。

「一夏のばか……ばかばか」

彼女は持て余す感情を、一夏にぶつけるも、心のもやもやは消えてはくれない。

そんな彼女は、一旦落ち着こうと深呼吸を始める。

部屋が静寂に包まれる。

すると、一夏の使っているシャワーの音が、より一層よく聞こえる。

水が床を叩いている音だ。

そんな音を聴いてしまったシャルルは、シャワーを浴びている一夏を想像してしまう。

（……ああ、一夏の腹筋つて凄い逞し……うああっ！？ 僕一体、何を想像してっ！？）

一度想像してしまえば、もうラビリンスから抜けることはできない。一夏の想像が大量に頭を巡っていく。

一通り想像が終わったシャルルは、ようやく現実に帰還する。

（ば、僕、何やってるんだろっ……）

未だに鳴り響く心臓は、シャルルに一夏のことを突きつける。

『ここにいろ』

——初めて、そんなことを言われた。

母を亡くしてからずっと、居場所がなかった自分。

血の繋がりのだけの父親には氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、ただただ無為に日々を過ごしていた。

いつしか自分が必要とされることさえ求めなくなつて、温度のない灰色の生活が繰り返されていることにもやがて慣れてしまっていたのだ。

そして、父からの命令で日本に言うことが決まるときも、罪悪感以外感じなかった。

そんな自分をすべて吹き飛ばした人。

時に台風のように荒々しく、時に春の桜舞う風のように優しい。

けど、彼はどこか遠い所で儚げに立っている。
近づいても近づいても、遠ざかっていく。

——そんな彼と、出会ってしまった。

——会うつことができた。

——夏は僕のこと必要？

——僕は夏が必要だよ。

一夏、だあい好き

「もう一夏が戻ってくるかな……
冷たいお茶でも用意しとこう」

シャルルはベッドから起き上がり、湯を沸かし始めたのだった。

第八話【だあい好き】

完

第八話【だあい好き】（後書き）

と、いうわけで第八話投下完了です。（＾―＾）

実は、第八話執筆中に通信エラーが発生し、執筆データの一部が消えてしまうという惨事がありました。

おい、嘘だろ、と思いましたたが、やる気をなくすことはありませんでした。

YouTubeのシャルの動画を見て癒されたからです。

「一夏のえっち」

「一夏が食べさせて」

シャルは、最高です、神です。（　　）
シャルが居なければ、予定通りの更新は出来なかったかもしれない。

今作の一夏は鬼畜で、女心を弄ぶのが大好きです。
シャルのファーストキスも奪いかけてましたしね。

無論、女心の扱いは誰よりも知っています。
今思うと、なんて酷い男だろうか。

後ろから刺されても、文句は言えませんよ。

しかし、自分の心は分からない奴なんです。

まあ、うちの一夏はセフレは居ても、誰かに恋したことはないです
からね。

さて、第九話では漸く決闘です。

おっそいですねえ。

多分、決闘まで行くのに九話もかった人は、私ぐらいではないで
しょうか。

しかし、予定通りです。

そりゃ、シャルイベント突っ込んだら、遅くなりますよ。

しかし、そう簡単には事は運ばせません、一夏は。

奴は決闘とかの面倒臭いことが嫌いですからね。

一夏の悪足掻きをお楽しみください。

第九話【一夏の大嫌いな決闘】

キンコーンカーンコーン

授業が終わるチャイムが鳴り響いた。

、放課後となった教室では、女子たちがワイワイと帰る準備を進めている。

そんな教室の扉が急に開くと、女子たちにとって見知った顔が入ってくる。

「織斑くんっ、決闘の時間ですよっ」

入ってきた人物が、実に締めりのない声を発する。

クラスの副担任である山田真耶だ。

彼女の言葉からも分かる通り、今日は一夏対セシリアの決闘当日である。

ということ、真耶は一夏を呼びにきたのだ。
そんな真耶に、近くにいた女子が声をかけた。

「織斑くんなら、授業が終わってすぐに、教室を出ていきましたよ」

「えっ、そうなんですか？」

あっ、もう第三アリーナに行っちゃったんですね」

真耶は怪訝な表情を浮かべるも、閃いたような顔をして納得する。
しかし、その閃きは大暴投の如く的外れだった。

「いや、なんか、凄いスピードで寮に帰りましたけど……」

「……帰っちゃいました……た？」

「多分……あれ、今日決闘じゃ……」
「……………」

沈黙

織斑一夏が逃げ帰った。

この真実は真耶に衝撃を与えた。

そして、段々と顔が青ざめていき、くるっと反転し教室を出ていった。

そんな真耶を見た女子は、ビックリし思わず呼び止めようとする……が。

「ちよつ、山田先生!？」

「早く第三アリーナに連れていかなきゃっ……織斑先生に怒られちゃううう!！」

名も無き女子の制止も聞かず、真耶は廊下を駆けていった。

ウサイン・ボルトもビックリのスピードで。

……教師が廊下を走っているのは、生徒の教育に間違いなく悪いだろうが、どうやら真耶は無視のようだ。

ふーっふーっふーっ

俺……一夏は肩で息をしながら、寮に駆け込んだ。

そりゃー、もう全速力で逃げ帰ったのだ、決闘から。

やはり、決闘なんていう正々堂々とした戦いなんて、真の戦いじゃない。

決闘など、悪の儀式のようなものだ。

それに、アレだ、やっぱり面倒臭い、やりたくない。

最初は、イライラをぶつけられるぞと思って喜んだがな。
というわけで、逃げてきたわけだ。

そんなことを考えている間に、自分とシャルルの部屋の前に帰ってきた。

もう、朝の内に通帳などをキャリーケースに入れておいたからな。
それさえ持っていけば、すぐにこの学園を脱出できるはずだ。

……千冬姉から、セシリアから、決闘から、悪の魔の手から逃げてやる。

そう決意し、扉を開ける。

「おかえり、一夏」

「……シャルル？」

部屋に入ると、待ってましたと言わんばかりの様子で、シャルルが立っていた。

……なにゆえ？

いや、何で、こいつがいんの？

「僕が何でここにいるか、って思ってるでしょ。」

朝、一夏ったらキャリーケースに色々と入れてたからね。

すぐ分かったよ、逃げるつもりだってね。」

俺とシャルルは心の波長が合うらしい。

それは、6日間の同居でわかった。

醤油が欲しいときに、もう一方が醤油を用意することぐらい簡単だ。
その雰囲気は長年連れ添った夫婦のようだ。

このネタでシャルルを何度も弄ってやったなあ。

しかし、俺としたことが、こいつとの以心伝心を計算にいられてなかったな、くそつ。

俺はなんとか脱出を図るべく、扉の近くに置いておいた筈のキャリアケースを手に取りうとした。

……あれ、キャリアケースがない……

「シャルル、キャリアケースはどうした？」

「うん、中に入っていたもの全部、元の場所に戻しといたよ」

いつものシャルルスマイルで、俺の問いに答えるシャルル。

しかし……なんてことだ、ちくしょう。

シャルルはこの6日間で俺の扱い方を、完全に覚えてしまった。

……まるで、優しくなった千冬姉のようだ。

「もう、覚悟決めよう、一夏。

織斑先生から逃げられるわけ無いよ」

シャルルはまるで、聞き分けのないガキを相手にしている母のような台詞を良い放つ。

「シャルルってさあ、なんか母性本能強いよな。
良い母親になるぞ」

「ふえっ、良い母親に？」

「おう」

「……母親かあ」

顔が火照りながら、シャルルの意識が脳内に沈んでいく。

おお、シャルルの妄想劇場が始まったぞ。

（ああ、僕がお母さんで、一夏が……お父さん。
夫婦？ 夫婦なのかな。
夫婦だよ、これえ♪）

いつもの夫婦責めを食らったシャルルは、現実に戻ってくる気配がない。
そんなシャルルを爆笑しながら見てみると、部屋に足音が近づいてくる。

そして、部屋の扉が大きな音を上げて開いた。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

乳を揺らし、汗を滝のように流しながら入ってきたのは、真耶だった。

きつと、全速力で走ってきたのだろう。

まったくもって、ご苦労なことだ。

そんなに急いで、何かあったのか？

取り合えず、落ち着かせよう。

「どうどうどうどうっ」

落ち着け、真耶。

はいはい、深呼吸、息吐くなよ」

「す~~~~~~~~っ、うっ」

「吐いて〜、息吸うなよ」「は~~~~~~~~っ、げほ
っげほっ」

肺に負担をかけすぎた真耶は、咳き込んでしまった。

……本気でやるか、馬鹿だろ、こいつ。

「げほっげほっ、うえっ」

「だ、大丈夫ですか？ 山田先生。」

未だに咳き込む真耶を、シャルルは心配そうに覗き込む。
どうやら真耶の咳で、シャルルは現実に引き戻されたようだ。

「けほつ、だつ、大丈夫ですつ……」

そつ、そんなことより織斑くんつ、逃げちゃ困りますよおつ。
今日は決闘ですよおつ！」

真耶は膨れっ面になり、俺に迫ってくる。

その顔は……なんつつか、おたふく風邪でも引いたように見える。

「おたふく風邪か……お大事に」

「違いますよつ、怒ってるんですつ！」

「ごめん、迫力がないから分かん。」

額に『怒』とでも書けばちったあマシだぞ」

「わ、笑われちゃいますよお！ そんなことしたらあ。」

早く行かないと、織斑先生にも怒られちゃいますよおつ！」

なにやら、耳や鼻から蒸気が出てきそうだ。

それにしても、真耶が俺を決闘に誘おうとする悪の尖兵だったか。

「ええい、諦めんど、正義は悪に屈しないんだつ！」

と宣言し逃げる手段を必死に思考する俺だったが……

しかし、キャリアケースをシャルルに片付けられた辺りから、俺は
少しずつ抗う氣力を削がれていっていたのだ。

そんな俺に一瞬のスキが生まれてしまった。

それを見逃さなかったシャルルが、俺の手を握り締めた。

「ほらっ、早くいこっ」

「ええいつ、ブルータス、お前もかつ！」

そのまま俺は第三アリーナ……いや、悪魔の祭壇に引き摺られていった。

「東、決闘をどこで知った……」

「まーまー、その程度の事、この超の付く天才である篠ノ之東が分からないわけがないのだよ。」

あつ、そうそう、決闘、私も見てるからね。」

じゃ〜ねえ〜」

決闘の舞台……一夏の言葉を借りれば悪魔の祭壇である第三アリーナ。

その入り口で篠ノ之箒が、会場に姿を表さない一夏をイライラしながら待っていた。

さらに、そこから離れた場所で織斑千冬が壁にもたれ掛かりながら、携帯で会話していた。

数分前、千冬は山田真耶と一緒に一夏を待っていたが、中々会場に来ないため痺れを切らし、真耶に呼びにいかせたのだ。

その後、箒が第三アリーナに来たため、二人で待っていたわけだが

……

突如、千冬の携帯が着信を知らせるアラーム音を響かせたのだ。

着信の相手が画面に表示されると、千冬は実に嫌そうな表情をした。彼女は、箒に聞かれない距離まで離れると、携帯を開き会話を始め

た。

因みに、千冬の着信音は初期設定のままだ。
ただのアラーム音である。

実に味気ない、彼女は最近の女とはかけ離れた場所にいるのだ。

そんな千冬は携帯での会話を終えると、僅かに曇った表情で箒のところで戻ってきた。

（インパルスは……設計段階から一夏専用機として開発された……
なら、ワンオフ・アビリティーも……
一夏にとって戦うことこそが……

——運命）

千冬の表情の変化は実に小さく、箒は気づかない。

しかし、僅かな違和感を感じた箒は、電話の相手を詮索したい衝動に駆られた。

「ちふ……織斑先生、今の一体誰から……」

「お前の姉だ」

電話の相手を知った途端、箒は顔を苦ませる。

同時に、電話の相手を詮索した自分を後悔した。

軽く鬱な気分陥った箒は、話題を逸らそうとする。

「……いつ、一夏はまだでしょうか？」

「大方、逃げる手段でも考えているんだろう」

「……はあ、相変わらず、あのうつけ者は」

一夏は決闘が大嫌いだ、今までの彼の言動からも分かる通り。
それは彼が、『決闘』正々堂々の勝負』であると考えているからで

ある。

異論もあるだろうが、決闘とは基本的に戦士の誇りをかけるものだろう。

だから、戦士の誇りもプライドも、構成分子の一欠片すら持たない一夏は決闘を嫌悪しているのだ。

だが一夏にとって決闘とは美点もある。

決闘を公開拷問の場として利用できることだ。

言いつまでもないが、決闘取り扱い説明書にない間違った使い方である。

しかし一週間前、セシリアを公開拷問できると考えた一夏だが、よく考え直してみれば面倒臭いと考え直した。

要するに、一夏にとって公開拷問よりも面倒臭さと嫌悪感の方が勝るのだろう。

一夏を待つのがそろそろ限界になってきた——主に箒が——ところで、漸く寮の方から人影が見えた。

箒はそれが見えた直後、一気に不快な表情となる。

（なっ、何をしておるのだっ！？ あの子はっ！）

三つの人影は駆け足で向かってくる。

一つは、一夏を呼びにいった山田真耶。

二つと三つは……くつついているのだ。

言わずもがなだが、それは一夏とシャルルであるのだが……二人は手を握りしめているのだ。

まあ、それは行きたくないと渋る一夏を、無理矢理連れてくるため引っ張ってきているだけなのだが……

（いつ、いや待てっ、シャルルは男だろうっ！落ち着け私っ！）

箒は男であるシャルル——実際は男ではないが——に嫉妬している
自分に混乱していた。

一方、シャルルは……

（連れてくるためとはいえ、いつ、一夏と手を繋いじゃったよ〜っ。
ああ、一夏の手、大きい）

こっちもこっちで、混乱していた。

——パアンツ！

突如、何かを叩いたような音が鳴り響く。

混乱していたシャルルと箒は、その音でハッと正気を取り戻した。
二人は音の発生源を探すと、それは予想通りの場所で見つけた。

（ああ、やっぱり）

一夏が千冬の出席簿落としを食らった音だったのだ。

まあ、恥も外聞もなく決闘から逃げようとすれば、そういうキツい
ツツコミを受けるのは当然である。

……どうやら、千冬はツツコミ専用出席簿を持ち歩いてるらしい。

「セシリアが待ちくたびれているぞ。

まったく、お前は巖流島の武蔵か。

まあ、良い、早く行くぞ」

「千冬姉、俺は武蔵じゃねえよ。

俺は逃げるつもりだったからな」

「更に悪いわ、馬鹿者」

織斑姉弟はいつもの漫才のような会話をしながら、第三アリーナに入っていく。

そして、シャルルと箒に真耶は織斑姉弟に遅れまいと、後を追いかけた。

「ええつ、インパルスって、まだ初期設定なの!？」

シャルルはビククリした様子で、声を荒らげる。

Aピットに到着した俺は、嫌々ISを展開しようとするが、突如シャルルに専用機のことを聞かれたのだ。

まあ、無論、第四世代だのなんだのは隠したが、基本性能と未だに初期設定であることは、隠す必要がないからな。

「……じゃあ、戦闘中に初期化と最適化を終わらせるしかないね……」

シャルルはどうやら、本気で心配しているようだ。
明らかに声が震えている。

心配しているのは、箒も千冬姉も真耶も同じようだ。

……まあ、千冬姉はそれを決して表には出そうとは思えないが……

「まあ、心配しなさんなってえ。

……それも策の内だ」

「「策?」」

俺の言葉に、箒と真耶が示し会わせたかのように、怪訝を込めた声が重なった。

そりゃ、そうだ。

策を考えているということは、端から決闘をやる気だったってことだからな。

しかし、シャルルと千冬姉は驚くことはない。

「その策って、僕に引き摺られながら考えてたよね」「そして、今、思い付いた、ということだろう」

「あー、相変わらず、良く分かってんじゃねえか」

二人の言う通り、この策は出来立てほやほやだ。

まだ、店頭にすら並んでいない。

その事を知った箒と真耶は、納得したような表情をした。

まあ、策も思い付いたわけだからな。

そろそろ、決闘という邪悪な儀式に参加してやるか。

俺はそう考えると、襟に付けてあるインパルスに触れた。

「——さて、とつとと終わらせよう。」

早く終わらせて寝るぞ、俺は」

——衝撃を纏う

肘と膝から下、そして肩に胴体へ灰色の装甲が展開される。

更にリアスカートと四本の頭部アンテナ、左腕にアンチビームシールドが装備された。

インパルス始めて見たシャルルと箒は、随分とスマート……いや、貧弱な印象を受けた。

引き締まった筋肉のような装甲は、スマートなのだが……

なんというか、武器らしい武器がないのだ。

初期設定のインパルスの武器は、パツと見ただけでは分らない。リアスカートに収納されたナイフと、胸部C I W Sのみであり、目立つものはシールドだけなのだ。

C I W Sとナイフだけでは、大したダメージを与えないだろう。シャルルと箒はより一層、『一刻も早く第一形態にしなければならぬ』、と思い知る。

「んー、じゃあ、行ってくる」

俺はまるで、コンビニに弁当でも買ってくるかのような、軽い言葉を吐きピット・ゲートに進んでいった。

そんな俺は、チラリとシャルルに視線を向けた。

視線に気づいたシャルルは、表情に現れていた不安を吹き飛ばし、シャルルスマイルを向けてきた。

——まあ、負ける気はないからな、お前の不安は徒労に終わるさ

浮いていた足をカタパルトに乗せる。

すると、暗闇から微かな光が漏れ始める。

ゲートが開放されたのだ。

外から観戦している女子共の歓声が聞こえてくる。

その歓声を遮るかのように、オペレーターの通信が入る。

『カタパルトオンライン
ゲート開放を確認』

発進シークエンスをインパルスに譲渡』

『全システムオールグリーン』

『インパルス、発進どうぞ』

——織斑一夏、インパルス、出る——

第九話【一夏の大嫌いな決闘】

完

第九話【一夏の大嫌いな決闘】（後書き）

こんな時間ですが、更新です。

……なぜ、こんな時間に……OTL

ああ、眠い（´A`）

もう、後書きなんて書かなくても……いや、何でもありません。
例え、誰も見ていなかったとしても書かなくては。

と、いうわけで、第九話はクオリティ低いかもしれませんが。

眠くて、頭回ってないんで……ただの、言い訳です

（^ー^；）

なので近いうちに、編集するかもしれません。

……実は完璧な状態で更新するために、明日に更新しようとも思いました。

しかし、まあ、自分で決めた締め切りは守ろうと思ひまして……

あ、なんか、俺、カッコいいこと言った（^ー^）

さて、実は数日前、MGデスティニーガンダムが二回も壊れました
（T・T）

一回目はスタンドが折れただけでした。
しかし接着剤だけだと、デスティニーの重さに耐えられなかったのです。

そして、二回目の落下はスタンドごとでした。

デスティニーの翼が折れました。

私の心の翼も折れました。（Ｔ・Ｔ）

たまたま、１／１００デスティニーの翼があつたんで、それで直しました。

スタンドは接着剤とガムテープ、そして綿棒で補強しました。綿棒を使ったおかげで、デスティニーの重さに耐えています。

まあ、被災地の事を思えば、どうということはないです。

私の翼ごときで、あーだこーだと言っではなりませんよね。

では、もう寝ます、おやすみなさい。

第十話【真の衝撃】

俺とインパルスは第三アリーナ空中に舞い上がる。

決闘の対戦相手、セシリア・オルコットは待ちくたびれた様子で停滞していた。

決闘開始を告げる鐘が鳴って、大分経っているので仕方がない。

そんなセシリアがイライラを隠そうともせずに、むしろそれをぶつけるような台詞を吐く。

「……随分と遅かったですわね、逃げたかと思いましたわ」

「おう、逃げた」

「……は？」

俺の返答内容は相当意外だったらしく、呆氣に取られた言葉を発するセシリア。

まあ、俺を貶すつもりだったんだろうが、ほんとに逃げたとは思わなかったようだ。

「いやなに、逃亡しようとしたらシャルルに捕まってな。

無理矢理連れてこられたんだ。

いや、まったく、逃げ損ねた」

と残念そうに、さっきの俺を思い浮かべる。

そんな俺に対し、セシリアは侮蔑を込めた視線を向ける。

戦士の誇りを踏みにじるような行いを、彼女は許せないらしい。

まったく、誇りなんてものは持つべきものじゃないのにな、邪魔なだけだ。

けど、M男なら喜びそうな視線だ。

「……そうでしたの。」

尻尾を巻いて逃げ帰ったわけですわね」

「……人間に尻尾は無いはずだが……」

「う、うるさいですわ!」

俺の正確かつ的確なツツコミに、セシリアはイライラを募らせる……が。

突如として深く深く深呼吸をするセシリア。

すると、どういう訳か、すぐにいつもの高飛車な態度が戻ってきた。

(わたくしが、こんな男に負けるはずがない)

彼女の深層心理には“女尊男卑”という四文字が刻まれていた。

負けるはずがないという、彼女にとつての常識。

それに安堵した彼女は、己を取り戻すことができた。

“女尊男卑”という言葉は、観戦している女子の大半にとつても、常識のものであった。

彼女たちは頭の片隅で、『まあ、セシリアが勝つだろう』と思っていたのだ。

女子たちの雰囲気を読み取ったセシリアは調子に乗り、俺に人差し指を突き出した状態で向け、宣言する。

「最後のチャンスをおげますわ」
「ほう」

チャンスとやらに僅かな興味を持った俺は、取り合えず聞いてやることにした。

しかし——お前“も”チャンスを与えるつもりだったんだな。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

そう言つて目を笑みに細める。

そんなセシリアを見た俺は、一瞬呆氣に取られるもすぐ愉快になつていく。

――警戒、敵IS操縦者の左目が射撃モードに移行。

――セーフティのロック解除を確認。

彼女の機体の色は、鮮やかな青。

その名は“ブルー・ティアーズ”という。

その最大の特徴は、機体と同じ名を冠する“ブルー・ティアーズ”という武装である。

背に従えた砲台型四機と、腰部に仕込まれたミサイル型二機。

それが本体から分離し自立して機動、全方位360°のオールレンジ攻撃を仕掛けられる。

それだけでなく、セシリアの手には2mを超す長大な銃器、六七口径特殊レーザーライフル“スターライトMK?”が握られている。

そのスターライトMK?が、俺に向けられる。

しかし、ISの告げる情報など、興味はない。

ブルー・ティアーズも、眼中に入っていない。

ただただ――愉快

「クッ、フハハハッ、ハハハハハハハハッ!!!」

「……な、なんですか？」

アリーナ全体に響き渡るほどの爆笑をする俺に、セシリアは怪訝な表情を浮かべる。

俺の反応は彼女にとって、予想外以外の何物でもなかった。

フツツ、仕方ないだろう、そんなものがチャンスとは……
もはや、笑うしかない。

しかし、笑ってばかりでは、決闘は始まらない。

笑いを腹の底に封じ込めた俺は、チャンスとはなんたるかを教えてやることにした。

さあて、作戦開始だ。

「なもん、チャンスとは言わんな」

「そう？ 残念ですね。それなら……」

「本当のチャンスはな、こういうことを言うんだ」

俺は、ナイフを取り出すと――地上に“投げ捨てた”

インパルスにとって唯一の近接武器である“フォールディングレイザー対装甲ナイフ”。

それを捨てるという暴挙を見たセシリアは、怪訝を越え驚愕に包まれる。

「あつ、あなた、何を！？」

「詫びだ」

「……詫び？」

「ああ、遅れた詫びに俺は、今から30分間、攻撃しない」

――絶句

応援しているシャルルたちも、観戦している女子たちも、相手であるセシリアさえも、絶句に支配される。

あり得なかった。

俺のほうが弱いと思い込んでいる、セシリアや観戦している女子たちにとって、今の発言は度肝を抜かれるものなのだ。

そうして呆気にとられているセシリアに、俺は笑みを浮かべながら急かした。

「どした、早く撃てよ。

始まらんだろ、この馬鹿」

その一言が、二人にとっての決闘のゴングだった。

――警告！ 敵IS射撃体制に移行。

――トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわねっ！」

耳をつんざくような独特の音。

俺はインパルスのスラスターを吹かし、スターライトMK？から放たれた閃光を避ける。

「っ！？ まだですわ！」

一撃を避けた俺を見て、セシリアは少し驚いた表情をするも、次の戦闘行動を取る。

背のブルー・ティアーズ——ああつ、もう、ややこしい、以下ビットな——が本体から分離する。

空中で浮遊するビットは、銃口を俺に向け飛翔する。

「さあ、踊りなさい。

わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

俺を取り囲むように停滞していた四機のビットは、セシリアの『踊りなさい』の一言で舞い始める。

その様子はまさしく、円舞曲。

ビームの雨が全方位から降り注ぐ。

しかし、俺は避ける、避けて避けて避けまくる。

頭と四肢を僅かにずらし、スラスターを吹かし、ビームとビームの間を掻い潜っていく。

そんな俺は、観戦席の女子たちから見みると実に美しい。

これもまた、円舞曲であった。

——試合開始より15分——

俺は、まだ一撃も貰っていなかった。

それはおろか、汗すらかいておらず、頑張っている様子もない。涼しい顔で、ビットの一撃を避け続けている。

それに対し、セシリアは冷や汗をかき始めていた。

その汗は、己の猛攻を避け続けていることに対する焦りだけが原因ではない。

俺への、とある警戒心があつたのだ。

(……あの男が約束を守るとは思えない)

セシリアは、俺の『攻撃しない』という宣言を鵜呑みにはしていなかった。

『必ずどこかの段階で牙を向く』と、そう警戒していた。

それに対抗するため、彼女は腰のミサイル型ビットを温存している。俺が攻撃に転じた瞬間、カウンターをぶちこむためのものだろう。切り札というわけだ。

それは、彼女が冷静さを保っている証拠であつた。

そんなセシリアに、俺の声が届く。

「頑張ってるなあ、セシリア。

負けんのは、決まってるのによお」

「……ど、どういふことですか？」

彼女は俺の言葉に敏感に反応し、意図を聞いてくる。

「いやな、お前がイギリス、俺を応援してるシャルルがフランス。

そして、仮に俺をアメリカにして見たらな……」

アメリカ独立戦争の構図が出来上がるわけだ。

だからお前は負ける、歴史は繰り返すつてな」

「なっ……」

俺の無理矢理な歴史の繰り返し方に、セシリアは言葉を失う。
よしよし、策は順調に進んでるぞ。

「ああ、すまん、負けた戦争を蒸し返してしまったなあ。

かつて繁栄を極めた大英帝国が衰え、代わりに超大国の座に上り詰めたのは、かつての植民地……

アメリカ合衆国だもんな。

奴隷より位の低い主人とは、おかしい話だ。

しかも、今やお前らは、金魚の糞。

……なんか、楽で良いな」

「……い」

「い？」

「言いましたわね、よっくも、そのような戯れ言を……」

セシリアがいつもとは正反対の、低い声を発する。

今の彼女は、おそらく人生最大の怒りを覚えているだろう。

なぜなら彼女は、イギリスを馬鹿にするとすぐに反応するのだ。

まあ、良く言えば愛国心という感じだろう。

しかし、いい感じに頭へ血が通ってるぞお。

「もう、ボロボロなどでは済まさない……

地獄を見せて差し上げますわああああ……!!」

セシリアの猛攻は、より一層激しくなっていく。

しかし、冷静さを欠いた猛攻であることは明らかである。

そして、俺が約束を破ることに対する警戒心も失っただろう。

これが一番重要だ、後は…… タイミングのみ……

「す、すごい、すごいよ…… 一夏」

Aピットでリアルタイムモニターを見ていたシャルルが、ぼそっと独り言を漏らした。

そんな彼女は、僅かに顔を赤らめていた。

予想以上の一夏の実力は、シャルルの瞳には凄まじいほどカッコ良く映っていたのだ。

「まさか、ここまでとは…… んんっ、ごほんっ」

同じように思っていたのは、なにもシャルルだけではない。
篝の瞳にも、カッコ良く映っていた。

…… まあ、そんな自分が恥ずかしらしく、咳払いで自分を落ち着かせているが……

「それにしても、天才ってこういうことを言うんですねえ」

真耶がため息混じりにつぶやく。

モニターの一夏は、まさしく天才の名を欲しいままにしていた。

ISの起動が三回目、そんな一夏がイギリス代表候補生のセシリアを完全に圧倒しているのだ。

しかし、弟の戦いぶりに一番誇らしいはずの千冬はというと、どこか辛そうな表情を浮かべる。

千冬の僅かな変化に、他の三人は気づくことはできない。

そんな千冬は、心の中で勝手に真耶へ返事をした。

(……ただの天才だったら、どれ程に良かったか)

彼女の心の声を聞けるものは、今は誰もいない。

……いや、どこかで決闘を見ているであろう篠ノ之束だけは、聞けたかもしれない。

「二七分、良く頑張ったな、偉いぞ」

「くっ……」

状況は全く変わっていないかった、いや、さらに酷くなったと言える。俺はハッキリ言って、今から千冬姉に『トリアスロン行け』と言われても平気だ。

それに比べて、セシリアは肩で息をしている。

まさしく疲労困憊、ということだ。

俺は今まで、約束通り攻撃はしていない。

俺は攻撃をひたすら避け、彼女はひたすら攻撃を浴びせる。

スターライトMK?もビットも、銃口は高温を出しているだろう。

彼女にハンデを与えたにも関わらず、俺のほうが優位にたっている。

それは、俺と彼女の実力差を如実に表していた。

しかし、彼女はまだ、切り札を使っていない……

もうそろそろ、仕掛けるとするか。

俺の方も、“時間”だ。

「ところで、ちょっとアドバイスがあるんだがなあ……」

「貴方のアドバイスなんて、いりませんわっ!」

「まあまあ、そう言わずにさあ。

その腰の奴、温存もいいが使わずにアタックチャンスを終えるつもりか？」

「っ！？」

彼女は息を飲んだ。

怒りで段々と失われる冷静さ、それでも温存していた切り札、それを見抜かれたのだ。

「はあああああっ！！」

彼女は俺の誘いを撥ね除けるように、ビットによる攻撃を再開する。無論、俺は今まで通りビットを避ける。

そんな俺に、スキができる、いや“スキを作った”。

「お望み通り使って差し上げますわっ！

墜ちなさいっ！！」

“作られたスキ”を突いた一撃。

ブルー・ティアーズの腰に装備されている、ミサイル型ビット。

それが本体から離れ、俺を襲わんと飛翔する。

しかし、彼女に冷静さがあれば俺のスキの不自然さに気づいただろう。

今まで攻撃を避けた俺は、一度たりともスキを見せてはいないのだ。

しかし、今はあっさりとスキを見せた。

そんな不自然さに彼女は気づけず、切り札を使った。

いいぞ、俺の作戦は順調に進んでいる。

俺の作戦を知るよしもないセシリアは、勝利を確信しほくそ笑む。

そして、ミサイルが着弾する直前、俺の待っていた瞬間が来た。

「スラスタ―出力調整完了

VPS装甲電圧配分調整完了

神経再接続完了

メタ運動野パラメーター更新完了

MA-BAR72/高エネルギーレーザーライフル 出力調整完了

シルエットシステム使用可能確認

」

「フォースシルエット

MA-M941/ヴァジュラビームサーベル

出力調整完了」

「ソードシルエット

MMI-710/エクスカリバーレーザー対艦刀

RQM60/フラッシュエッジビームブーメラン

出力調整完了」

「ブラストシルエット

M2000F/ケルベロス高エネルギー長射程ビーム砲

MMI-M16XE2/デリュージー超高初速レール砲

GMF39/四連装ミサイルランチャー 誘導弾選択、AGM14

1/ファイヤーフライ誘導ミサイル

MA-M80/デファイアントビームジャベリン

出力調整完了」

「フォーマット終了

フィッティング終了

全システムオールグリーン」

「ZGMF-X56Sインパルス——システム再起動」

目の前に突如として現れた、空中ディスプレイ。
そこには、凄まじい量のデータが、滝の如く流れていく。
そのデータをインパルスが、理解できぬほど高速で処理していく。
そして空中ディスプレイが消えた瞬間、装備していたインパルスが
粒子化、再構築が始まる。

勝利を確信した俺も、気づかれないようにほくそ笑んだ。

そして——アリーナ中にけたたましい爆発音が響き渡る。

「そつ、そんなあつ!?!」

モニターを食い入るように見つめていたシャルルは、悲鳴にも近い
声をあげた。

モニターいっぱい映っているのは、一夏を包み込む黒い爆煙。
シャルルと同じものを見つめる他の二人も、辛い表情で戦況を見つ
めいた千冬まで、真剣かつ不安な表情をして注視する。

「……ふん」

黒煙が晴れ、そこにあるものを見た千冬はいつもの表情で鼻を鳴ら
し、一言。

「タイミングを計ったな、馬鹿者め」

——衝撃は、真の姿を明かした。

黒煙が晴れる。

それを、勝ち誇った表情で見るセシリア。

観戦席の女子たちも、『決闘の勝敗はついた』と知っているだろう。

しかし彼女たちは、あり得ない光景を目撃し、呆けてしまう。

そこにいたのは、紛れもなく――激変したインパルス、そして一夏。

灰色一色であつた装甲は、見違えていた。

肘から下、膝から下、腰部のリアスカートの装甲は、雲以上に汚れない純白。

肩と胸部は、天空よりも濃い青。

腹部は、赤と白に別れている。

変化したインパルスは、シャルルの故郷であるフランスの国旗と同じ、トリコロールだ。

この色の変化の理由は、全ての物理衝撃を無効に帰すVPS装甲を展開したためである。

そして、なによりも違うところは背部だ。

先程まで何もなかったそこには、大推力スラスターと複数のバーニアスラスターを、そして黒と赤の放熱板を兼ねた六枚の翼を背負っていた。

シルエットシステムの一つ、その名はフォースシルエット。

さらに、リアスカートには高エネルギービームライフル、フォースシルエットにはヴァジュラビームサーベルの柄がマウントされている。

漸く、インパルスは真の姿を現す。
名は――フォースインパルス。

第十話【真の衝撃】

完

第十話【真の衝撃】（後書き）

よしっ、今日は早いぞ。

（^ - ^）

と、いうわけで更新完了です。

早速ですが、イギリス人の皆様に謝罪します。

m ((m m ((m m ((m m ((m

一応言っておきますが、私が言ったのではなく、一夏が言ったことですからね。

実は、前話の後書きとシンさんの感想への返信にミスがありました。取り合えず土下座します。

m ((m m ((m m ((m m ((m

壊れたデステイニーは、光の翼がついてくるやつなんです、翼の代用に使ったのは1/100デステイニーではなく、通常版MGデステイニーでした。

……やっぱ、あのときは寝ぼけてたんで仕方ないです、と言い訳させてもらいます。（^ - ^ ;）

今回のインパルスの一次移行の時、“出力調整”だの“システム再起動”とか言うシーンがありました。

あれは、ガンダムSEEDシリーズのストライクやストフリなどの初登場時にやってたやつですね。

キラはこれが一番カッコいい。

だから、大分力を入れました、ウザいぐらい長いでしょ。

うざかった人には申し訳ないです。

m (——) (——) m m (——) (——) m m (——) (——) m

まあ、やってたのは一夏ではなくインパルスですが。(^ | ^ ^ ;)

一夏の作戦とやらは、次話で分かります。

楽しみにしていってください、彼の卑怯が炸裂しますので。

なんか謝ってばっかの後書きでした。(^ | ^ ^ ;)

第十一話【卑怯こそ正義】

天空に鎮座する一夏、そしてフォースインパルスを見たセシリアは、驚愕し声を荒らげた。

「まっ、まさか……一次移行！？」

あ、あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

「おう、驚け驚けえ」

セシリアの言う通り、インパルスの激変は一次移行によるものだ。セシリアの驚愕は無理もない。

今まで一次形態だと思っていたインパルスが、実は初期設定だったのだ。

その初期設定の機体を使っている気に食わない男に、今この瞬間、苦戦している自分がいる。

この決闘で『30分間、攻撃をしない』と宣言され、イギリスをメチャクチャに言われ、圧倒的な差を見せつけられ、切り札を潰され、しかも初期設定のISを使っていたのだ。

過去を遡ってもあり得ぬこの状況に、セシリアは驚愕に加え凄まじい焦りを覚える。

すでに、正常な判断はできなくなっていた。

「くっつ、行きなさいっ、ブルー・ティアーズ！！」

彼女はもはや、悲鳴のような声をあげる。

その声に呼応し、ビットたちが一夏にビームを放つ。

しかし放たれたビームは、一夏とフォースインパルスにとって、ま

さしく止まっているように見えた。

フォースシルエットは、高感度ハイパーセンサーを搭載した高速戦闘用シルエットだ。

その名の通り、全シルエット最高の速さを誇る。

そんなシルエットを装備した一夏は、スラスターを吹かし洗練さを失ったビームの雨を、凄まじい速度で避けていく。

「はっ、速いつ!？」

予想を遥かに越える速度に、セシリアは怖じ気づく。

そんなセシリアを見た一夏はただ避けるだけでなく、避けるふりをして段々とセシリアに近づいていく。

しかし、正常な思考が出来なくなったセシリアは、近づいてくる一夏にまるで気づかない。

（もう、決闘は終わりだ、このスキがほしかった!）

一夏はセシリアにある程度近づくと――ビームサーベルの柄を握り締めた。

この時になって、漸くセシリアは気付く。

しかし、起こすべき行動が間違っていた。

避けるよりも“時間の確認”を優先したのだ。

（まだっ、29分っ!）

一夏の『30分間、攻撃をしない』宣言から、まだ“29分”しか経っていない。

それなのに、約束を反故にし攻撃をしかけた。

それを知ったセシリアは、怒りを露にする……が

「っ！？ 貴方、約束を破る気っ——」

セシリアは硬直し言葉を止める。

そして、思考の中で疑問にぶち当たる。

（わっ、わたくしは……最初から警戒していたはず……）

そう、彼女は一夏の約束など信じていなかった。

なのに、完全に騙された自分がいる。

これこそ、一夏の作戦であつた。

彼の作戦は、こうだ。

まず『30分間、攻撃をしない』と宣言する。

しかし、約束など鵜呑みにしていないセシリアは、カウンターのための切り札を用意するはずだ。

そこで、イギリスを馬鹿にして彼女の頭に血を上らせる。

そして、頭に血が上ったセシリアに切り札を口八丁手八丁で使わせる。

この時、切り札を食らう直前に一次移行するように、タイミングを合わせる。

これが、一夏にとって一番大変だった。

インパルスの演算能力と、ISの一次移行にかかる平均時間を計算し、ベストタイミングを割り出さなければならなかった。

しかし、彼はそれを成功させたのだ。

後は、一次形態となったインパルスで避ければいい。

VPS装甲があるため、切り札が実体兵器なら、避ける必要すらない。

切り札を無効化され、しかも今まで戦っていたのは初期設定なのだと知ったセシリアは、正常な思考を失うだろう。

冷静さを失った彼女は、防御を捨てた猛攻に転じる。

即ち、『一夏が約束を反故にし反撃する』ことに対する、警戒を解いてしまったのだ。

そこに致命的すぎるスキができる。

後は、一気に徹底的に攻撃を加えるだけだ。

無論、端から見れば卑怯極まりない作戦である。

しかし、一夏にして見ればどうでもいいことである。

『勝てば官軍、負ければ賊軍』この格言を忠実に実行したにすぎない、と彼は考えていることだろう。

そうして、彼はビームサーベルによる一閃を繰り出した。

なんとか凌ぐ方法を思考するセシリアだったが、フォー스インパルの速度に逃れられるはずがなかった。

「ハアアアアッ！！！」

「きゃああああっ！！！！」

耳をつんざく悲鳴。

そんな悲鳴も気にせず、一夏は両手に握る刃の嵐を止めることはない。

一閃、一閃、一閃、一閃、一閃、一閃、一閃、一閃、一閃、一閃！

その猛攻から逃げる術もなく、ただひたすらに耐えるしかないセシリア。

みるみるうちに減っていくシールドエネルギー、刻まれていく装備シールドエネルギーを四割ほど削られた段階で、漸くセシリアは刃の嵐から逃れることができた。

そんなセシリアを見た一夏は、嫌な笑みを浮かべ言い放つ。

「やっぱり、切り札つてもんは、最後まで温存しとくもんだぞ」

一夏は、さも当然かのように言う。

しかし、一夏を凝視するセシリアの耳には届いていなかった。

「な、なんですの……それは……」

インパルスが背負っていたフォースシルエットが、淡い光を帯びているのだ。

その光は、儚き桜のように一瞬で収まった。

光の晴れた先のインパルスは、またもや姿が激変していた。

装備していたはずのフォースシルエットが消え、フラッシュエッジビームブーメランとエクスカリバーレーザー対艦刀を携えたシルエットに変わっていた。

格闘戦用シルエット、ソードシルエットである。

それに合わせ、インパルス本体も姿を変えた。

青かった装甲が、まるで色が落ちたかの様に消えていく。

代わりに装甲は、美しい赤色を帯びていった。

その名は——ソードインパルス

これこそが、シルエットとパッケージの最大の違いである。

パッケージとは第三世代までのISが装備できる、追加アーマーや増設スラスターなどの装備一式のことである。

これによりISは、ありとあらゆる戦況の変化に対応できる。

しかし、かつて束が言ったように第四世代はパッケージを必要としない。

それに代わる技術こそが、インパルスのシルエットシステムである。パッケージは一度装備すると、戦闘が終わるまで装備を変えられない。

しかし、シルエットシステムは戦闘中、瞬時にシルエットを換装できる。

即ち、パッケージは“戦況”には合わせられるが、シルエットは“戦闘中に戦況が急に変化”することにも合わせられる。

これこそが、第四世代——インパルス

そして、一夏は背中の中のソードシルエットに装備された二本のエクスカリバーレーザー対艦刀に、手を伸ばした。

さらに、握り締めたエクスカリバーの柄同士を連結。

この連結形態での名を——“アンビデクストラスフォーム”という。二本に連結し、5 m 近くにまで長くなったエクスカリバーを、ヘリのように両手で回転させた。

高速回転するエクスカリバーは、空気を、空間を、天空を切り裂く。

そして剣を携えた衝撃は、蒼い雫をも切り裂かんと飛翔する。

（まずいつ、今の状態でアレを食らったらっ！）

危機感を募らせたセシリアは、一夏の接近を妨げようとビットに命令を下す。

それに従順に従ったビットがビームを放つ。

もはや最後の足掻きに近いそれを、避けながら再接近する一夏。そして——

「こいつでエエエッ!」

——縦一閃

一撃に崩れ落ちていくセシリア。
エクスカリバーをしまう一夏。

この瞬間——雌雄は決した

『試合終了、勝者——織斑一夏』

「やった……一夏が、一夏が勝ったああ！」

「う、うむ、さ、流石だ。一夏」

「織斑くんが勝ちましたよおつ、ほんとにすごいことですよお！」

Aピットのモニターで、勝利の瞬間を見届けたシャルルたちは、歓喜の渦に巻き込まれていた。

口々に喜びの言葉を発する三人を尻目に、千冬は複雑な表情を浮かべる。

（一夏には、インパルスが必要……か……）

そんな千冬の表情を見た真耶は、照れ隠しだと思ったのか言っではならんことを言ってしまった。

「あゝ、照れてるんですか？ 照れてるんですね？」
「ふんっ！」

破壊神の掌が真耶の頭を、ホールドした。

そしてそこから放たれる破壊神の一撃、ヘッドロック・デストロイが炸裂した。

「いたたたたたっ!!」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！　わかりました！　わかりましたから、離し——
あうっ！」

真耶の頭蓋骨から味噌が溢れ出る直前になって、ヘッドロック・デストロイの刑は終了した。
そんな二人の耳に……

「ああっ!？」

シャルルの悲鳴が届いた。

二人が目を向けるとシャルルと箒は、先ほどの喜ばしい表情と打って変わって青白い顔でモニターを見ていた。

「どっ、どうしたんですかああ!？」

「あっ、あれをつ！」

たまらず、真耶が大きな声を上げる。

そんな真耶に、箒が返事をしモニターを指差した。

千冬と真耶も、箒の指の先の光景に目を見張る。

瞬間、全員の表情が——千冬までもが——真っ青になる。

第三アリーナを静寂が包み込む。

観戦席の女子たちにとって、誰もが予想だにしなかった結果だった。

そんな女子たちは、全く同じことを考えていた。

『まさか、男の織斑一夏が、女であり代表候補生のセシリア・オルコットに勝つなんて』

それは、彼女たちの女尊男卑という常識を、完膚なきまでにぶち壊すのに十分すぎるものだった。

今の世界が彼女たちに与えた、歪とも言える常識を破壊したことは、ある意味良かったかもしれない。

そして、彼女たちから見て一夏は、この世のものとは思えないほどにカッコ良く移っていた。

その瞬間、静寂が切り裂かれる。

「「「「「きゃあああああああああ！！！！！！！」」」」」

黄色い、ほんとに真っ黄色の歓声が鳴り響く。

「すっごーいつ、織斑くん勝っちゃったーっ！」

「結婚してっっ！」

「織斑くん、はあはあ」

興奮する女子、求婚する女子、ついには行為にまで耽ってしまう女子まで出てきてしまう。

そんな中、敗北を喫したセシリアの名も無きルームメイトが、チラリと敗者に目を向ける。

瞬間、怒号が鳴り響く。

「きゃああああああっ！！！！！！」

その怒号は今までの歓声とは、全く違うものだった。
悲鳴だ。

まるで、殺人事件の現場に出くわしたような悲鳴なのだ。

そんな悲鳴を聞いた女子たちは、先程までの馬鹿騒ぎを収め、セシリアを凝視する。

第三アリーナは、悲鳴に支配された。

「……一体なんだ？」

勝利を手にした一夏は、あまり嬉しそうな表情はしていない。

と言うより、彼はセシリアの鼻を卑怯なやり方でへし折ったことにこそ、快感を感じている。

そんな彼は、ただただ喧しいだけの歓声を鬱陶しく思っていた。

しかし、それがいきなり、悲鳴に変わったのだ。

疑問に思っても仕方がないことである。

彼はISのセンサーを駆使し、悲鳴の原因を探ろうとする。

「……何してんだ、あの馬鹿」

セシリア・オルコットが奈落の底に旅立とうとしていた。

要は、空中にいたセシリアが落ちているのだ。

シールドエネルギーが底をつきISが解除され、さらに気絶した結果、空中に止まることができなくなったのだ。

このままでは、大地に激しいキスをして、天使に導かれることだろう。

そんなセシリアを見て、一夏は一言。

「……まあ、俺には関係ないし」

非情にも、即座に見捨てることを決意した。

「やつぱ、働きすぎるっていけないことだろ。

決闘も終わったことだし、これ以上働くことはない」

彼には、労働意欲というものが決定的に欠落しているのだ。

一応言っておくが、彼女を助けることは決して労働ではない。

彼女を助けることは、まともな人間として当然のことである……しかし、彼はまともな人間ではないのだ。

まさしく、クズである。

「さあ、帰ろうか」

一夏はさも当然かのように言う。

そんなとき、急にシャルルの声が脳内に直接響いた。

『一夏あつ！　まずいよお、オルコットさんが落ちちゃう！

助けにいかなきや……』

「なんで？」

『……だ、だつて、助けなきや死んじやうよ！？』

「だろうな、分かりきったことを言わんでいい」

いつも冷静で思慮深いシャルルが慌てている。

それほどの一大事なのだ。

そして、今、助けに行けるのは、一夏だけだ。

セシリアを助けるため、シャルルは一夏に説得を試みる。

まあ、これに近いやり取りは二人にとって日常茶飯事である。

そして……

「分かった、分かった。
やるから、落ち着け、な」

最終的に一夏が折れてやり取りは終了するのだ。

一夏はシャルルに弱い。

それを、同居生活で身に染みて実感した一夏は、シャルルにあまり抵抗しなくなったのだ。

因みに、プライベート・チャンネルとは、IS操縦者同士の通信手段である。

『頭の右後ろ側で通話をする』という感じだが、要はテレパシーである。

（いや、と言っても最後にはシャルルの言う通りになっちまうからな……

決闘に連れてこられたときもそうだった。

無駄な抵抗だな、……はあああああ）

『幸せが逃げる』ことはおろか、『不幸』を呼んでしまいそうな深いため息をついた。

そんなことをやっている今も、セシリアは空気を切り裂き墜落していつている。

「さて、たっぷり感謝しろよ、体で」

漸くやる気になった一夏は、セシリアを追いかけるため、急降下する。

さらに、ソードシルエットが輝きを放つ。

それと同時に、再びインパルスは蒼の色を取り戻していく。
輝きが収まると、インパルスはフォースシルエットに換装していた。
そうなれば、一気にスピードを増していき――

「「「きやあああああ！！！！」」」

第三アリーナに、安堵と歓声が巻き起こる。

あの世へまっ逆さまのセシリアは、衝撃を纏った一夏に抱き抱えられたのだ。

お姫様だつこで。

そんな姿は観戦席の女子たちには、まるでお姫様を助けに来た白馬の王子に見えたのだ。

女が白馬の王子に弱いのは、世界共通らしい。

そんなお姫様は、周りの歓声によって漸く目を覚ました。

「……………うう……………」

「よう、お目覚めのキスでもしてやろうか？」

「……………え？」

目を覚ましたお姫様は、周りの状況を確認する。

（わたくしは目の前の男に敗北して、気絶して……………
それで……………お姫様だつこ。

観戦している女子が全員、わたくしたちを見て……………）

沈黙

「いつ、いやあつ、離してえっ！」

突如、セシリアが怒りと恥ずかしさを込めた大声を出す。
そんな彼女を一夏は、王子さまの如き微笑みで見つめ言う。

「離していいのか？」

「ううっ……」

その微笑みは、一夏を嫌っている彼女ですら、撃墜してしまいそうである。

無論、別の意味で。

実際、彼女は離せとも離すなとも言わなくなった。
そんな彼女を一夏は、あたり前のように無視した。

「じゃ、離してやる」

手を離れた、遙か上空で。

念のためもう一度言おう、遙か上空で、だ。

そうなれば、さっきと同じように彼女の体は重力に引っ張られる。
即ち、再び墜落した。

「いやあああああつ！！！！！」

合掌

第十一話【卑怯こそ正義】（後書き）

皆様、あの世に旅立たれた、故セシリア・オルコットさんのご冥福をお祈りください。

嘘です、すいません。

m(_____)m

死んでないですからね。

というわけで、第十一話、投稿完了です。（^| ^）

さて、今回、随分と長つたらしい作戦を披露しましたが……
上手く説明できたかなあ……（´・`・;）

他のISの二次小説に出てくるガンダムは、大体は全身装甲ですが

……

うちのインパルスは、全身装甲ではありません。
あくまで、インパルスをIS化させたものです。
まあ、いずれ出てくるデスティニーは全身装甲の予定なのでご安心を。

…… もっと、早く言うべきでしたね。（^| ^；）

もう書くべきことがないので、私の近況報告を…… 皆さん、興味ないかもしれませんが……（^| ^；）

実は、とある事情で大好きなゲームを止めていたんです。

一月の始め辺りから……

大体、二、三ヶ月ゲーム封印してたわけですね。

この間、決して苦しかったわけではないんですが、数日前、何かがぶちギレましてね。

気づいたら、ユクモ村のハンターになっていました。

やっぱ、我慢は体に悪いですね。

だって、ゲームを止めてから白髪出ましたもん、まだ若いのに。OTL

久々のモンハンでした。

ああ、ナルガS装備が懐かしい。

久々に、狩りに出陣しました。

腕が落ちてるかもしれないんで、下位で感覚を取り戻しました。

けど、まあ、前作からやってたんで腕はさほど鈍っていませんでした。

何回も書いてるんですが、私の住まいは大阪なんで、近くにハンターの集まる場所があります。

ハンターの間では有名な——モン？フェです……ここで店の名前を出していいのかわかりませんが……

モン？フェにちょっとだけ行ったことがあるんです。

早く復帰したい、一刻も早く。

では、狩ってきます。

次は次話で会いましょう。

第十二話【代表候補生】

「いやあああああああつ！！！」

地球の裏側まで届かん、というほどの絶叫が響く。

一夏に落とされ、セシリアは再び重力に引つ張られている。

さしもの彼女でも、生身では手の打ちようがない。

そして、地面が眼前に迫りいよいよ彼女の頭の中で走馬灯が始まる
うとした瞬間であった。

「よう、投身自殺ってのはそんなに楽しいのかね？」

「たっ、楽しいはずがありませんわっ！ この人殺しっ！」

セシリアを地獄に突き落とした張本人、織斑一夏が彼女を再び抱
き抱えた。

無論、お姫様だっこで。

しかし、彼女は抱き方に文句を言うより、さっきの鬼畜の如き所業
に腹を立てていた。

「あんな高い所で手を離せば、落ちるぐらい分かったでしょうっ！」

「離せって言われたから」

「状況を考えなさいっ、状況をつ！！」

まったく悪びれる様子のない一夏に、セシリアは怒りを募らせる。
まあ、当然のことである。そんなやり取りをしながら、一夏はセシ
リアを地面に降ろした。

「ほれ、九死に一生を得たな。感謝しろよ」

「……………」

恐怖から解放され両足で地面に立った彼女は、ふと物思いにふける。

（織斑一夏……普通に戦っても楽に勝てたでしょうに……）

その通りであつた。

一夏はセシリアより強い。

そんな彼が、わざわざ卑怯な策を講じる必要はないのだ。

卑怯な策を使われて負けたのが悔しいのではない。

普通に勝てる戦いに正々堂々戦わなかった一夏に、憤りを感じたのである。

彼女は、そんな感情をぶつけずにいられなかった。

「あなたは、何で正々堂々に戦わなかったのですか！

普通にやっても勝てるでしょうに……」

「……はあ……何、言つてやがるよ、お前は」

「……な、なんですの？」

「お前みたいな“ゴミクス”相手に真面目にやってくれる、お人好しがどこにいるよ？」

「なっ——」

その一言はセシリアにとって、人生最大の怒りを誘った。

セシリアは、一夏をとるに足らぬ相手だと認識していた。

そんな一夏に祖国を侮辱された彼女にとって、この戦いは祖国のプライドを守る戦いだつたのだ。

そして、予想を遥かに越える彼の実力を思い知らされた。

その戦いを“ゴミクス”という言葉で全否定した。

どうあつても、許せるものではなかった。

しかし——

「よくもっ、そんなことをっ——」

「セシリア・オルコット」

時が止まる。

錆び付いた時計のように、秒針が動かない。

一夏の千冬を彷彿とさせる瞳に、セシリアは声を出すこともままならない。

「親切で言ってやる。」

お前はイギリスの何だ？」

「……わ……わたくしは……」

「イギリス代表となる可能性を秘めた候補生だ、そうだろう？
そんなお前は何をした？」

一夏が何を言おうとしているのか、セシリアには分からない。
それでも、彼の放つ絶対的な威圧感に気圧されているセシリアに、
反論の余地はなかった。

「差別だ差別。」

文化の後進的な国だの、イエローモンキーだの、男がクラス代表だと恥だの。

別に攻めてる訳じゃねえぞ、差別の内容なんぞ、蟻の死骸以上にどうでもいいからな」

「……なら……」

「しかし、お前は代表候補生だ。
もしも、代表になったお前が同じことを言えばどうなる、答える」

「——っ！」

彼女は理解した。

彼の言っていることが……

そして、彼女は喫驚に襲われた。

「イギリスの威信を背負った代表が、日本を極東の猿と侮辱した。そうなれば、日本側は憤りを覚えるだろうな。」

そして『イギリス代表が日本を侮辱した』と、マスコミがこぞって取り上げる。

……一発で日英の外交問題だ」

「……………あ」

「国の代表つてのはな、それだけの立場なんだよ。」

無論、候補生もそれを理解しなければならぬ。

だから、その立場を理解していないゴミクス相手に、真面目にやってやるわけがないだろうが」

まさしく、彼の言う通りであった。

一夏の言葉は暗に『お前に代表候補生の資格はない』と、言っているに等しかった。

「まあ、お前の将来も日英関係も興味ないがな。」

まあ、これから先、嫌いなもん同士顔合わせないで学園生活送りやいい」

「……………」

一夏は興味無さげに吐き捨てると、Aピットへ去っていった。
興味のないものを捨てるかのような彼の態度は、なぜかセシリアの
寂しさを募らせた。

「おかえり、一夏」
「ん、ただいまだ」

Aピットに戻ってきた俺は、四人だけの応援団に出迎えられた。
一番早く駆け寄ってきたのは、シャルルだ。

「はい、タオルとスポーツドリンク」
「ん」

シャルルの持ったそれを受け取った俺は、額の汗をタオルで軽く
拭った。

さらに、ドリンクを口に流し込み、喉を潤す。
さすがに、喉が乾いていたからな。

相変わらず、シャルルは空気を読む天才である。

しかし、持ってきたスポーツドリンクは冷たくもなく、暖かくもな
い温いドリンクだ。

俺が今欲しているのは、気分を爽快とさせるようなキンキンに冷え
たドリンクなのだが……

「一夏、疲れて熱を持った体に、冷たいドリンクは悪いからね。」

シャルルは、俺の体を気遣っているのだ。

そんな二人は、二番目に駆け寄ってきた箒から見れば、まるで夫婦のようだ。

（この二人の雰囲気……まさか、デュノアは本当に男色なのか……）

箒は段々とシャルルホモ疑惑を募らせる。

まあ、シャルルが女であることは俺以外知らないのだから仕方ない。箒の疑惑の目に気づいたシャルルは、複雑な表情を顔に浮かべながら実感した。

（そっか、今僕は男で通ってるんだった……）

学園内において、俺以外の誰もがシャルルを男だと思っている。

そんな中では、俺の前で女の子として振る舞えないのだ。

それこそ、二人きりでもなければ。

それにもどかしく思ったシャルルは、自分の世界に入り物思いにふけ始めた。

そんな時、聞き慣れた声が俺の耳に届く。

「よくも、まあ、あんな策を講じたものだ、馬鹿者」

千冬姉だ。

「おう、照れるな」

「誉めていない、この馬鹿者」

こんな風に、いつものやり取りをする俺たちの間に、これもいつも通りの幼い声を発する真耶が割って入った。

「ま、まあ、敗北はオルコットさんにとってもいい経験になりました

たし……」

彼女の言う通り、俺に敗北したしなめられたセシリアは、いい経験をしただろう。

今言ってやらなければ、将来に面倒事を起こしたはずだ。俺も随分と甘いことだ。

全く吐き気がする、甘さは人を腐らすというのに。

しかし、あいつとはこれっきりなんだ、最後だと思えば気が楽だな。

「……一夏、インパルスはどうだ、馴染むか？」

「ああ、悪くねえよ、千冬姉」

「……そうか」

千冬姉が俺のことを一夏と呼んだ。

それは今この瞬間、姉弟の空間が成された証である。

姉弟だからな、それぐらいのことは分かるが、一瞬千冬姉はどこかやるせない表情をしているようにも見えた。

この表情は、俺がISを初めて動かした時と同じだ。

それを訝しげに思ったが、聞いてもはぐらかすからなあ。

そんなことを思っていると、突如体が揺れた。

「かえろっ、一夏」

シャルルススマイル全開のシャルルが、腕を絡ませ引っ張ってきたのだ。

どうやら、自分の世界から戻ってきたようだ。

なんつつか、シャルルって案外強引だよな。

「ああ、拉致られる」

「じゃあなあ、三人共」

俺は引つ張られながら、残りの三人に手を振った。
「つか、足引きずってんだけど……」

「シャルルって強引だよなあ、いやあん」

「い、いやあんって……」

「シャルルのえっち」

「もう……」

と、言うわけで、俺たちは寮への帰路についた。

その道のりの最中、まるで彼氏に強引に迫られた女みたいな声を発する俺。

それにしても、さっきのシャルルはいつも以上に強引だった。
しかし、そんな疑義はすぐに晴れることになる。

「ねえ、一夏……シャルルって名前は、もう使わないで……」

「ん？」

「僕のことは、これからシャルロットって呼んでくれる？
二人きりの時だけでいいから」

シャルル——シャルロットの数少ない要望。

彼女にとって“シャルル”という名は、所詮偽りのものでしかない。
俺を騙すために、父親によって取って付けられた忌むべき名。
それに——

「二人きりでないと、女の子として振る舞えないからなあ、お前は」

「う、うん、だから……」

「さっきの簾の視線に耐えかねなかったわけだ」

「う……」

「それで、二人きりのときだけは精一杯女の子で居よう、というわけか」

「うううう……」

二人きりの時だけは、女の子として振る舞える。

だから“シャルル”ではなく“シャルロット”と呼んで欲しいのだ。女の子として当然の望みである。

しかし、俺からして見れば、弄り甲斐があることこの上ない。

「そうだな、分かったシャルロット。」

精一杯“女”として扱ってやるよ」

「うん……あれ、なにかニュアンスが違う……」

「ん、なにか違ったか？」

ベッドの上でシャルロットの名を、淫靡な感じで叫んでほしいんだろ」

「え……ええええっ……！」

ちっ、違うからねっ、“女の子”として扱って欲しいんであって、女として扱ってなんて誰も言っていない……」

「……だめえ？」

「うっ……いつ、一夏が望むなら別に……」

シャルロットは時々強引なくせして、俺が無理矢理求めるとすぐに狼狽する。

そして、だめと言わずに享受してしまう奴だ。

そんなシャルロットに、止めの一撃――

「無駄に淫行を期待すんなよお、15才」

「いつ、淫行っ!?!……」

俺は狼狽する彼女の額を、指で小突いた。

淫行ごときでここまでビックリしなくてもいいだろ。

そんなことを思っていると、シャルロットのため息混じりの言葉が発せられた。

「はあ、どうせそんなことだろうと思ったよ……」

「ふむ、そうか、責め方変えないとなあ。」

「どんなのが良い?」

「ど、どんなのって……」

こんな感じでシャルロットを虐めているうちに、いつのまにか寮の部屋に帰っていた。

俺は帰ってすぐにベッドへ深く座った。

全体重をかけられたベッドは、ズシリと軋む。

それとは対照的にシャルロットは軽く腰を掛けただけで、ベッドは軋みもせず体重を軽く受け止めた。

「それにしても、これでクラス代表に決まっちゃったね、一夏」

「はあああああ~~~~~~~~」

俺はマリアナ海溝の如く深い溜め息をかいだ。

しばらくの間、完全に忘れていた禁句である。

願うなら、俺の記憶だけじゃなくこの世からも消えてほしかった。

「……なんか、急にだるくなってきたやつた……」

取り敢えずシャワー浴びてくるわ」

俺はそうシャルロットに告げると、脱衣場に消えていった。

シャルロット一人になり、部屋が静寂に包まれた。

そんな部屋では、一夏の使うシャワーの音がよく聞こえる。

こうなると、人間というものは、ついさっきのことを思い出すように出来ているのだ。

「……一夏のいじわる、いつものことだけど」

シャルロットは、そつと一夏のベッドを指で滑らせるように触れる。

そんなシャルロットの顔は、心なしに赤みを帯びている。

「一夏が……この上で僕の名前を、叫ぶ……」

さっきのやり取りを思い出すと、彼女は妄想せずにはいられなかった。

一夏が彼女の名を、ベッドの上で叫ぶ光景を。

まあ、一夏がシャルロットを虐めた後には、よくある光景である。

しかし、シャルロットの思考が妄想の世界へ完全に水没する直前に、何かが足に当たる。

その感覚により、はつと我を取り戻すシャルロット。

（あああつ、もうっ、いつもこんな妄想ばかりっ！）

シャルロットは妄想を振り払うかのように、頭をブンブンと横に降る。

なんとか気を逸らそうと、自分の足に当たった物体を確認しようとする。

「……段ボールかな」

一夏のベッドの近くにあったことから、彼の荷物であることは容易に想像出来た。

彼女は後ろめたさを覚えながらも、段ボールのテープを解き中へ手を入れた。

手に掴んだのは、細長い麻縄。

「……荷造り用かな？」

彼女は、それにはあまり気を止めず再び段ボールの中を詮索した。出てきたのは、人の興奮を煽る赤色の蠟燭。

「……きつと、停電のときのためだね……まさか、ねえ……」

彼女は、それを気に止めながらも適当な理由をつけ考察を強制終了させる。

深く考えたら、麻縄と蠟燭の使う瞬間を妄想してしまいそうだからである。

彼女は段ボールの中身に、軽い恐怖を感じながらも好奇心を打ち消せなかった。

そして、手に握られたのは首輪である。

ただし、金属がふんだんに使われたそれは、特別な用途にしか使われそうになかった。

「……一夏は大型犬を買いいたいんだよ、きつとそうに違いない」

特別な用途に気づきながらも、彼女は無理矢理別の用途を首輪に与えた。

段ボールに向ける彼女の視線には、それでもかと言わんばかりの恐怖が込められている。

それでも、愛する彼への興味は尽きなかった。

最後に握られたのは――電動の芋虫。

最早、用途は一つしかなかった。

先程のように、妄想の世界に引きずり込まれそうになる自分を、必死に引き留めた。

そして彼女は、震える手になんとか命令を下し、電動の芋虫を段ボールに入れ直した。

そして、一言。

「見なかった、僕は何も見なかった」

まるで、呪いのように自分に言い聞かせた。

沈黙に沈むシャワールーム。

その沈黙を乱すように、お湯の噴き出る音が響く。

僅かに熱めのお湯は、彼女――セシリアの柔肌をつたい流れる。

白人にしては珍しく均等の取れた体と、そこから生まれる流線美は彼女のちょっとした自慢だ。

そんな彼女は、今日の衝撃的な出来事に思いを巡らせていた。

(……今日の試合)

彼女は織斑一夏に、敗北を喫した。

彼の人格、そして戦い方に激しい怒りを覚えた。
そんな自分を瞳一つで黙らせたあげく、言葉で一蹴した。
セシリアは代表候補生だ。

しかし、そんな彼女は優越感に感けるだけで、責任ある立場というものを理解しなかったのだ。

そういう歪んだ自分を、容易に打ち崩した彼。

（――織斑一夏）

彼を思う。

強さと何者の侵略も許さぬ威圧感。

そんな彼は、自分の父親とは対極の存在だ。

（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった……）

名家に婿入りした父。

無論、そんな事情――いや、性格から母は母に引け目を感じていた。
た。

そして、ISが世間に公表されてから父の態度はさらに弱くなっていた。

ついには、母すらも父を煙たがるようになり、彼の立場はますますどん底に落ちていった。

そんな情けない父を物心つく前から見続けたセシリアは、『将来はこんな情けない男とは結婚しない』と、固く決心したのだ。

それに対し、母は強かった。

女尊男卑社会が形成される前から、いくつもの会社を経営し成功を納めた。

そんな彼女はセシリアにとって、厳しくも憧れの人だった。
しかし、二人を論ずるには過去形を持ち要らねばならない。

もう、いないのだから。

いわゆる家庭内別居にも近かった両親が、なぜかその日にを共に過ごしていた。

三年前のそんな日に、大きな越境鉄道横転事故が発生したのだ。

彼女には分からない、この日に限って、なぜ二人が共にいたかを……それから、悲しむ暇もないほどに早く時が過ぎ去っていった。

残った名家と莫大な遺産。

それを狙う金の亡者から守るために、勉学に励み、ISに乗り、国家代表候補生にまでなった。

優秀な彼女は、第三世代ブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選ばれる。

稼働データと戦闘経験を得るため、日本の地に足を踏み入れた。

そして——出会った。

思い描く理想の強い男。

「織斑、一夏……」

彼の名を口に出す。

それだけで、体が熱い。

熱くて熱くてたまらない。

「……………」

Aピットに去る間際、彼の瞳には彼女など映っていなかった。

そんなの——いや

熱くて熱くて熱くて仕方ないのに……

ぶつける宛もなく漂う感情は、彼女をより一層熱くする。

シャワーの熱と、彼女の熱は、瞬く間にシャワールームを包んだ。

第十二話【代表候補生】

完

第十二話【代表候補生】（後書き）

……お、遅え……

完全に担当泣かせですよ、担当いないけど（＾―＾；）……緊張感を持ったため、三日という締め切りを決めてるんですが……ああ、自分で締め切りなんて決めるんじゃないかった……

取り敢えず、第十二話投稿です。

セシリアの件ですけどね……

代表候補生なら代表候補生らしく、立場をわきまえんと、と言うこととです。

もつと暑く語りたいたですが、こんなんで勘弁してください。

眠いんで……（´Д`）zzz

まあ、どうかの都知事も立場をわきまえて発言してもらいたいもんです。

さすがに、天罰という言葉はダメですよ。

誰とは言いませんが……

うちの一夏は、ドSです。

いろんなもの持ってます。

業者もKGBもビックリですよ。

次、次話をお楽しみ……

ああ、ちくしょう、眠くてねむ……

ばたっ〇（――）zzz

第十三話【激昂した鬼】

「というわけでっ！」

織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

クラッカーが機関銃の如く、連射される。

天井に当たらんとするほどの紙テープは、俺に絶望の二文字を再認識させた。

今から十分ほど前、シャワーを浴び夕食を済ませた俺とシャルロットは、部屋で適当に過ごしていた。

そんなところをクラスメイトに連れていかれ、食堂にて謎の宴が始まってしまった。

「……………」

俺は眼球だけを動かし、全体を見回す。

一組のメンバーが全員揃い、手に飲み物を持ち、きゃあきゃあと盛り上がり上がっている。

壁には俺を威圧するように『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と刻まれた厚紙がかけてある。

テーブルには、胸焼けがしそうなほどにお菓子が置かれている。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

人の沈んでいく心情を無視し、まるで嘲笑うかのような会話が聞

こえる。

「……人の不幸を祝うとは、邪悪な宴だ」

「い、一夏……」

俺の泣き言を隣で聞いていたシャルロットは、苦笑をもらす。

「ああ、こんなことになったのも、あの英国痴女のせい——」

「おめでとございます。」

一夏さん

全ての元凶にして諸悪の根元、セシリア・オルコットが目の前に現れた。

今度はなんだ、一体？

「貴方ほどの実力者がクラス代表なら、対抗戦も安泰ですわね」

「……………」

顔をほんのり赤らめながら、今までにない物柔らかな話し方で接してきた。

どうやら俺は、セシリアまで落としたらしい（恋愛的に）。

でなければ、あそこまでボロクソに言ったのに、こんなに人当たりがよくなるはずがない。

俺のモテスキル、節操無さすぎだろ。

「それでも、対抗戦で確実な勝利を得るため、このわたくしが毎日放課後に模擬戦の相手を——」

「ちょ、ちよつと待てっ、生憎だが模擬戦の相手なら私がやるべきだろう！

部外者は引っ込んでいてもらおう」

セシリアの言葉を遮るように、うるたえた様子の箒が口を挟んだ。怒気を含んだ瞳で、互いを睨む二人。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。

そんなあなたに、一夏さんの相手が勤まりまして？

わたくしはAですが」

「ラ、ランクは関係ない！

幼馴染みとして、模擬戦の相手は当然の役目だ！」

俺は凄惨な戦いを繰り広げる二人を、観戦しながらジュースの喉ごしを楽しんでいる。

そんな俺に、隣でコーラを口に流すシャルロットが声をかけた。

「ね、ねえ、一夏。

模擬戦なら僕が相手してもいいけど……」

いつも以上に遠慮がちだが、了解の返事を期待している様子だ。しかし、こいつらは何か勘違いしているなあ。

「その、絶賛舌戦中の二人。

お前らなんぞ、俺からしたらサンドバッグにしかなんねえだろ」

「「なっ——」」

二人は、俺の言葉を聞き逃さなかった。

そんな二人は、俺に「ごうごうたる非難を浴びせようとするが、突如として口ごもる。

二人がサンドバッグであることは文句なく事実であるため、反論の中身が中々に見つからないのだ。

しかし、何かに気づいた二人は漸く口を動かした。

「わ、私たちはともかく、デュノアはどうなんだ！」

「そ、そうですね。」

なぜ、わたくしたちだけが……」

「シャルルはまだ、学園でIS起動してねえだろ。

未知数なんだよ、実力が」

再び口ごもる二人。

唯一の攻撃材料を失った二人は、せめて非難を込めた視線を俺に向けてくる。

そんな二人に、止めの一撃を加える。

「第一、俺、模擬戦やるなんて言っただけさ」

……沈黙。

静まり返る三人。

今まで、繰り広げてきた女の戦いの意味を奪ってしまう一言だからである。

しかし、そんな沈黙は、瞬く間に打ち破られた。

「はいはい、新聞部です。」

話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました！」

一組一同、盛り上がる。

言葉を失った三人も、盛り上がる。

俺、盛り下がる。

と、同時にイライラを募らせる俺。

「あ、私は二年の黛薫子、よろしくね。

新聞部副部長をやってます。」

はいこれ名刺」

実に面倒臭い名前だ。

黛という名字の由来は、一体なんなのだろうか？

そんな女は、喋り終わると名刺を差し出してきた。

「ふうん、変な字」

「……………」

辛辣な言葉をかけられた黛は、あからさまに気を落とす。

そんな彼女を無視した俺は、名刺を握り潰し床に放り捨てた。黛は床に捨てられた名刺を見つめ、今度は気を悪くし始める。

しかし、新聞部とは言っても記者の端くれだ。

感情を表に出さず、インタビューを続ける。

「ではではずり織斑君！

クラス代表になった感想をどうぞ！」

「あー……じゃ、クラス代表代行制度を設けようと思う」

「……代表代行？」

黛が怪訝な表情を顔に浮かべる。

その表情は、全ての女子共通のものだった。

しかし、それはすぐに吹き飛ぶことになる。

「聞いて名の通り、クラス代表の業務を代行するということだ。今なら、俺のキス付きだ、早いもん勝ちな」

一瞬の沈黙、そして驚愕、さらに覇気。

騒いでいた女子全員——シャルロット、箒、セシリア以外——が、飲み物やポッキーなどのお菓子を放り投げた。

記者根性を見せていた黛までもが、ボイスレコーダーをかなぐり捨ててしまう。

そんな女子全員が、まさに捨て身の突進で俺を取り囲んだ。

「ええっ、嘘おっ!？」

キス?　ちゅーってしてくれるの!？」

「はいっはいっ、代表代行に就任しますっ!」

「あーっ、ずるいずるい、私も名乗り出るよー、織斑くん!」

彼女らの騒ぎは、もはや完全に収拾がつかなくなっていた。

隣の女子の頭を押さえつけようとする女子。

隣の女子に飲み物をぶっかける女子。

おおよそ理性を失いつつある女子たちに向かって、俺は暴言を重ねた。

「戦って最後に残った奴、代行な」

俺の言葉を聞くやいなや、彼女らの瞳が禍々しく輝いた。

そして、代行の座——具体的に言つと、一夏のキス——を巡る、取っ組み合いの争いが勃発する。

「ああああああああっ!!!」

「きすつきすつきすううう!」

「私がああああっ!!!」

先程まで普通のパーティーを楽しんでいた彼女らは、今や血を血で洗う戦いを繰り広げている。

まるで世紀末のような光景である。

それを見て、爆笑する俺。

「いや、あいつら相変わらず馬鹿だよなあ、フフッ」

女の激しすぎる戦いを見ながら爆笑する俺は、端から見れば凄まじく奇妙に映ることだろう。

まあ、仕方ない、面白いもんは面白い。

そんな俺に、冷やかかかつ怒りのこもった視線が向けられた。

「一夏……これってどういうことかな？」

「場合によつては、許しませんわよ」

「……斬る！」

シャルロット、セシリア、箒だ。

弱った鹿を狙う百獣の王のような雰囲気醸し出す彼女らは、ホントに今すぐ襲いかかつてきそうである。

どうやら、キスという単語を聞き敏感に反応したようだ。

そんなわけで、俺は三人の怒りで燃え上がる炎の火消しに駆り出された。

「あー、別にいいだろう。」

キスぐらい、安いもんだ」

「……そう」

「安いものですね」

「……斬る！！」

「あれ、水のもりが油注いじゃった？」

……あれだ、代行なんて千冬姉が認めるはずがないだろうが」

俺の説得が功を奏したのか、段々と穏やかな表情に戻っていく三人。

代行がなかった事になる〃キスもなかった事になる、と考えたのだろつ。

うるさい三人も平静を取り戻し、漸く落ち着いた。

「よ、よかったあ……まあ、いつものことだけどね……」

「こっ、今度同じことしてみれば、たたっ斬るからなあ!」

「そうですわ、女の純情をなんだと思っっているのかしら……」

ひと安心した三人は、一斉に愚痴を漏らす。

「……ん?」

急に怪訝な表情になる箒とセシリア。

二人は懐疑心たつぷりの視線を、シャルロットに向けて放った。

「どうして、デュノアさんがキスに反応しますの?」

「デュノア……お前やはりホモ……」

「ええっ、ちよつと!?!」

シャルロットが女であることを知らない二人は、不思議そうに顔をしかめる。

それに比例するように、冷や汗が滝よろしく流れてくる。

男装がゆえの悩みである。

「いつ、いや、おっ、男として許せないかなあゝ、なんて……」

「……そうか」

「……そうですの」

「……あははは」

いまだに腑に落ちない二人を見たシャルロットは、ぎこちない苦笑いを浮かべる。

「……ふう」

そんなやり取りには目もくれず、浅い溜め息をつく俺はどこからともなく、ボトルを取り出した。

それには、日本人では理解できないであろう英語が大量に記載されていた。

それを三人は眼球が飛び出そうなほど、仰天した様子で目を見張る。

「……お、お酒なの？」

「な、なんだ、どこから出した？……」

「一夏さんは未成年のはずですわよね？……」

口々に驚きの言葉を漏らす三人。

筈はともかく、シャルロットにセシリアは英語の指し示す意味を理解できたが、未成年である以上はお酒以外のことは理解できなかったようだ。

俺はグラスに食堂の氷を入れ、ボトルの中身を注ぎ入れた。

グラスに緑色の液体が満ちる。

禍々しくも人を誘う色と香りに、三人は興味を抱かざるを得なかった。

そんな三人に、俺は親切にも御教授してやることにした。

「アブサンだ、アブサン、ヨーロッパの奴。」

アルコール度数85%だ」

「……はっ、85!?!」

三人の驚愕の声が響く。

だが、それも無理はない。

未成年がアルコール度数85%などというキツイ洋酒、アブサンを飲むというのだから。

驚きの色を隠せない三人を尻目に、俺はアブサンを口に運んだ。

「い……一気……」

グラス一杯に満ち溢れたアブサンを、一気に喉へ流した。そんな俺を見たシャルロットが、たまらず独語を漏らした。それに対し、俺も一言漏らしてやった。

「ふん、飲まねえとやってらんねえからな」

俺は女子たちの凄惨な戦いを肴に、アブサンを楽しんだ。ああ、最高の酒と最高の肴だ。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

月が燦々と輝く夜。

IS学園正面ゲートに、小柄な人影が現れた。

月明かりに照らされた人影は、少女であることがわかる。

黒く鮮やかな髪は、左右それぞれを金色の留め金により高い位置で結んでいる。

いわゆる、ツインテールである。

そんな少女は、まだ美しいよりも可愛いという言葉が似合うであろう。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから一切れの紙を取り出す。
くしゃくしゃになったそれは、少女の活発さかつ大雑把な性格を如実に表していた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

紙に口も声帯もない、したがって返事はしない。

性格に短期という二文字を追加すべきだろう。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

彼女はイライラを隠そうともせず、文句を垂れる。

それでもやけにはならず足を動かすところを見ると、よく言えば『実践主義』悪く言えば『よく考えない』ということのようだ。

（つたく、出迎えがないとは聞いてたけど、ちよつと不親切過ぎるんじゃないのあ？

政府の連中にしたって、異国に十五才のいたいけな少女を放り込むとか、なんか思うところないわけ？）

イライラを発散する対象を発掘し、これでもかと言わんばかりの悪態をつく。

そんな彼女は日本人に似ているが、似ているというだけだ。

鋭角的でありながらも、艶やかさと強さを兼ね備える雰囲気は、中国人のそれである。

しかし『人に歴史有り』という言葉にもあるように、彼女にとって日本はもう一つの故郷であり、思い人の住まう地でもある。

（誰かいないかな。

生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

学園をほつつき歩く彼女は、周囲を見回し役に立ってくれそうな人影を探す。

しかし、今は十時近い。

目の届く校舎全ては、すでに明かりが落ちており、生徒は寮にいる時間である。

（あーもー、面倒臭いな、……空飛んで探そうかな）

周りに人がいない状況では、一人であれこれ考えるものである。そんな中、自分の『空飛んで探そうかな』という一言に、“名案”だと思つた彼女。

しかし、それは“迷案”の間違いであつた。

まだ、正式な転入手続きを行っていない彼女が、学園内でISを起動させたら、事である。

最悪、外交問題にまで発展する。

電話帳三冊文にも匹敵する学園内重要規約書と、『問題だけは起こさないでくれ』と懇願していた共産党幹部の情けない表情を思い出したのだ。

（ふっふーん。

まあね、待たしは重要人物だもんねー。

自重しないとねー）

いつもの彼女なら、絶対に浮かぶことのないであろう“自重”という言葉が頭に浮かんだ。

瞬間、彼女の頭の中で愛しの男が皮肉の込められた言葉で喋った。

『お前から“自重”なんつう言葉が聞けるとはな。

数日中に中国で民主革命でも起こるんだろっか？』

「うるさいっ!!」

彼女の頭の中での言葉が、つい声に出てしまった。そして、頭の中に出現した彼を必死に振り払った。そんなことをしながらも、彼を思う。

(――元氣かな、あいつ)

瞬間であつた。

「ふう、案外楽しかったなあ。」

彼女の心が揺れた。

次は、頭の中の声ではなかった。紛れもなく、間違いなく、聞き間違えるはずのない、愛しの彼の声。

視線を声のしたほうに向けると、そこは生徒らが寝食を共にしている寮だ。

近づいてみると、窓が空いている。

(そっか、ここから声が漏れたんだ)

納得した様子の彼女。

すると、窓から寮の中を覗き、彼の姿を目に納めようとする。しかし、窓から見渡せる範囲に彼はいない。

声は聞こえるのに、姿が見えないことにもどかしく思う彼女。そんな彼女に、追い討ちが加えられた。

「アブサンあんなに飲んじゃダメだよお、一夏」

「大丈夫だ、酔っちゃいないだろう、シャルロット」

(……女の声?)

彼と仲良さげに会話する、女子らしき声。

彼女の心情は、もどかしさからイライラに変わっていく。

そんな彼女の耳に、イライラをさらに助長させる会話が届く。

「元々、飲むことも行けないことだからね。

分かってる、一夏?」

「俺は酒に限らず、行けないことは全部好きだな。

お前はどうか?」

「ええっ、いや、……好きって言うか、嫌いって言うか……あ、部屋着いたよ」

彼女の心情は、またもや変貌を遂げる。

イライラから殺意へと……

それからすぐ、受付は見つけることができた。

そして、手早く手続きを済ませた。

「ええと、それじゃあ手続きは以上です。

IS学園へようこそ。

凰鈴音さん」

十人中十人が愛想が良い、と答えるであろう事務員が言葉をかけた。

しかし、今の彼女にそんなものは届いていない。

まさしく、右耳から脳を通らず左耳へ抜けていつている。

少女——鈴音は、明らかに怒気を溜め込んだ言葉遣いで聞いた。

「織斑一夏って、何組ですかっ？」

「あ、噂の子？ 一組よ。」

鳳さんは二組だから、お隣ね。

そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。
やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわねえ」

時代、国、人種、年齢問わず女は噂好きである。

それを証明する事務員など、気にも止めず質問を続ける。

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ ええと……聞いてどうするの？」

怒気が含まれた質問に、戸惑った事務員が聞き返した。

そんな事務員に、満面の笑みを浮かべ、どこか愛らしさを含む言葉で言う鈴音。

「お願いをしようかと思ってえ。」

代表をさあ、あたしに譲ってってえ」

数日後、事務員が証言した。

あの時、鳳鈴音の後方に激昂した鬼がいたとかいなかったとか……

第十二話【激昂した鬼】

完

第十三話【激昂した鬼】（後書き）

未成年の飲酒、喫煙は法律で禁止されております。

この作品はフィクションです。

実在の人物、団体、事件などにはいっさい関係ありません。

飲酒、喫煙は自己責任でお願いします。

私は責任を追いません。

予め御了承ください。

第十三話、更新です。

（^ー^）

と、いうわけで、鈴登場です。

イエーイ、パフパフ（^ー^）v

実は、シャルの次に好きなキャラなんですネ、鈴は。

競馬で言えばですね。

えーと

『先頭シャル、一億馬身差の遅れで鈴、百馬身差の遅れでその他三人』と、いう感じです。

なんで競馬かというと、今たまたま競馬の番組やっているからですネ。

めっちゃ適当な理由です。（^ー^；）

さて、一夏とシャルの会話を聞いてしまった鈴ですが……

シャルって声だけ聞けば女なんです、実際女ですし。

鈴には男装した姿が見えてないわけですから、一夏と女子の甘い会話に聞こえるわけですね。

では、次話でお会いしましょう。（^ー^）ノシ
さて、大事なことで、もう一度言います。
未成年の飲酒、喫煙は法律で禁止されています。

第十四話【中国からの来訪者】

「……い……朝……だよ」

「……ん」

旭日が昇り、暗闇が照らされた朝。

聞きなれた声に、夢の世界にいた俺の意識が反応をきたす。

しかし、まだ夢の世界の住人でありたい俺は、彼女の言葉を拒む。

「……10時まで……寝かせろ……馬鹿野郎」

「もう、学校始まるよ。」

今、八時なんだよ」

「……学校が……何？」

「……はあ」

まだ二割程しか覚醒していない俺の耳に、溜め息が届く。

俺は溜め息を尻目に、朝のひんやりした寒さから、体を守るように布団にくるまっている。

そんな布団の鎧が、急に消失してしまった。

「ううううう、さつぶ」

鎧と化していた布団が、ひっぺ剥がされたのだ。

急激に俺を襲った寒さに、たまらず低く唸る。

その寒さに、望む望まない関わらず、意識が覚めていった。

「ううつ、お、お酒臭い……」

俺がベッドから起き上がった瞬間、異様な臭いが部屋に充満した。

昨日、浴びるようにかつ食らったアブサンの臭いだ。

俺が発するその臭いに顔をしかめるたのは、寒さという暴力を放った同居人——シャルロット・デュノアである。

ぐうたらする俺の隣で、そのシャルロットが布団を肩に担いでいる。その光景は端から見れば、俺たちは親子か夫婦に見えることだろう。

「まあ、気にすんな。

んなことより、お前は俺の嫁さんか」

「おっ、お嫁さん！？

……お嫁さんかあ」

いつもの如く、深い妄想に沈んでいく彼女。

この隙を狙って二度寝しようかと思っただが、一度完全覚醒してしまったため、その気にはなれなかった。

（まあ、いいか。

アブサンのおかげでぐっすり寝れたし）

「やー、おりむー」

一組の教室に到着した俺とシャルロットは、それぞれ自分の机に鞆を置き席についていた。

そんな時、のんきでスローペースな声が耳に届く。

なんだか、のほほんとした子が俺に手を振っている。

だぼだぼで完全にサイズがあっていない制服に、身を包んだ彼女。

その袖が腕よりもずっと長く、相当不便に見える。

と考えていると、彼女が小走りで駆け寄ってくる。

そして、その勢いのまま身長差二十？以上ある俺の体に密着した。

(……誰だったか……まあ、“のほほん”でいいか)

確か入学日に自己紹介していたはずだが、俺は彼女の名を覚える必要性を感じなかった。

そんなわけで、意図的に忘れたのだ。

「もう何を言っても、愛称決定か？ のほほん」

「その通りなのだよー」

おりむーとのほほん、いいいいいよー」

「そうか」

俺の掌が開かれていく。

それは、のほほんには気のせいかな、ブラックホールにも見えた。

そして、のほほんの頭部を奈落へ吸い込むようにわしづかみ、渾身の力が加えられる。

織斑家秘伝奥義“ヘッドロック・デストロイ”である。

「いたいたいたいよぉー」

「そうか、痛いか良かったなあ」

依然として、のほほんとした悲鳴を出す彼女に対し『本当に痛いのか』という疑問が頭の中に生まれる。

しかし、そんな疑問はすぐに頭から排出し、いいかげん手を離してやった。

それと同時に、俺の制服をギュッと掴んでいた手を離すと、激痛に晒された自分の頭をいたわるように撫でる。

「うっうっうっ」

「この辺で許してやる。
良かったな、感謝しろ」

俺が誰かを愛称で呼ぶのはいいが、他人が俺を愛称で呼ぶのは気に入らないのだ。
のほほんは情けない呻き声を上げていると、ハッと思い出したように俺に問う。

「そう言えばあー、転校生の噂聞いたー？ 二組だよあー」
「ふうん、知らん」

興味無さげに一蹴した。
俺が今やるべきことは、クラス代表の激務をどう緩和させるかであつて、違うクラスに転校してくる生徒の詮索ではない。

しかし、今はまだ、桜舞い散る四月。
そんな中途半端な時期に入学ではなく、条件が類を見ないほどに厳しいIS学園の転入である。
最も厄介極まりないのが、国の推薦なしでは試験すら受けられないことだ。

そいつがどんな奴か、と俺はほんの一瞬、関心を寄せた。

「中国の代表候補生らしいよあー、おりむうー」
「あ、そ」

抱いた関心は本当に本当に、たった一瞬であつた。
国の推薦を受けた転校生、それはすなわち代表候補生というだ。
ほんの一瞬、頭を回せばすぐ分かることである。

『どこの国の代表候補生だろうか』と抱いた関心であつたが、国が判明したことでスッキリした俺の関心はたちまち離散した。

しかし……

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

セシリアは興味津々のようだ。

セシリアは、腰に手を当てたるナルシストを彷彿とさせるポーズを決める。

本人はカッコいいつもりなのだろうが、端から見れば滑稽の至りである。

「興味津々のようだな、セシリア」

「んんっ、別に興味津々というわけでは……」

咳払いをすることで、己の中に芽生えた興味を必死に掻き消そうとするセシリア。

俺の放った一言は、的を得ていたらしい。

そんなセシリアを押し退けるように、新たな人影が近づいた。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう。
騒ぐほどのことでもあるまい」

窓側の最前列に位置する自分の席にいたはずの、筈だ。

関心のない素振りを見せつけるが、話しに割って入った時点で意味がない。

「じゃあ、なんで話しに割って入ってきた？ 興味ないんじゃないのか。」

それとも、俺と会話したかったのか、ん？」

「い、いやっ、何をバカなことを……興味があって悪いかな？」

狼狽する箒。

今の俺の言葉もまた、セシリアの時と同様に的を得た嫌みだったのだ。

「一夏あ、また篠ノ之さんで遊んでるの？」

箒虐めに精を出していた俺の耳に、シャルロットの溜め息混じりの声調が聞こえてきた。

いつの間にか、俺の席に四人の女子が集まってきた。

しかし、決して物珍しい状況ではなく日常茶飯事の光景である。

今回は、俺目当てと同時に噂に釣られてきた、ということだろう。

「そんな一夏はどうなの？」

「気にならないの？」

「全く、全然、これっぽっちも。

アメーバの糞の方がずっと興味あるな」

「……そ、そう」

シャルロットの問い掛けに、真摯かつ素直に答えた俺。

それに対しシャルロットは、苦笑いを浮かべざるを得なかった。

すると、俺の台詞に多少なりとも感心した様子で箒とセシリアが台詞を並べた。

「そのとおりだ。

来月にはクラス対抗戦があるのだ、他の事に首を突っ込む暇はない」

「そう！ そうですね、一夏さん。

クラス対抗戦に向けて、やはりこのわたくしと模擬戦を執り行いましょう。

なにせ、一夏さんとわたくしは“専用機”を持っているのですから」

セシリアは“専用機”という単語を、激しく強調している。

確かに、他のクラスメイトが訓練機を使う際、申請と許可、丸一日消費してしまう整備が必要ではある。

しかし、俺には強調された“専用機”という単語の意図ぐらい、手に取るように分かっていた。

「セシリア、お前、俺と二人きりになるのが目的だろう」

「いつ、一夏さんっ！」

反駁する余地もないであろう俺の一言に、セシリアは動揺を隠しきれないでいる。

そんな二人に、シャルロットは口を挟んできた。

「いつ、一夏っ、僕も専用機持つてるんだよっ！」

模擬戦なら僕が……おっ、男同士だし落ち着いてやれるんじゃない？」

……昨日と全く持つて等しい、やり取りである。

彼女たちにとって模擬戦とは『放課後二人きりの甘い一時』という意味なのだ。

昨日、俺に一蹴されたことを失念したかのように迫る二人。

そんな二人に筭が、制するような声を響かせる。

「とっ、とにかく、男たるものクラス対抗戦に勝たずしてどうする！？」

一人だけ専用機を所有していない筭は、どこか疎外感を感じていたらしい。

このままでは、三人に置いていかれてしまう、と。

因みに、クラス代表戦とはクラスの実力指標を作るために執り行わ

れる、トーナメント戦のことだ。

クラス代表が出場する行事であり、俺が代表に就任しなかった最大の理由がそれである。

話が逸れてしまったが、そんな筈とは裏腹に、“のほほん”は“のほほん”とした態度を決して崩さず、喋りだした。その時だ。

「今あー、専用機を持っているクラス代表は一組と四組だけだから、余――」

「――その情報、古いよ」

廊下と教室を繋ぐ入り口、そこから唐突に軽く威張るような声が聞こえた。

聞き覚え――いや、懐かしさを身に染みて感じさせる声だ。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

俺たち五人はおるか、クラス中の注目を一斉に浴びる小柄な少女。腕を組み片膝を立てながらドアにもたれかかり、完全に入り口を塞いでいる。

迷惑千万である。

そんなことをして、自分をカッコよく見せようと気取っていた彼女は――

「――鈴、どこからツッコミいれていいのかわからんが……通行人の邪魔だぞ」

「んなつ……!？」

なんてこと言うのよ、アンタは!」

気取った自分に思いもよらぬツッコミをいれられた彼女は、狼狽の末俺を怒りの捌け口に選んだ。

しかし、鈴はおだてさえすればすぐに平静に復する奴である。そのため、宥め始めた俺。

そうしなければ、引き下がりはない奴でもあるからだ。

「カッコよく自己紹介したかったんだろ。

黙って聞いてやるから」

「ううっ……こほんっ」

小さく、それでもなお俺たちに聞こえるように咳払いした。

そして、気取った雰囲気を取り戻した彼女は、今一度自己紹介を再開する。

「凰鈴音、中国の代表候補生よ。

今日は宣戦布告に来たってわ——」

「おい」

「なによっ!？」

突如、憤りを込められた声色の台詞が響く。

その声が自己紹介を遮ったことで、鈴の顔色が赤に染まっていき思わず怒鳴る。

そんな彼女の怒りも余儀なきことだ。

なにせ、二回連続で自己紹介に邪魔が入り台無しになったのだから。しかし——

——パンツッ!

教室中に人を殴打したような、乾いた打撃音が轟いた。
予想外すぎる衝撃に鈴の感情は憤怒に駆られ、鬼の形相で自分に狼藉を働いた人物に振り向く。
そこには、鬼神が降臨していた。

「もうSHRの時間だ。
教室に戻れ」

「……ち、千冬さん」

「織斑先生と呼べ。」

さっさと戻れ。

そして入り口を塞ぐな、邪魔だ」

「す、すみません……」

おどおど恐れおののきながら、鈴はドアから退いていく。
今までの気取った雰囲気も、本来持ち合わせている強気な態度も、
鈴の天敵である千冬姉の前では立ち消えてしまう。

（まあ、もしかしたら、口煩い小姑になるかもしれないわけだから
な）

鈴にとって千冬姉は将来の小姑であり、ある意味ラスボスなのだ。
千冬姉に畏怖しながらも、『一夏さんを下さい』などと、許しを請
わなければならないのだから。

しかし、あくまで、可能性の一つでしかないと断っておこう。
そんな風に、考え事を深める俺の頭に甲高い声が鳴り渡る。

「また後で来るからね！

逃げないでよ、一夏！」

「面倒ごとなら逃げるからな、迷わず即決で」

鈴はロケット団さながらの決め台詞を放ち、二組の教室へ駆けていった。

そんな彼女の後ろ姿を眺めながら、俺は小さな疑問にの解決に勤しむ。

「あの馬鹿、IS乗れんのかね？ 見たことないがな」

疑問を声に漏らした瞬間、擬餌に食いつく鯉よろしくクラスの面々が声を荒らげた。

「一夏あ。」

僕、説明してほしいんだけどなあ……」

「一夏、今のは誰だ？

知り合いか、偉く親しそうだったな？」

「い、一夏さん？

あの方とは、どういう関係で？」

「わあゝ、おりむーに恋人発覚だあー」

「『織斑くんにごつ、ごっこ、恋人おお！？』」

(……う、うるさい……)

口々にかつて極まることを言う彼女たちに、だるさとイライラを募らせる俺。

しかし、そんな状況にも関わらず感情を表に出すことはなかった。騒ぎがじきに収集されることが、俺には分かっていたからだ。

パアン、パアン、パアン、パアン、パアン、パアン！

耳に残る嫌な打撃音が、轟き渡る。

その正体は、千冬姉の出席簿落としてである。

「席につけ、馬鹿者ども」

鉄拳制裁を受けたのは、SHR中にも関わらず騒いでいた女子どもだ。

激痛を加えられた頭を涙目で撫でる彼女たちを、俺は心の底から嘲笑っている。

彼女たちはそんな俺に気づく様子もなく、散り散りになり自分の席に着いた。

こうして、教室は漸く静けさを取り戻し、ペンを走らせる音だけが沈黙を制した。

——限目終了後、休憩時間。

「おりむー、恋人とどこまでいったの」

激し過ぎる勘違いをする、のほほん。

「どこにも行ってねえよ、馬鹿」

至極、冷静に彼女を突っぱねる俺。

——限目終了後、休憩時間。

「ええいつ、白状しろっ！」

「このうつけ者！」

怒りたつぷりに怒鳴り散らす、筈。

「お前が知るようなことでもないだろうが」

冷血に一蹴する俺。

——三限目終了後、休憩時間。

「一夏さんっ！、いい加減にしてくださいませんか怒りますわよ！」

燃え上がる炎に原油を注ぐように、怒りを増して行く、セシリア。

「いや、もう、怒ってんだろうが」

タカトシのトシも驚嘆する程の、的確なツツコミを繰り出す俺。

「一夏あ……いい加減教えてよお……」

電柱の下に捨てられた犬を彷彿とさせる表情をしながら、懇願するシャルロット。

今まで、クラスメイトの脅迫に近い問い質し方を斬って捨ててきたが、今回は状況が違う。

（駄目だ、俺やっぱ、こいつに弱い……）

いつものことであるが、俺は彼女の頼みを断れた試しがない。いつもは、遠慮して頼み事をすることのないシャルロットだが、女がらみとなれば話は別だ。

いつも、遠慮がちに頼まれ、遠慮がちにせがまれ、遠慮がちに懇願され、遠慮がちに涙目になる。

そして、不本意ながらも俺は首を縦に振られる。

（別に、言ってもいいんだがなあ……やっぱ、こういうのは引つ張った方が面白いだろ）

俺と鈴の関係を問い質すも、中々吐かない俺にクラスの女子全員がやきもきしていた。

その表情は、実に爆笑ものであった。

俺はこれを拝むために、黙りを決め込んでいたのだ。

そして、さらに女子どもを狼狽させたくて仕方ない、という欲求が段々と強まっていった。

（しかし、シャルロットには抵抗できないだろうな……はあ）

心の中で軽く溜め息を吐く。

そして——遂に観念した。

「あー、分かったから分かったから。

飯食いながらでいいよな」

「うんっ、ありがとう、一夏」

舞い降りた天使もビックリの“シャルロットスマイル”が繰り出された。

やっと説得が功を奏し、俺と鈴の間柄が判明することになった。

それでも、クラスの女子——特に篤とセシリア——が溜め込んだや

きもきはすでに、怒りの二文字に昇格していた。
二人の怒りという名の棘が含まれた声が発せられた。

「……きちんと話すなら、まあ、良いだろう」

「……行つて差し上げないこともなくつてよ」

食堂に赴くため、教室を後にする俺たち四人。

その後ろを追いかけるように、クラスの女子が数名が付いてくる。
その様子はまるで、大名行列さながらだったとか……

第十四話【中国からの来訪者】

完

第十四話【中国からの来訪者】（後書き）

今、3時50分です……しんどい……頭回らない……寝ます。
（
q_i
）
z
z
z

第十五話【もう一人の幼馴染み】

「あつ、あれ、何い？」

「織斑くんじゃない？」

大名行列みたい……」

廊下で女子の視線の的になった大名行列は、その女子たちを取り込み規模を拡大しながら、歩を進めていった。

その様子は、まさしく江戸時代の参勤交代そのもの。

それを眺めていた女子の中には、思わずひれ伏してしまう者もいた程だ。

横切ろうとする者も居らず、当然ながら横切るのを許されている飛脚も産婆もいない。

そんな感じで、一夏たちは食堂に到着した。

到着するや否や、昼食を求め券売機へ向かった。

筈は出汁の香りが食欲をそそるきつねうどん、セシリアはイギリス人らしい洋食ランチを選択していた。

（まあ、麻婆豆腐でいいか……：そっぴや鈴、去年、変な約束をして本国に帰りやがったな）

一夏は好物である麻婆豆腐を何気なく選びながら、ちょっとした物思いに耽っている。

「待ってたわよ、一夏！」

突如、一夏の頭の中にいた鈴が瞳の中にも出現してきた。

一夏たちが食券を食堂の婆あさんに渡すのを妨げるかのように、鈴

が立ち塞がっているのだ。

そんな鈴に、冷たい視線を向けながら一言。

「邪魔邪魔、食券出せねえだろが。」

人の前に立ち塞がるのが、お前の趣味か？」

「そつ、そんなわけないじゃないっ！」

尖った声で一夏に反駁する鈴は、お盆の上に乗ったラーメンを携えていた。

鈴と中国繋がりということで良く似合うそれは、まだ湯気が立っており食欲を沸き立たせる。

そんなラーメンを見て、もう一言。

「伸びるぞ」

「わ、分かってるわよ！

大体、あんたを待ってたんでしょうが！

何で早く来ないのよ！」

「一緒に飯食いたかったら、直接教室来たらどうだ？
まどろっこしい」

痴話喧嘩にも見える口論に周りの視線が引き気味だが、彼女も一夏も気にする様子はない。

一夏は食券を食堂の婆あさんに手渡し、再び鈴に向き直る。

「しかし、久しいな。

一年ぶりか、あまりに煩すぎて中国から追い出されたか？」

「んな分けないわよっ！」

久々の会話を満喫していると、注文した麻婆豆腐が完成。
止められない辛さが堪らないそれを受けとると、辺りを見回し空い

ているテーブルの有無を確かめる。

「おお、全員座れるところあるな、時間かかるかと思ったが……」

結果は意外であつた。

二十人以上の大名行列全員が余裕をもつて、腰を落ち着かせることの出来るテーブルを瞬時に見つけることができたのである。

昼休みという混雑する時間にも関わらずだ。

しかも、二十人以上を受け入れられるテーブルが存在したことも、思いがけないことであつた。

さすがはIS学園、学園の規模に比例して食堂も大規模である。そんなことを、頭に浮かべながら席についた。

「しかし、お前が代表候補生か、なんかあれだな。

いよいよ、中国も血迷ったか」

「一夏つ、どういう意味よっ！ それはあつ！」

「ただの憐れみだ」

「……はあ、相変わらずね、あんたは……それ麻婆豆腐？」

一夏が蓮華ですくつて口に運ぶ麻婆豆腐を指して疑問を問いかける。

しかし、麻婆豆腐であることは見れば分かるはずだ。

しかも、彼女は本場の人間、彼は首を傾げながら問いかけに答えた。

「そうだが？」

「そ、そう……」

急に視線を逸らし、夕日のように顔がほのかに赤く染まる鈴。それでも、一夏と麻婆豆腐に意識が持っていかれているようだ。

（ああ、あの約束か……）

鈴の顔が赤らんだ理由も、分かりきった疑問を問いかけた理由も理解した一夏は心の中で納得する。

スツキリした一夏は、日本人が愛して止まない白米に、極めて相性の合う麻婆豆腐をかけた、麻婆豆腐丼を豪快に掻き込んだ。

そんな一夏を見て、今まで口をつぐんでいた三人が漸く声を発した。

「ねえ、一夏っ、その人って誰なの？ 教えてくれるって言ったよねえ」

「そうだぞ、とつと吐け、吐かんか、一夏っ！」

「一夏さん、ま、まさか本当にこちらの方と付き合ってたっしやるの！？」

居た堪れなくなるほどの疎外感に耐えかねたシャルロットと箒、セシリアの棘が込められた声調が響く。

僅かではあるが、それでも明らかに、二人の関係に対し危機感を募らせていた三人であった。

その三人に釣られるように、大名行列を構成していたその他大勢の女子も関心を寄せる。

そして——鈴が口を開く。

「べ、別にあたしたちは付き合ってるわけじゃ……」

顔がリンゴと見間違えそうなほどに真っ赤に色付けられていきながら、鈴は疑惑を否定する。

その反応に、三人＋その他女子がほっと胸を撫で下ろす。

彼女の口振りからして、一夏に好意を寄せているのは間違いないが恋愛関係には未だ至っていない、と結論付けたのだ。

しかし、こんな美味しいイベントを見逃すほど、一夏は甘くなかつ

た。

「え、そうなのか……」

俺とは遊びだったのか鈴、くっ」

「「「「「えええええええっ！！？」「「「「」

麻婆豆腐丼を頬張りながら一夏が発した恋人関係であることを匂わせる暴言は、女子たちにとってまさしく驚天動地のものだったのだ。

暴言をその耳で捉えてしまったクラスメイトの女子たちは、精神を粉々に粉碎され床に頭を打ち付け卒倒してしまう。口から泡を吹いているところを見ると、これは洒落にならないであろう。

さらに、最大の衝撃を与えられた鈴はというと――

「いや、えっ、ちよっ、はあっ、そう、あれ!？」

否定しているのか肯定しているのか、全くもって理解しがたい状態に陥っていた。

完全に状況が彼女の脳味噌の処理速度を超越してしまっている。

こうなると、他の女子たちと共に失神した方が幸せだったかもしれない。

言っておくが、鈴は一夏と付き合ったことなどない、念のため。

鈴からしてみれば、悔しくもどかしいことだろうが……

そんな異常極まる光景を、一夏は心の底から楽しんでた。

これも念のため言っておくが、この状況を作り出した張本人である彼に楽しむ権利はない。

そして相も変わらず外道な彼に、憤怒の炎を吐かんとする銃口が

向けられる。

「一夏のおっ、ばかああああっ!!!!!!!!!!」

怒号を響かせながらIS用のアサルトライフルを“橙色の腕”に携えるのは、シャルロットである。

“橙色の腕”それは、ISの部分展開。

彼女は装甲の全てではなく腕や足、武装などを部分的に展開したのだ。

怒りを破壊に変換するために。

まあ、それもこの二人にとってよくある光景ではあるが……

「銃口向けるな、危ない」

一夏はさも当然のように平然と言い放つ。

そんな彼の言葉を、否定するように新たな二つの殺意が牙を向いた。

「捻り曲がったその性根、私が矯正してやる」

「一夏さん、何か言い残すことはありませんか？」

血管が窮屈そうに、皮膚を突き破らんとしている筈とセシリアである。

セシリアはシャルロットと同じように、ブルー・ティアーズの腕部を展開しスターライトmark?のトリガーに指をかけていた。

ISを展開する二人とは対照的に専用機を持たない筈は、姿勢を低く構え納刀した名刀“緋宵”の柄を渾身の力で握りしめていた。

いわゆる、居合いである。

渾身の力で握りしめられている辺り、彼女の自制心は憤怒の炎で既に灰と化しているらしい。

しかし、幾らIS学園が超法規的存在であったとしても、学園内に

日本刀である緋宵を持ち出して良いわけがない。
まあ、それは、ISの部分展開も同様ではあるが……
そんな三人に、一夏は涼しい顔で宥め始めた。

「どつどつどつどつ。」

落ち着け、なあ、あいつとはただの幼馴染みだから」

一夏の言葉は三人を宥める結果にはならなかった。
それでも、シャルロットとセシリアの視線は一夏から外され箒に向けられた。

一夏の“幼馴染み”という言葉。
なら、同じ幼馴染みである箒が知らぬはずがない、と思いついたのだ。

しかし——予想外の箒の一言が響く。

「私は、こんな女は知らんっ！」

彼女たちの視線は殺気を帯びて、一夏に再度当てられた。
一夏の言葉が真実であれば、箒が鈴を知らないはずがない。
しかし——彼女は鈴を知らなかった。
すなわち、一夏の言葉は欺瞞、ということ。
到底、許せるものではなかった。

「一夏、お別れだね」

シャルロットが、いつもと寸分違わぬ雰囲気ですら宣告を告げる。
優しさの化身であるシャルロットではあったが、怒ると怖い。
それはもう、米軍がホワイトハウスを放って裸足で逃げ出すほどに。
しかもシャルロットはIS操縦者であるため、冗談にならない。
そんなんで、一夏の死刑が執行されようとした瞬間、予想外のところ

るから声が発せられる。

「あー、それ、ほんとよ」

長時間の冷却時間のおかげで再起動した鈴。
そのまま、続ける。

「確か、あたしの前の幼馴染が引越していったのが……小四の
終わりだったかしら……
で、あたしが小五の頭に一夏の近所に引越してきたのよ。
そして、中二の終わりぐらいに本国に帰ったわけ」

鈴の説明に漸く合点のいった三人。

そう、これなら篤が鈴のことを知らないのは当然だ。

二人は、幸運か不幸か入れ違いで引越してきたのだから。

「……納得はいったけど……悪いのは一夏だよ」

「その通りだ、人を弄ぶのもいい加減にしろ」

「そもそも、一夏さんがあんなことを言わなければ……」

三人は渋々、死刑を取り止める。

幾ら、疑惑も憤怒の炎も消火されたといえど、一夏が騒動の根本的
原因であることは間違いないのだから。

因みに、鈴とて弄ばれたことに怒りを覚えていないわけではない。
ただ、一夏争奪戦争のライバルと認識した三人——今の騒動を見れば
ライバルだとすぐ分かる——に、差をつけたかっただけだ。

（相変わらず、モテるわね、こいつ……なんなのよ）

嫉妬心を抱かざるを得ない鈴に、一夏の声が届く。

「で、この乳魔神が箒。」

お前も知ってたんだろ。

お前が今言ってた、前の幼馴染み」

「ふうん、初めまして、これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

鈴は挨拶をしながら箒を熟視する、乳魔神の由来を中心に。箒も負けず劣らず、挨拶を返しながら視線を強めていく。まるで、光子カビームの撃ち合いである。

「後から随分と、図々しいことだなあ」

「一番目だからって、ドヤ顔しないでくれる？」

付き合いはこっちの方が深いんだしさあ」

「そ、それを言うなら私の方が深いぞ！

一夏は何度も家で食事をしている間柄だ、付き合いは深い」

「家で食事を？」

それならあたしもそうだけど？」

「なっ、い、一夏っ！

どういうことだっ！？」

聞いてないぞ私は！」

女の陰湿な口論が当分続くかと思われたが、光子カビームの矛先は一夏に刷り変わっていた。

無論、光子カビームの如き視線など意にも介さず、一夏は淡々と言葉を並べる。

「鈴の実家が中華料理屋でな、俺の好物が定まった場所でもあるんだよ」

そう、鈴の両親は中華料理屋を営んでいた。

基本、どんな料理でも手際よく作れる一夏だが、IS操縦者として活躍していた千冬に、料理を披露する機会は中々なかった。

そうになると、一気に面倒臭さが料理の楽しみを上回り、インスタントを食すことになる。

無論、一夏にとって健康のことなど眼中にもない。

そんな一夏を、無理矢理実家の中華料理屋に誘ったのが鈴であった。それ以来、彼にとって中華料理屋の麻婆豆腐が最大の好物になっていったのだ。

「そ、そうか、店か。」

なら不自然なことはなにもないな、うむ」

張り詰めていた筈の心情が、一夏の台詞により解きほぐされていく。

「そっぴゃ、あのおっさんの調子はどうだ？」

腕落ちてねえだろうな」

赤の他人に対しては見殺しにするほど冷たい一夏だが、彼にとって鈴の両親は重要な存在であった。

ほぼ毎日入り浸っていた上に、亡国企業に誘拐され悲惨な結末を迎えた後、暖かく迎えてくれたこともあったのだ。

「あ……うん、元気——だと思う」

鈴の歯切れの悪い言葉に、妙な感じを受けた一夏であった。しかし、追求することはしなかった。

鈴の様子が見るからに、沈んでいくのがわかったからだ。

そんな中、一夏にセシリアの声が耳に届く。

「んんんっ！ わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

一瞬とはいえ、無視されたことが勘に触った彼女。
わざとらしい咳払いで注意を引こうとする……が

「……だれ？」

「なあっ！？」

わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？

まさかご存じないの！？

「うん、あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

鈴の反応は望んでいたそれとは違ったため、セシリアは言葉を失ってしまふ。

こんなとき、一夏と出会う前のセシリアなら『中国には新聞がないのかしら？』と、毒を吐いたに違いないだろう。

そんなセシリアを尻目に、シャルロットが鈴に手を差し出した。

「僕はシャルロ……シャルル・デュノア。

フランスの代表候補生なんだ。

よろしく、凰さん」

シャルロットスマイルを全開にし、挨拶とついでに握手も交わす。彼女の第一印象で、悪い印象を抱く人物はおそらく皆無であろう。それほどに、優しさを醸し出す人物は中々いない。
しかし――

「——えっ、ええ」

シャルロットの声つきを聞いた鈴は、挨拶も早々に疑問符を頭にも心にも浮かべる。

そして、先程の箒とは比べ物にすることすらおこがましいほどに、鈴はシャルロットを熟視し始めた。

「なっ、何かな？」

全身を舐め回すような視線に気づいたシャルロットは、鈴と同様に疑問符を浮かべる。

そんなシャルロットに、鈴は疑問符を問いかけに変えた。

「ねえ、あんた男？」

（……ああ、そっか）

鈴の問いかけに、心の中で相づちを打つシャルロット。

世界中のマスコミを賑わせている一夏と比べると、シャルロットはそれほどでもない。

だから驚愕も無理はないよね——と。

しかし、鈴の問いかけの真意は全く別のところにあったのだが……

「うん、正真正銘、男だよ鈴。

驚いちゃうよね」

問いかけに答えるシャルロット。

本人からしてみれば——これで鈴の疑問も解消されるよね、と思っただろう。

鈴の懐疑心は、破裂しそうなほどに膨れ上がっていることなど露知らず……

第十五話【もう一人の幼馴染み】

完

第十五話【もう一人の幼馴染み】（後書き）

……今、朝の十一時三十分です。

ああ、かつて0時に投稿したいと言っていたときが懐かしい……0
TL

いや、もう昨日の更新を楽しみにしていた方がいたらすいません。

m (——) m

昨日の深夜、小説を書き終わると同時に寝たんです。
倒れるように。

更新する気力ありませんでした。

取り敢えず、十五話更新しました。(^ー^;))

今回、かつてに酢豚を麻婆豆腐に変更しました。

鈴の得意料理もちろん麻婆豆腐です。

変更した理由はただ単に私が酢豚あんまり好きじゃなく、麻婆豆腐
が好きだっただけなんですけどね。

ほんともう、週に二回のペースで食べてますから。

鈴の奴、完全にシャルロットに疑いを持っています。

まあ、十三話を見た方なら、理由が分かるかと思いますが。

そんな懐疑心が爆発する次話で、会いましょう。

(^ー^)/

第十六話【お前を食べる】

(……“シャルル”・デュノアねえ……)

彼女——凰鈴音はラーメンの麺をすすする度に、疑惑を深めていった。

一夏たちと他愛もない会話をしながらも、疑惑を込めた視線はシャルロットに放たれている。

しかし、ここでその疑惑を言葉に変換しシャルロットにぶつけるような真似をすることはなかった。

(まあ、夜に部屋へ押し掛けて一夏本人に聞けばいいしねえ)

そう結論付けると、ゴクンとスープを飲み干す。

スープのコクを堪能した彼女は、チャイムの轟く時まで彼らと語り合った。

……しかし、彼女の選択が更なる混乱を招くことになるのだった。

深い常闇が訪れる夜。

生徒たちは皆が寮に帰り夕食も済ませ、寝静まる時間までを各々自由消化していた。

学園で最も有名な二人、織斑一夏とシャルロット・デュノアも、その類いであつた。

「……ねえ、一夏あ……」

ほんとに、新しい幼馴染みなんていないよね？」

「いねーっつの。」

少なくともお前が嫉妬するような奴はな」

実のところ、この問いかけは筭やセシリアを含め計十五回を数えており、一夏は投げ遣りに答えた。

鬱陶しく思う彼だが、まさしく自業自得である。

同情する余地は、決してない。

そんな一夏は、十六回目の問いかけを回避すべく、そそくさとシャワールームに逃げようと足を進めた。

瞬間――

「一夏ーっ！ 居るのは分かってるわよーっ！

大人しく、出てきなさいっ！」

犯人に呼び掛ける交渉人よろしく、けたたましい大音声が、扉を突き破られるかと思うほどの打撃音と同時に部屋を巡った。

こんなアグレッシブな訪問をする人物に、二人は心当たりがあった。

「鈴か……相変わらず騒がしい奴」

訪問客――鈴の大声は扉を叩く音と共に、秒単位で激しさを増していく。

しかし、幼馴染みである一夏は、鈴の騒がしさに慣れた様子でドアノブを時計回りに回した。

「なんだあ、お前は悪質な訪問販売か？」

「そんなわけではないでしょ！」

ちよつと話があつて来たのよ」

そこまで喋り終わると、礼儀も糞もなくズカズカと部屋に入り込んできた。

無論、一夏の許可は得ていない。

「勝手に入るな……つっても聞く耳はないよな？」

「あつたり前——っ!？」

——絶句。

一夏の問いにも、最後まで答えを返せずに目を見開く鈴。

視線の先には、怪訝な表情を浮かべるシャルロット・デュノア。

「な、なんであんたがここにい!？」

「いや、当然だろう。」

男同士だろうが」

先程と比べる必要もなく大きい声を発する鈴を、一夏は淡々と論じた。

「うつつ、ま、まあ、いいわ。」

手間も省けるしね」

文句なく正しい台詞に瞬時に納得する辺りは、鈴らしいと言えるだろう。

そんな鈴は、一夏とシャルロット兩人を同時に視界に納め、問い詰めるかのように尋ねた。

「ねえ、デュノアってほんとに男あ？」

「う、うん……どうしたの鳳さん」

「ふうん……」

鈴は頷きながらも、納得した様子など微塵も感じさせない。シャルロットの返答は、鈴にとって“やはり”という感じであった。

そして鈴は、シャルロットにとって衝撃的な台詞を口に出す。

「実はね、あたしがはじめて学校に来たとき寮から二人の話し声が聞こえたの。

姿は見えなかったんだけどねえ。

一夏の声をした男と、デュノアの声をした女だった。

それと、男は話し相手を女として扱っていたわね。

男は“一夏”と呼ばれ、女の方は“シャルロット”って呼ばれてたわ。

どう言うこと？」

「——っ！？」

——絶句。

今度は、シャルロットが絶句する番であった。

（ばっ、ば、バレちゃったあっ！？）

“織斑一夏クラス代表就任パーティー”がお開きになり、一夏と共に部屋への帰路での他愛もない会話。

二人きりであったため、シャルロットは自分が男装しているということ忘却していた。

その時の会話が、鈴に聞かれていたのだ。

「いやっ、あのっ、違うの、違うんだよ！？」

必死に弁解を試みるシャルロット。

しかし、狼狽した彼女にまともな弁解などできるはずもない。

それでも、ここを切り抜けなければ『女であることがばれてしまう』だろう。

（し、仕方ない……よね？

鈴だって分かってくれるかもしれないし……）

混乱の極致に陥ったシャルロットの頭に“諦め”の言葉が通り、真摯に事実を告げる決心をする。

鈴は決して悪い人間でないのは、今日一日で十分に理解できた。しかしシャルロットは、もしも、分かってくれずに最悪の結果を迎えてしまった時のことを、無意識に想像してしまう。

人間とは、悪い状況に置かれると、かつてに悪い方向へ思考が及ぶものである。

そんなシャルロットは、思考に追従するように表情を曇らせる。そのシャルロットの変化を、一夏は見逃すことはなかった。

「ふーっ……あのね、凰さん。

これには深い事情が……」

シャルロットがそこまで、言葉を発した瞬間であった。

「実はな鈴、シャルルが『シャルロットって呼べ』って言って聞かねえんだよ」

「……えっ？」

鈴は、すつとんきょうな反応を示した。

鈴は僅かとは言えど、シャルロット・デュノアが女であるという疑惑を心に携えていた。

その疑惑を解消すべく、一夏の台詞に聞き入った。

「シャルロットはな、俺に女扱いしてほしいんだと。いわゆる、“アレ”だな」

——驚愕。

予想していたことの、どれにも当てはまらない答えに、鈴は言葉を失い声帯も同時に役割を喪失した。

そんな一瞬のスキに、シャルロットが一夏に非難の言葉を浴びせるが……

「いつ、一夏あつ、何てこ——なつ、何を!？」

避難を浴びせ終えるのを待たなかった一夏の片手が、シャルロットの両手首をガッチリと掴んだ。

さらに、それを頭頂部よりも上の位置まで持つていき、そこで停止する。

バンザイするような形で、拘束されたのだ。

妙に手慣れているのは、女性を拘束することが彼にとっての趣味であるからだ。

「ちよつ、一夏あつ!？」

うつ、動けないよあつ!？」

離してよあつ!」

まるで、強姦魔に襲われたいたいけな女性のような声を上げるシャルロット。

……まあ、確かに、間違いではない。

一夏はそんなシャルロットを無視し、鈴に問いかけようとする。

「なあ、鈴。

まだ腑に落ちないんだつたら、確認すればいい」

一夏はそう言うと、それはもう愉快的な気分であった。

そして、あるうことがシャルロットの着用している制服のズボンに

もう片方の手をかけた。

……脱がすために。

「きゃああああっ!？」

「やだああああっ!！」

「いやっ、一夏あっ、あんた何やってんのよ!？」

二人は悲鳴にも近い——内一名は確実に悲鳴——、ごうごうたる非難を放つ。

端から見れば、完全に強姦事件現場である。

しかし、事件の犯人である一夏は、実に楽しそうに二人を退けた。

「だから、確認すればいいだろうが。

こいつにだって、曲がりなりにもミサイルはついてるんだからな」

「「なっ——!？」」

まさしく爆弾発言、それに伴いシャルロットのズボンのベルトを外す一夏。

あまりにもあんまりな一夏の言動に、鈴はいよいよ耐えられなくなった。

「もうっ、いやあっ、あたし帰るっ!！」

鈴は明らかに柄でもない捨て台詞を吐き、部屋を後にする。

その際、溜まった怒りを発散するため、扉を渾身の力で叩きつけるかのように閉めた。

爆発音にも等しい音が部屋中に響く。

「ん、行っただか」

一夏は激しく閉められた扉を確認し、シャルロットを拘束していた手を離す。

シャルロットは一夏の手形がついた自分の手を確認もせず、ぎゅつと己の体を抱き締めた。

強姦魔から身を守る女性そのものである。

心なしに涙目のシャルロットは、呻き声を上げることしかできなかった。

「うっうっうっ」

そんなシャルロットに、罪悪感を一切として抱かない一夏が声をかけた。

「そんなに俺に襲われるのが嫌か？」

「だってえっ、いきなり過ぎるよおっ!!」

人前であんなことするなんてええっ!!

それに、一夏ったら鈴に変なことを吹き込んだじゃない……

完全に僕のことホモだって勘違いされちゃったよお!

……一夏のへんたい」

これでもか、と言わんばかりの口激が一夏に加えられた。

まあ、一夏がいきなり、あのような行動を起こせば当然である。

しかし、一夏は僅かながら怪訝な表情を顔に出す。

「なに言ってたんだか。

シャルロットって呼べって言ったのは、間違いなくお前だろうが。女として扱って言ったのもだ。

俺は悪くない」

「うっうっ」

確かに、そうである。

セシリアとの決闘が終わった後、彼女はシャルロットと呼んで欲しいと言った。

女の子として扱って欲しいとも思った。

少々、いや、決定的にニュアンスが違うが……

反駁の余地のないシャルロットが口ごもると同時に、一夏がさらに、台詞を重ねた。

「それに、俺のおかげでバレずに済んだじゃねえか。感謝しろ」

「うるさいっ！ 一夏、へんたいさんだよっ！」

[illegible]

確かに、冷静に考えればそうである。

一夏が、鈴の懐疑心を消し去ったのだ。

さらに、居た堪れなくなつた鈴は自分から部屋を出ていった。

考えれば一夏のおかげなのは確かだが、いかんせんやり方が外道過ぎた。

素直に納得できず、虚しい非難を浴びせるしかないシャルロットであつた。

“へんたい”という単語が、機関銃よろしく連発される中――

「一夏あつ!!」

再び、けたたましい声が部屋に響いた。

と同時に、扉が粉碎しないか、と心配を抱くほどに激しく開けられた。

入ってきたのは、さつき居た堪れなくなり部屋から出ていった鈴である。

「またお前かよ、鈴。」

帰ったんじゃないの？」

「ま、まだ用があるのよ。
文句ある？」

どうやら一人、になり幾分か落ち着いたようだ。

一夏は、僅かにうんざりした様子ではあったが、鈴の用を受け入れてやることにした。

そうでもしないと、いつまでも部屋に住み着いてしまいそうだからである。

「で、用ってのは？」

「う、うん、一夏……」

あたしが中国に帰る前にした約束、覚えてるう……よねえ？」

今までの勢いはどこに吹っ飛んだのか、と思いたくなるほどに鈴の態度が急変した。

視線が床に向き、それでも可愛らしい黒目が一夏にちらちらと向けられる。

そんな彼女の顔色は、スーパーでリンゴと並んでいても違和感がないほどに真っ赤である。

そんな鈴を見た一夏の顔から、実に邪悪な薄ら笑いが漏れだした。

「えーと、あれか？」

鈴の料理の腕が上がったら毎日――」

「そうつ、それよっ！」

鈴の思い描いた最高の結果が現実となり、太陽が上ったように一気に顔が晴れていく。

しかし、一夏がただ覚えているだけ、というのはあり得なかった。一夏は、そんな普通の人間ではない。

「『お前を食べさせてくれる』んだっ たよな」

——沈黙、絶句、驚愕、??。

言葉で表現できない何かが、部屋を襲う。

それに完全に飲み込まれたシャルロットと鈴の思考は、既に銀河の果てへ吹っ飛んでいた。

「……いちかがああ……たべるうう……あたしをおお……」
「じよじよじよじよじよじよ」

一夏が鈴を食べる。

その一文の意味を理解できぬほど、二人は初ではなかった。
つまり、食べるとは、そういうこと。

ある意味、夜食である。

そんなこんなで今世紀最大の混乱ぶりを見せる二人。

「冗談だよな、凰さんを食べるだなんて!？」

しかし、『食べる』と直接言われていないシャルロットは、いち早く魔界からの脱出に成功したようだ。

そんなシャルロットに、一夏は爆笑しながら言い放った。

「いやあ、プフウッ!

た、たぶん間違いないぞ……と思う……プブッ」

「あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう」

相変わらずふざけまくる一夏に、もはや完全に思考回路がショートし奇声を発し始める鈴であった。

鈴の思考回路がショートする瞬間から、僅かに時は遡る。

「なぜ、セシリアがここにいる？」

「こっちの台詞ですわ、箒さん？」

――一夏の部屋に繋がる廊下にて、仇敵が合間見えていた。

――竜虎相博つ。

「私は……一夏の様子が気になったただけだ、幼馴染みとしてな」

「わたくしは……誇るべきクラス代表が気になっただけですわ」

「そうか、なら一夏の様子は私が後でお前に伝えてやる。

早々に帰るがいい」

「箒さんこそ、このわたくしが後で伝えて差し上げますわ」

竜虎が火を吐くように、互いを貶す言葉が吐き出されていく。
そんなことをしながらも、立ち止まらず一夏の部屋へ歩を進めていた。

「いつまで付いてくる気なのだ？」

「貴女こそ、もう部屋に着いてしまいましたわ」

そう、彼女たちは一夏の部屋に到着した。

――到着してしまった、これから起こる悲劇も知らずに……
取り合えず、二人は扉を開けようとして……異変に気づいた。

「……一夏とデュノア以外に誰がいるようだぞ？」

「……なんですって？」

一気に警戒心を増す彼女たち。

警戒心を増した人間が、まず起こす行動は情報収集である。
二人は聴覚を鋭敏にし、そつと耳を扉に押し当てた。

「……誰がいるのだ？」

「な、何か聞こえますわ」

二人の耳が、衝撃的台詞を捉えた。

「『お前を食べさせてくれる』んだつたよな」

「……いちかがああ……たべるうう……あたしをおお……」

「……は？」

部屋から聞こえてきた台詞に言葉を失う二人。

そつと扉から離れ、状況の整理を試みる。

「一夏は誰かを食べるそうだぞ？」

「鳳さん……でしたわね。」

確か、あたしをたべる、と言ってましたわ」

つまり、一夏が鈴を美味しくいただく、ということである。

無論、通常の食事的意味ではない、性的意味だ。

二人はそこまで考察が及ぶと、互いの怒気溢れんばかりの表情を確認する。

「相も変わらず、姓にふしだらな奴だが……」

「今日という今日は……」

鬼ヶ島の鬼も裸足で、ついでに財宝も放ったらかしで退散しそうな口調で言い放つ。

無論、桃太郎の出番はない、悪しからず。

この瞬間、竜虎の志は同調した。

「鈴もろとも、コロスウウウ!!!!!!」

乙女心は殺意に満ち溢れる。

二人の理性を喪失させるのに十分なそれは、人間を修羅へと変貌させた。

第十六話【お前を食べる】

完

第十六話【お前を食べる】（後書き）

今、12時40分を越えちゃいました。OTL
すいません、ほんと。

m(――)mm(――)mm(――)mm(――)mm
言い訳みたいですが、昨日、便秘から来る腹痛で動けなかったんです。

(ノー。)

ほんと、マジです信じてください。

(ノー。)

見放さないください。

(；つД、)

第十五話のアクセス数、結構、下がっちゃったんですよ。

(；つД、)

てなわけで、第十六話、投稿完了です、なんとか。

今日、鬼畜一夏完全全開でした。(^―^；)

強姦魔に襲われてしまったシャルロット、美味しく食べられる鈴、ヤンデレと化した箒とセシリア。

これ全部、一夏の仕業ですからね。

屑です、銀河一の。

けどまあ、鈴の疑惑も解消されましたし、良しとしましょう。(^

―^；)

それと、全国シャルロット党員の皆さん。

今回、一夏に襲われ拘束されズボンを脱がされかけたシャルを想像してみてください。

ε||ε||(ノ)ノ

興奮した方は、是非とも次話をご覧ください。

＼（ 3 3 3

第十七話【悪いことをすると、自分に帰ってくるんだよ】

人々を慄然とさせる光景だった。

扉の前に立ち尽くすのは、一見すると可憐な少女二人——箒とセシリア——であった。

だがしかし、身に纏う雰囲気は少女のそれではなく、鬼のそれである。

「「一遍つつつ、死ねええええ！！！」」

彼女たちは可憐な風貌に似合わず、恐ろしい暴言を廊下に響き渡らせる。

やくざもビックリである。

そんな二人は、怒りに比例するように戦闘体制を整えていった。淡い光が一瞬の間だけセシリアを包み、光が引いた時にはブルー・ティアーズを展開した彼女がそこに佇んでいた。

「英国紳士に矯正して差し上げますわあっ！！」

怒号を響かせた上、部分展開ではなく完全展開をしたことから分かる通り、彼女の理性は消失してしまったらしい。

そんなセシリアの横では、緋宵を抜刀した箒が侍よろしく佇んでいた。

「待っている、一夏あ！」

そのまま『御用改めである！』と叫び、一夏の部屋に乗り込みそのうな勢いである……

「はあああああつっ！！」

——いや、乗り込んだ。

部屋に鍵がかかっているのを確認するや否や、鍵を扉ごと壊さんと突入を試みる二人。

緋宵とスターライトmark?を、扉に向け——

「よう、精が出るなあ」

「っ！？」

突如として扉が鈍い音を響かせて、開いた。

そして、そこから顔を出したのは、憤怒の原因たる織斑一夏であった。

予想だになかった事態に直面し、彼女たちは怒りが一時停止し彼を凝視する。

その彼の腕には、今日顔見知りとなった女子——鈴がお姫様だっこで抱かれていた。

「実はこいつの頭が、完全にフリーズしててな。

部屋に送ってやってほしいんだ。

それと、別にこいつとはなんもないからな。

じゃ、頼んだぞ」

「あうあうあうあうあうあうあうあう」

啞然とする二人に言い放ち、まるで当然のことのように奇声を発する鈴を二人に託した。

そして、用は終わったと言わんばかりに部屋へと消え、扉を閉めてしまう彼。

あまりの一夏の態度に、茫然自失する二人。
そして——

「そつ、そんな言い方で許されると思っておるのかあああつ!!」
「乙女の純情を弄ぶ男は、ゴリラに殴り殺されるがいいですわあああつ!!」

——再燃する憤怒。

もしやすると、歴史に刻まれるかもしれないほどに、憤怒が増幅されてしまう。

聖書に登場すれば、最大級の魔王として扱われることだろう。
それほどまでの怒りっぷりであった。
そんな二人に、接近する影が一つ。

「おい、何をしている」

「邪魔をするなあつ!!」

影の正体を確認しようともせず、拒絶する怒号を言い放つ箒。
影は僅かながら眉にシワを寄せ、再び問う。

「IS展開に真剣抜刀。

誰かを抹殺する気か？」

「あなたには関係ないことでしてよっ！」

影の存在を気にも止めず、それを拒むセシリア。

影は鬼と化した二人の女子に聞こえるように、深々と溜め息をつき

「此方を、向け」

と、命令を下した。

絶対的威圧感をもって下されたそれに、箒とセシリアは従わざるを

得なかった。

その命令に、本能が生命の危機を察知したのだ。ゆっくりで、なおかつ壊れたロボットのよう、冷や汗で体中が水浸しになった二人が、影に視線を向け、正体を理解してしまった。

「もう一度言ってやる。

何を、している」

学園——いや、世界の頂きに立つ唯一絶対的存在、織斑千冬であった。

「いつ、いやあ、あのあ」

「こつ、これには、それはそれは深い事情がありましたですね……」

必死な弁明をする彼女たちは、蛇に睨まれた蛙が命乞いをするかのようだ。

……いや、蛇ではなく大蛇、蛙ではなくおたまじゃくし、と言い直しておこつ。

それほどまでの光景であった。

「確かに、IS学園は超法規的存在だ。

しかし、許可なきIS展開に真剣の抜刀は、処罰の対象だ。

どんな理由があったとしてもな」

その通り、ISの許可なき展開は禁止されている。

……真剣抜刀については、本来記述がない。

IS学園もまさか、学園に真剣を持つてくる生徒がいるなど、あまつさえ抜刀するなど、全く持って想定していなかった。

当然と言えば当然である。

それでもまあ、危険行為は処罰の対象であるのは間違いないかった。

「いやっ、待って、聞いてくださいっ」

「こっ、これは一夏さんが原因でして……」

「だろうな」

自分達の必死極まる弁明を遮られ、呆氣にとられる二人。

「大方、織斑のいつものボケに振り回されているんだろう。

で、一夏は校則を破ったのか？」

「……い、いえ」

そう、騒動の原因は紛れもなく一夏にあるのだが、決して彼は校則を破ったわけではないのだ。

ただ、外道だけである。

残念ながら『外道を罰す』という校則はない。

「そうだな、一つ助言をしてやる。

早くあいつのボケに、冷静なツツコミをいれられるようになれ。でなければ、まともな結婚生活など送れはしないぞ」

「「けっ、結婚!？」」

将来、姉になるかもしれない——一人は、そうなるよう願っている——人物の爆弾発言。

恋するうら若き女子に、冷静さを保てと言っつのは無理なことであった。

「冗談だ」

「——なっ!」

頭が熱を帯びるほどに高速回転する二人に、突如として冷水を浴

びせるような一言を放つ千冬。

「まあ、取り合えず自分の部屋に戻れ。
無論、どういう訳か気を失っている鳳も送っておけ。
分かっているとは思うが、明日の放課後に教室を掃除しておけ、罰
だ」

千冬はそれだけ言い残すと、先程の弟に似た雰囲気ですぐにその
場を立ち去っていった。

——いや、弟が姉に似ているのだ。
そんな彼女の後ろ姿を、せめてもの反乱とばかりに非難を込めた視
線を向ける二人。

「……行くか」

「……ですわね」

千冬の後ろ姿が視界から完全に消えると、二人は怒りも何もかも
消え失せた。

先程の冷水は、二人の憤怒を燃料に燃え盛る炎すら消火したのかも
しれない。

二人は多少の憤りを感じながらも、鈴の両腕を二人の方に回し、
サンドイッチのように挟み込んで担ぐ。

そうして、実に不本意ながらも鈴の部屋へと歩を進めていった。

「あうあうあうあうあうあうあうあうあう」

二人の耳には、鈴の奇声が慰めるように聞こえ続けた。

「おーい、どうした？」

「……………」

「俺、寂しくて泣くぞ？」

「……………」

執拗なまでに、一夏は揺さぶりを繰り返す。

それを眼中にないと言わんかのように、そっぽを向くシャルロット。要は、拗ねているのだ。

ベッドに寝転がり、必死に一夏の揺さぶりを頭から抹消しようとする彼女は、一般の男の目から見ると実に可愛いであろう。

（一夏のばか、もう知らないっ！）

ただ、一夏にとってそれは“面白い”という感想しか生まれ出でなかった。

「分かった、お前がそうなら俺にも考えがある」

「……………」

今、彼女はベッドに寝転がり、一夏を視界から外している。

そんな彼女に、一夏は背後から忍び足で近づく。

そして、一瞬なにかが軋む音が沈黙している部屋に流れる。

「シャあゝルロットおゝ。

グイッとな」

「ひゃっ！？」

一夏が何をしようとも無視しよう、と決め込んでいたシャルロットであったが唐突に肩を掴まれ、まるで電気が走ったように体がビ

クツと跳び跳ねた。

心の中で一夏に恨み言を吐き続けていた彼女は、とつさに甲高い声を上げてしまう。

さらに、彼女の片方の肩を引き寄せ、無理矢理に一夏の顔を拝ませた。

瞬間――

「うひゃあああつ!？」

二人の鼻が軽く触れた。

一夏は、なんとシャルロットのベッドに侵入し、彼女の背中に寄り添うように添い寝をしていた。

さらに、半ば強制的に振り向かされた彼女の目の前には、添い寝をする彼の顔があつたのだ。

「なななっ、なんで一夏が僕のベッドにいいっ!？」

「一肌恋しいから。」

お前が悪いんだからな、だから抱かせろ」

一夏の悪ふざけとも本気とも取れる台詞に、シャルロットは狼狽を隠しきれない。

そんな彼女の耳に伝わる彼の呼吸と心臓の鼓動は、彼女の感情を否応なしに高ぶらせていく。

そんな彼女は、一夏の瞳に映る、赤く火照っていく自分の姿までも目にしてしまう。

（ああっ……僕、真っ赤だああ）

一夏の瞳に映っている自分をみて、さらに赤みが広がっていく彼女。

明らかに、狼狽は期待へと変貌していった。

それは、愛しい彼に向ける熱い眼差しという形になって現れていく。しかし、一夏は人身を弄ぶことを至高の愉悦とする、真の鬼畜であった。

「しかしな、お前がどんな期待を持っているかは知らんが、不純異性交友はいかんぞ。
うん」

きよとんとするシャルロットを尻目に、一夏はベッドから起き上がり去っていく。

「……ほ」

「俺、先にシャワー浴びるわ。
変な意味じゃないぞ」

脱衣場へと足を向ける一夏の後ろ姿を見て、シャルロットの魂の込められた一言。

「一夏のおっ、あほおおつつつ！……！」

——怒号。

一夏と同室となつてしまった彼女は、彼に弄ばれ続ける運命なのだ。哀憐極まるシャルロットであった。

麗しき桜の儚い命が散っていき、地面を桜色に染める皐月。

「はあああああゝ」

一年二組の教室に、鈴の深すぎる溜め息が轟く。
聞いた者が、脱力感を覚えるほどである。

（最近……一夏と全然話せてないじゃない）

あの一夏の『お前をたべさせてくれる』発言から、三週間が経っていた。

それ以来、自分を食べる彼を想像し、まともに一夏と接することができないでいる。

一組には近づかないし、一夏がいたら顔を背けるし、飯時も登校も下校も時間をずらしているのだ。

「だって、あんな約束じゃなかったはずでしょ。
それなのにいつ、ああっ、もう！」

自分の感情を御していない彼女は、混乱から抜け出さんとするかのように頭を掻きむしる。

彼女には無論、あの台詞が彼の悪ふざけであることは分かっていた。それでも、彼女の感情は理性を離れ好き勝手に暴れまわる。

そんな彼女の聴覚に――

「どした、お前は喧しさが取り柄の女だろ？」
「わあああっ!？」

意中の一夏の言葉が響いた。

耳を通り脳に衝撃を与えた声に、過剰な反応を示す彼女。
声の発生源に視線を向けると、一夏とシャルロットが並んでいた。

「おお、出川も真っ青なりアクションだな。どうだ、一緒にM・ワンでも目指して――」

「もう、M・ワン終わったでしょ、一夏」

「いつ、一夏っ、一体何しに……」

一夏の突然の訪問に、鈴はなんとか言葉を捻り出した。

彼女が必死に焦りを隠すのを見通した一夏は、面白がって問う。

「だからお前、どしたよ、寂しかったんだぞぉ」

「……んたが……」

「ん？」

「あんたが、あんなこと言うからでしょうが！

完全に意識しちゃってるのっ、どうしてくれんのよおっ！」

突如として自分に噛みつく鈴に、一夏は怪訝な表情を露にし問う。

「……俺が、何か言ったのか？

覚えがないなあ、うん」

「はあっ！？」

彼の問いに、血と怒りを頭に集約させる鈴。

しかし、それは順当な怒りであった。

なにしろ、自分が落ち込んでいる原因を作り出した男が、忘却したと言っただから。

しかし、致し方ないことではあるが鈴とシャルロットは、一夏のいつものボケだと思い込んでしまっていたのだった。

「あんたっ、また人を弄ぶつもりっ……」

「いや、ホントに知らん、いつの話だ？」

「一夏、それはあんまりだと思うよ。
三週間前に、『お前を食べる』みたいなこと言ってたよねえ」

シャルロットの発せられた言葉には、明確な非難が乗せられていた。

しかし――

「なこと、言ったのか？」

一夏は悪ふざけでは断じてなく、いつそ清々しいほどに亡失していた。

これが年単位ならまだ得心はいくが、たった三週間前のことを忘れていたのだ。

類を見ないほどに、凄まじく酷い男である。

「あんたっ、まさかホントに……」

「……忘れちゃったの？」

「おう」

胸を張り、満面のドヤ顔を披露し言い切る一夏。

シャルロットの非難の視線は、コンクリートを貫通しそうなほどに苛烈さを増していく。

一方、鈴は心の底からマグマよろしく沸々と怒りが沸き出してくる。そんな禍々しささえ漂う空気を、はしゃぐような声が切り裂いた。

「ねえーっ、廊下の張り紙みてみなよ。

クラス対抗戦の初日、うちの凰さんと、あの織斑くんだってえっ！」

二組の女子が、大スクープを手にした記者にも似た様子で教室に駆け込んできた。

手にカメラか手帳でも持っていれば、完全にマスコミである。無論、このニュースはすぐさま教室中を駆け巡った。

「ほんとっ、まじっ!？」

「どこに張り出されてるのっ？」

「ああっ、どっち応援しよう？」

自分達の代表と学園唯一の男子、この二人が刃を交えるというのは、やはりビックニュースであった。

我先にと教室を飛び出し、張り紙へと駆ける二組女子一同。

「ふっ、くふふふっ」

そんな女子達を、鈴は思考の外に追放し不敵にせせら笑う。

「いいじゃない、ちょうどいいわあ」

「おい、鈴、どした？」

「クラス対抗戦、全力で、叩きのめしてあげる」

「……………」

憤怒で顔を歪ませていたはずの彼女は、歓喜の渦に心が踊っていた。

こんなにも早く、この憎き一夏をぶっ殺せるだなんてねえ——と。

それとは対照的に、一夏は明らかに心を沈ませていく。

それはもう、足を絡め取られ地獄へと引きずり込まれる大罪人さながらである。

（なんか凄えやる気だなこいつ……）。

ああ、ただでさえ面倒臭い対抗戦が、さらに面倒になっちまっただ

ろうが……)

一夏は対戦相手が運悪く鈴であることを知り、クラス対抗戦をさらに激しく面倒に思う。

しかしながら、彼女の燃え盛る憤怒に薪を投入した彼に、同情の余地はない。

犯罪者が獄に繋がれるのと大差ないのだ。

「……一夏」

「……何？」

悪童をたしなめるかのように、シャルロットは一夏に言い放つ。

「悪いことをすると、自分に返ってくるんだよ。
分かったあ？」

その時のシャルロットはそれはもう、可愛らしい満面の笑みであった……らしい。

第十七話【悪いことをすると、自分に帰ってくるんだよ】

完

第十七話【悪いことをすると、自分に帰ってくるんだよ】（後書き）

[illegible]

第十七話、更新です。

では、さようなら。

$$\frac{(\wedge | \wedge)}{/}$$

ダメですか？

$$\begin{pmatrix} \cup \\ | \\ j \end{pmatrix}$$

……もう、私は開き直りました（自分で言うな）。

$$\left(\begin{array}{c} \wedge \\ - \\ \wedge \end{array} \right)$$

後書きも律儀に見てる方であるなら知ってるかと思いますが、私は3日おきの更新を目安にしています。

前話から今日で5日です。

……こうなったからには、もう、いくら遅れても平気だぞ。

\\(\wedge O \wedge) / やたー

冗談です、待ちわびていた方にはすいません。

[illegible]

m (—) m m (—) m m (—) m

どうでもいいことですが、眼鏡を新調しました。

(— —) ……眼鏡？

近視と乱視両方のレンズが入っております。

眼鏡がないと、明日も見えない、今も見えない、己も見えない、
3
日後も見えない。

(ε — ε)

では、3日後を期待せずに待っていてください。
では、ホントにさよなら。

(^ — ^) ノシ

第十八話【鳳凰】

「……わああああああっ！！！！」

第二アリーナは、異様な熱気に包まれていた。

観戦席は満員御礼。

本来、観戦するところではない通路までもが立ち見している女子で押しくら饅頭となっている。

朝の通勤ラッシュに耐えてきたリーマン達ですら、根を上げるだろう。

会場入りすら叶わなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターに興奮冷めやらぬ視線を送っていた。

今日は、皆が心踊らせながら待っていたクラス対抗戦当日。

「……はあ、だるう」

そんな熱気やら興奮なんかとは対極に、カタパルトで出撃の時を待つ織斑一夏は、声のリズムが落ちる一方であった。

出来うるなら寮で惰眠を貪りたかった、と。

「……まあ、すぐ終わるだろうからなあ……」

試合直前とは到底思えぬ緊張感のなさである。

結局、最後まで愚痴を溢しながらアリーナに飛び立った。

衝撃をその身に纏い、嫌々ながらも空へと飛び立つ一夏。
そんな彼と相對するは鳳鈴音。

ブルー・ティアーズ同様、宙に浮いた装備である非固定浮遊部位が目を引く。

その部位は突起物を有しており、見た者に攻撃的な印象を与えた。赤と黒の配色がより一層にそれを際立たせるそれは、まるで鳳凰と見間違ふかのようなフォルムである。

これこそが彼女の、中華人民共和国製第三世代IS“甲龍”。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「ほっ……」。

なら、痛めつけてみるよ」

挑発を挑発で返され、鈴のこめかみに細いながらも血管が浮き出る。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

暴走する血管の流れを押さえ込み、脅しを込めて告げる彼女。だがしかし、嘘偽りでは決してない。

規格外の攻撃力を有してさえいれば『殺さない程度にいたぶる』ことは可能なのだ。

しかし、一刻も早く寮に帰りベッドにダイブしたい一夏は、イラつきを込めて言い飛ばす。

「おい、ご託はいいからとつとやれよ。

この、貧乳」

「——っ！

……いつ、言っただわね」

瞬間、憤慨のあまりアリーナ中の空間を淀ませる彼女。

鈴のツインテールの髪がゆらゆらとうごめく。

風が髪を撫でて、うごめいているわけではない。

髪の毛一本一本に怒りが込められ、独立した生物のように彼を睨んでいるのだ。

メデューサそのもの、と言えよう。

「言っではならないことを、言っただねえ！」

彼女の態度からも分かる通り、二人は一触即発と言うべき状況に陥っていた。

刹那、張り詰めた空気が、けたたましいブザーで切り裂かれる。

火蓋は切って落とされた。

「はあああっ！」

「そらっ、よっ！」

ブザーが切れるのと同時に、彼女は得物を握りしめる。

握りしめるは、異形の青竜刀——双天牙月。

両端の刃があまりにも巨大なそれは、刃に持ち手が付いているのかと錯覚するほどだ。

腕のあらゆる関節が滑らかにスナップを効かせ、変幻自在の斬激を繰り出す。

それを、一夏は嘲笑うように大きく旋回し回避する。

「ふうん、速いわね。

けど、思っ壺よっ！」

してやったり——という笑みを隠そうともせず、鈴は宣言する。

彼女からしてみれば双天牙月の斬激が当たらずとも、別に“構わない”。

彼女が最も信頼を置く一撃が、命中しさえすればいいのだ。

非固定浮遊部位の装甲がスライドして開く。

中には眼球にも見える球体があり、一夏を見つめるように動き続ける。

そして、一瞬の間だけ光を放出。

――刹那、一夏は視認できぬ衝撃に撃たれた。

「ふふん、どうよ。

甲龍の衝撃砲の味は？」

いとも簡単に食らった一夏に、勝利を確信した彼女は勝ち誇るように言い放った。

しかし――

「なんだ、偉く薄味だな。

醤油でもかけようか」

「……うそ」

一撃をもろに食らったはずの一夏は、なに食わぬ顔で、そこにいた。

痛みもなければ、シールドエネルギーすら消費していない、もちろん絶対防御も発動している節はない。

鈴にとって、あまりにも信じがたい光景であった。

「今の鈴の攻撃は、何なんだ……？」

ピットのリアルモニターで、試合の行く末を見守っていた篤が呟く。
目に見える変化はなかったはずなのに、一夏が弾き飛ばされたのだ。
致し方ない疑問である。

「『衝撃砲』ですわね。

空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す。

砲身も砲弾も目には見えませんし、砲身斜角には制限すらない。

真上真下真後ろ、全方位に向けて撃てるのが特徴ですわね。

ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

セシリアの言葉で、篤の疑問は解消された。

しかし、矢継ぎ早に疑問が浮き上がる。

「それにしても、一夏さんはなぜダメージを受けていないんですの？
わたくしの時もそう……」

「……うむ」

衝撃砲を食らった一夏であったが、全く堪えた様子にはなかった。
今にして思うと、セシリアとの決闘の時もそうであった。

自信を持って放ったミサイル型ピット、それを直撃させたにも関わらず、一つの傷も負わせられなかった。

「……インパルスって、一体……」

「——VPS装甲」

「「えっ？」」

深くなっていく疑問に、光を照らしたシャルロットはそのまま続ける。

「ある一定の電圧の電流を流すことで、相転移する装甲だね。エネルギーを消費することで、高熱源エネルギー以外を無力化するらしいよ。」

その相転移の時に、装甲面の分子配列が変わって、色が変化するって一夏が言ってた」

高熱源エネルギーとは、ブルー・ティアーズやビームライフルに代表される、ビーム兵器やレーザー兵器のことである。

それ以外、ということは即ちミサイルやレールガン、実体剣等は無効に帰すわけである。

そして、第二世代までは実体装備しか存在し得ず、一部の第三世代にしか高熱源エネルギーの兵器は存在し得ない。

「現行のISの大半が敵ですらない、ということですね」
「なんて、でたらめなISなんだ」

三人は再び、意識を試合に戻す。

インパルスを捉えた視線には、微かな畏怖が含まれていた。世界最強と言っても過言ではないISに、まさしく衝撃を受けるのだった。

「ええいつ！」

確実に当たっている、確実に直撃だ。

だが、一夏相手に衝撃砲は、意味をなさなかった。

衝撃砲に全幅の信頼を置いていた彼女は、あり得ぬ結果に焦りを覚える。

もし、VPS装甲の存在を知っていたならば、焦りも押さえられたかもしれない。

衝撃砲が有効ではないと悟った彼女は、その手に握る青竜刀『双天牙月』に意識を向けた。

一瞬の後に、意識を一夏に戻し次の一手を思考し、スラスターを吹かし一夏に接近。

双天牙月を真横に構え、一夏を真横に断斬せんと、振りかぶった。

「衝撃砲がだめでもっ！」

その一撃は、一夏に一文字の血を走らせる、はずであった。

しかし、虚しくも――

「いや、これ、避けていいから楽だな。

クラス対抗戦も捨てたもんじゃないな、うん」

双天牙月の巨大な刃は、一夏の胴で止まっていた。

詳しく掘り下げると、彼の皮膚が硬質な鉄にでもなったかのようにである。

それに遮られ、刃は胴に通ることはなかったのだ。

誰の目から見ても甲龍はインパルスに、極め付きに相性が悪かった。

「くっ、一体なんなのよ、これはっ!？」

鈴は堪らず、苦情めいた言葉を発する。

それでも、代表候補生たる彼女は即座に距離を取り、勝利への道筋を必死に思考しようと試みる。

しかし、それは図らずも叶わなかった。

——瞬間だった。

アリーナ全体に激震と轟音が『落ちる』。

何者かがアリーナの遮断シールドに穴を開け、地面に粉塵をもって降り立ったのだ。

巻き上げられた粉塵は土煙となり、狂暴な意思を持ったかの如く二人を覆う。

「……くっ」

「きゃっ!？」

二人は襲ってくる土煙から体を庇うべく、片腕をかざす。

本来ならば、視覚を奪われるであろう土煙の中にあっても、ISにより視覚が鮮明化していた二人は状況を見据えていた。

「一夏、あれって……」

「ISだな……」

その姿は、まさしく異形であった。

土煙に同化してしまいそうな深い灰色に、異様なまでに長い腕。爪先よりも先まで延びており、無造作に地面に置かれている。

腕には、遮断シールドを貫通したであろうビーム砲口が、左右合計で四本装備されている。

さらに、首が異様に短い……いや、首が存在せず、頭と肩が一つと化しているのだ。

そして、最も異形さが際立っているのは、これが『全身装甲』であることだ。

そこにあるはずの肌色をうかがい知ることはできず、ただ灰色一色であった。

「一夏っ、今すぐ戻るわよっ！」

押し寄せる驚愕を止め、一夏に促す。

だが、それに返ってくるはずの返事はない。

「……い、一夏？」

凄まじく嫌な予感が頭を過り、幾度もなく彼を呼ぶ彼女。
そんな彼女に、ようやく声が返ってくる。

遙か遠くから、プライベート・チャンネルで。

『なんか、やばめだから、先に逃げるわ。

んじゃ、そういうことで』

「……へ？」

ふざけたことを、えへんと言いきる一夏。

気づけば、鈴の周りから彼の姿は消えていた。

鈴が謎のISに意識を持っていかれている内に、彼は脱兎の如く逃げたのだ。

刹那、鈴は噴火した。

「頑張れ、鈴。

影ながら応援してるぞ」

啞然とする鈴を遠目に、一夏はピットへと繋がるゲートに向かう。

無論、罪悪感など微塵も感じてはいなかった。

「……………それにしても」

一夏は置き去りにした鈴のことを頭から消去し、思考の世界に落ちていく。

（奴は、インパルスを初めて動かした時の無人ISとそっくりだ……）

試合に割って入った謎のIS、それは彼がかつて目にした無人ISと非常に酷似していた。

それでも、無人ISの腕は決して長くはなかった。

さらに言えば、遮断シールドを貫通するようなビーム砲を装備しておらず、指がガトリング砲であったはずだ。

つまり、似て非なるIS。

（……………あれは発展型か。

あの天才馬鹿は一体、何がしたいんだ？）

と、そこまで思考を張り巡らせた一夏は、異変を察知する。

ゲートの前に降り立つと、不意にゲートに触れた。

「ロックされている……………」

まさかとはおもうが……………」

鋭い目付きで天をあおぐと、浅い溜め息を漏らす。

一夏はロックされたゲートだけに止まらず、アリーナと観戦席を隔てる遮断シールドの異変まで理解したのだ。

瞬間、殺意がたつぷり込められた衝撃砲が一夏を襲撃する。

「うおっ！」

完全に不意を突いた一撃に、僅かによろめく一夏。
そして彼の耳に、殺意を秘めた怒号が貫く。

「一い夏あああああつつつ！！

死ねええええつつ！！」

「なんだ、おい、物騒な」

激怒のあまり、体から湯気が吹き出している鈴が迫る。
その湯気を巻き込むかのように、双天牙月をへりの如く高速回転させる。

そして、渾身の力をもって一夏に叩きつけた。

「だから、待てって！」

一夏の背筋に冷たい汗が走り、VPS装甲があるのにも関わらず、
とつさに後方へ飛びしる。

飛びしさった瞬間、双天牙月の刃は地面に爆音を伴い届く。
過剰なまでの力が込められた一撃に、地面は耐えかねてめり込み爆
砕し陥没してしまった。

「とりあえず落ち着こう、殺しちゃダメ。
平和的に解決しよう」

この光景に、さすがに肝を冷やした一夏はやむを得ずなだめる。
だが、鈴の激怒の炎は燃え盛る一方であった。

「あんたさあつ、普通このいたいけな少女を、敵の眼前においてけぼりにするうつ！？」

下手したら、あたし死んでるわよっ！

なんか後悔とかないわけえっ！？」

「ないな、特には」

とても、なだめているとは思えない——彼にとっては、なだめているつもりではあるが——言動に、鈴の湯気は禍々しい黒みを帯びていく。

その湯気を尻目に、一夏は言葉を続ける。

「それに、乱入したISも襲いかかってきそうな雰囲気だろうし。今は共闘すべきだろうが。」

互いを信用してな」

「……また、あたしをおいてけぼりにする気じゃないでしょうねえ、あんた」

「……………大丈夫」

「じゃあ、なんなのよっ。」

今の間は！」

嫌な間、実に嫌な間であつた。

そんな歯切れの悪い彼に、鈴が不信感を抱くのは断ずるまでもなかった。

そんな二人の脳に、突如として焦つた言葉が直接流れた。

『織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生達がISで制圧に行きます！』

脳に響くプライベート・チャンネルの声の主は、真耶であつた。焦りながらも威厳を保つ彼女の声調は、今が緊急事態であることを

示していた。

「ふん……脱出できるなら脱出してるっつの」

「……えっ」

『脱出……できるなら?』

一夏の拒否に、困惑の色を隠せない二人。
その真意を問いたださずには居られなかった。

「一夏、逃げられないってどういうことなのよ?」

『何か、そっちであつたんですか!?』

「ああ、あつたぞ。」

アリーナ……いや、学園中のシステムをチェックしてみりゃ分かる」
『学園中のシステム……まさかつ!?』

真耶は一夏の答えを訊くや否や、血相を変えてタイピングを開始した。

そして、僅かな間を置いて言葉をひねり出す。

『学園中のシステムが、乗っ取られてる……』

「——えっ」

絶望的、とも言える状況に顔面が蒼白に染まっていく二人。
そんな二人とは打って変わって、一夏は淡々と事実を並べる。

「ピットに帰るためのゲートはロックされてる。

ついでに、遮断シールドがレベル4に設定されてるだろ。

俺と鈴は、閉じ込められてんだよ。

制圧部隊も入れないな」

「……ぐっ」

『そんなっ……』

状況の把握に至った真耶に、一夏は実に軽々しく告げる。

「じゃ、そういうことだから。

だるいんだが、仕方ない。

長時間、追いかけて回られるのも面倒だからな。

——殺ってくる」

『ちよっ、織——』

一夏は真耶の制止に全く耳を貸さず、回線を切断する。
そんな一夏に、鈴はふんつと鼻を鳴らし語りかける。

「まあ、仕方ないわね。

やるわよ、一夏」

状況が状況であるため鈴は即座に、一夏の判断に賛同する。
いつもと変わらぬ様子で戦う決心をつけた彼女は、実に彼女らしかった。

「ん、じゃあ、全部まかすから——」

「うるさい、行くわよっ」

二つの衝撃は、一年の時を得て肩を並べる。

天高く飛翔し刃を重ねる二人の姿は、あたかも天を舞う鳳凰にも見え
えた——

第十八話【鳳凰】

完

第十八話【鳳凰】（後書き）

予定通り遅れました、銀夢です。（^―^；）

色々忙しいんです、何卒ご勘弁を。m（――）m

何度も読み返してくださいね、この作品のアクセス数のために。

ああっ、怒らないでっ！

タブ消さないでっ！

（「□」；）！！やめてえっ！

m（――；）mすいませんっ！

もう三日ごとの更新は、目安だと思ってください。

さて……………書くことなくなつた。（^―^；）

また、くだらん近況報告でもしようかな。

最近あったこと……………あっ、コナンの映画行きました。（「O」）

TOHO？ネマズ難波で17日の9時半からの上映でした。

舞台挨拶の奴ですね。

面白かったですよ、幼馴染みっていいなあって思いました。（^ -

^）

特に、舞台挨拶の小山さんが面白かったです。（^―^；）

まあ、ネタバレ回避のためここまでにしときます。

青山？昌先生、TOHO？ネマズさん、その他制作者の皆さん、宣伝したんで宣伝料のほうをよろしくお願いいたします。m（――）m

……………いや、嘘ですよ。

マジで、嘘ですよ。

なんか、後書きを埋めるための冗談ばかりでしたね。(^ | ^ ;)
では、謎のIS——つか、束の無人IS——との激しい戦いが繰
り広げられる次話をお楽しみにっ！(^ | ^) /

短編その1【英国痴女】

クラス代表決定戦から数日後の昼、セシリア・オルコットが昼食を取るべく、食堂へと赴いていた。

彼女は、券売機の前で立ち止まり、何を食べようかと思案し始める。

「……たまには、いいかもしれませんわね」

セシリアは、あまり食べたことのないざるそばのボタンを押した。少し前、クラス代表決定戦前なら、『極東の文化など、取るに足りませんわ』等といい、迷わず洋食を選んだはずであろう。

自分を恋に落とした男に諭され、この国の文化に少し触れてみよう、そう思い立ったのだ。

「えっと、席は……あつ……」

セシリアはカウンターから、注文したざるそばを受け取った。

竹ざるの上に盛られたそばに、香り際立つつゆ。和の風情というものが、淑やかに漂っているようである。

それを両手に持ち、座れる席を探し始めた彼女の視界に、彼はいた。強硬な意思というものが、毅然と主張しているような、理想の彼

——織斑一夏。

「奇遇ですわね、一夏さん」

「……ん？」

珍しく一人で昼食を取っていた一夏の隣に、セシリアは自然にざるそばを置いた。まるで、一夏の隣が自分の席だと、当然だと思っている風だ。

「あら、今日の一夏さんは、酢豚なのですわね」

セシリアは一夏の食っている酢豚に興味を示し、にゅっと覗き込む。一夏は、甘酸っぱい酢豚の肉を頬張りながら、彼女の方に顔を向けた。

「なあ、お前さ……」

「……なんですか？」

一夏はほんの少し間を置き、

「俺に、惚れてんだろ」

爆弾投下。

「……え……ええええええっ!？」

轟く絶叫。

「きゃっ、なにこの声っ!？」

「みつ、耳がああ!」

「てか、どうしちゃったのセシリアあ!？」

昼食を取っていた女子達の注目も気にせず、セシリアは声帯が許す限りの大音量を発した。

その怒号はあまりにも大きく、食堂が震えた（比喻ではない）。ついでに、一夏とその他大勢の女子達の鼓膜も震えた（比喻ではない）。

乙女の心の中を、土足でズカズカと踏み込んで来た一夏に対し、セシリアは顔をリングゴの如き赤に染めていった。

「いつ、いやっ、あのっ……ほっ、惚れえっ!？」

動揺のあまり、汗もたらだらと慌てふためくセシリア。と、そんな彼女に一夏は冷たく告げた。

「……うるさい」

「だっ、誰のせいだと思ってますのっ!」

一夏のせいである、間違いなく。

しかし、その自覚がない一夏は、変わらず淡々と続ける。

「まー、ちよっと思うことがあるんだが……」

「今度は、なんですか？」

「……第一印象の悪い女って、嫌われるよな」

「……」

しばし黙考するセシリア。

第一印象の悪い女は嫌われる、一夏の言葉につられるように、入

学当初の自らを思い起こし――

――がたつ。

膝から、崩れ落ちた。

大きな音を立てて、床へと倒れ伏せたセシリアに、女子達は再び注目する。

「今度はなに」

「……なんか、オルコットさんが倒れてるよ」

が、セシリアに周りの状況を気にする余裕はなく。

「第一……印象……」

自分の一夏への第一印象、それは最悪に限りなく近いものであった。

彼女は入学初日から、彼を見下し、踏ん反り返り、と実に高圧的な態度を取ってしまった。

今は違う、彼女はそう、きつぱりと言えることだろう。変えてくれたのは、目の前の愛しい彼だ。あの時の力強い瞳を見てしまえば、拒否できる女などいるものか。

彼女もまた、彼のあの瞳に墜とされた、女の一人なのだから。

その彼から、暗に自分への批難とも取れる台詞が飛んできたのだ。大好きな男に、嫌われる。その精神的ダメージは、女にとって計り知れなかった。

「うううううううううう……」

放心状態一歩手前、そんな彼女を余所目に、一夏は最後の一口を口に放り込んだ。そして、あろうことが立ち上がることでできない彼女を無視し、食堂を去っていった。

無論、絶望に打ち拉がれる彼女の方を、振り返りもせずに……

「いやあああああああ……」

全身の筋肉が脱力したような感覚に襲われ、動けずにいるセシリア。

その彼女に、どすんどすと近づく足音があった。

その足音の主は、セシリアの前で歩を止めた。彼女は、微かに残

った正気をフル回転し、近づいてきた人物を確認しようとする。

「だ、誰え」

目の前の人間は、およそ身長170cm越え。その容姿は中々ふてぶてしく、それでいて割烹着を身に纏っているためか、包容力がありそうな雰囲気を持っていた。

食堂のおばちゃん、というか古田○太である。

「な、なんですよ……」

弱弱しい声を上げるセシリアに、古田○太はテーブルの上に放置されたざるそばを指差す。

さらに、低く野太い声調で、こう宣言した。

「お残しはあ……許しまへんでええ」

時は過ぎ、太陽の沈んだ夜。

IS学園の学生寮。

その一室にて、織斑一夏とそのルームメイトであるシャルロット・デュノアが、就寝までの時間を過ごしていた。

「ねえ、一夏……」

「何だ？」

ふとシャルロットが、一夏に訊いた。

「今日の昼休みなんだけど、セシリアがものすつごく落ち込んでて

……何か知らない？」

「……あゝ、あれか」

あの後、食堂から帰ってきたセシリアは、やはり落ち込んでおり、結局今日一日そのままだった。

例えるならば、明日で世界が終わるのを、唯一知ってしまった悲劇のヒロイン、というところか。その様子をクラスメイトが疑問に思ったり心配になったりするもの、無理はない話であろう。

「何か知ってるの？」

「ああ、知りたいか？」

こくと首を振るシャルロット。

興味本位、というわけではなく、何か力になれば、という思いで彼女は一夏の話に聞き耳を立てた。

「……………はああ」

果てしなく深い溜め息が、シャルロットの口から吐かれた。

シャルロットは視線にこれでもかと批難を込め、一夏を見やる。

「つまり、ぜええええんぶ一夏のせい、ってことだよ」

「何を言う、事実を言ったまでだろうが」

彼女の視線に臆することなく、一夏は当然のことだと言う風に、ふんと鼻を鳴らす。

彼女は沈痛な面持ちで、諭すように彼に問いかけようとした、が。

「それはそうかもしれないけど、セシリアの乙女心ズスタだよ。何でそんなこと言ったの……………」

「ほら、写真とかでも、写り悪かったら不味いだろ」

「…………ふえ？」

シャルロットは一夏の言葉の意味が理解できず、すつとんきょうな声を上げてしまう。

もしや自分と一夏の間に、認識の相違があるのではないか、と思った彼女は一夏に聞いてみた。念のため。

「一夏、今さ、何の話してるの？ セシリアの話だよ……………」

「いや、お見合いでは第一印象が大事、って話だが……………」

「第一印象ってそっちいっ！？」

つまり、一夏の言う第一印象とは、お見合いのことだったのだ。

別に、第一印象の悪かったセシリアが嫌いだとか、そんなことではなく。

何と言うか、とにかく紛らわしかった。

「セシリア、完全に誤解しっちゃってるよ！ て言うか、何で唐突にお見合いの話なんかしたの！？」

「——いや、まあ、あれだ、特に深い意味はないゾ。誤解つか、そもそもどうでもいい人間に印象も糞もないだろ」

一夏はセシリアをどうでも良いと言い切り、いつもと変わらぬ口調を披露する。だがしかし、微かに彼の視線があさつての方向へ泳いでいた。

シャルロットは、彼のその微妙な変化を見落とすことはなかった。そして彼女は、確証のない結論へと辿り着く。

（もしかして一夏、わざと誤解されるような言い方を……）

「ねえ一夏。今、目が泳いでいたけれど、何で？」

シャルロットは彼に問いかけた。『何？』という一言が、妙に刺々しい。

彼女は表面上につこりとしているが、その実、瞳の奥は全く笑っていないかった。おそらく、唐変木な人間であれば、彼女の瞳の奥にあるものに気付かず、人生最大級の対人地雷を踏んでいただろう。

まったくもって、恐ろしいことである。

「……いやなに、あんな感じで誤解するように言えば、セシリアは落ち込むよな」

観念したのか、スラスラと喋り始める一夏。

「うん、で？」

「しかし、あいつはああ見えて根性がある。落ち込んだ後、俺へのアプローチはいつそう激しくなるだろうな」

「……落ち込んだまま、一夏と距離を置き始めたらどうするつもりなの？」

「そしたら、あいつはしょうもない女だったってことだ」

「……あー、そう」

あまりに捻くれた一夏の精神構造に、シャルロットは半ば投げやりな態度を取った。

「で、セシリアのアプローチが激しくなれば、箒や鈴、その他女子も危機感を抱くわけだ。無論、お前もな。そして、そいつらのアプローチにも拍車が掛かる、ってとこだな」

「……つまり、どういうことお？」

彼の言いたいことが薄っすらと見え始めたシャルロットは、煮え滾って来た苛立ちを押さえ、一夏に問う。

「なんかさー、最近さー、俺を巡る女の争いがマンネリ化し始めてな。観戦してても、あまり面白くなくなってきたんだ。だからまあ、ちよつと火に油注いでやるかな、って思ったわけだ」

「一夏の外道おっ！」

早い話、セシリアは一夏の悪ふざけの被害にあっただけだったのだ。

男を巡って争うということは、女の人生にとって重要なことであり、ある意味、聖戦である。少なくとも見世物ではない、断じて。女心を弄び尽くす一夏に、シャルロットは語気を荒らげた。と、その瞬間、扉をコンコンと叩く音が聞こえたのだった。

時は巻き戻り、数分前。

学生寮の一室、天井付の豪勢過ぎるベッドの上に、セシリアは鎮座していた。

「……………」

セシリアは静かに、ただただ沈黙を続ける。

そんな彼女の前には、未開封の袋が置かれていた。縦二十cm、横十五cm、比較的小さな茶色い紙袋である。

「いよいよ、これを使うときが、来ましたのね……」

彼女は、すうーっ、はぁーっ、と深呼吸を続けた。冷たい空気が、酸素が彼女の体を満たしていく。

そして、彼女は意を決し、紙袋の封を解いた――

「はい、今開けまーす」

シャルロットはそう告げると、扉を開ける。

そして入ってきた人物は、今まさに話題となっていた少女であった。

「一夏さん、お邪魔しますわよ」

特徴的なお嬢様言葉を響かせて、少女——セシリア・オルコットが入ってきた。

「……セシリア……ど、どうしたの？」

シャルロットは言葉に詰まりながらも、意外な訪問客に視線を向ける。

シャルロットが視界に捉えたセシリアは、脇に何かを抱えているように見える。

さらに彼女の目に映ったセシリアの表情は、見たことのないような精悍な顔つきへと変貌を遂げていた。死を覚悟した特攻隊員かのような、そんな表情。

セシリアはシャルロットの存在を無視し、ベッドに寝転がる一夏の目の前にて立ち止まった。

「……一夏さん」

「あ？」

セシリアは僅かに緊張しながらも、それでも凜とした態度を崩すことない。

一体どうしたと言うのだろう、シャルロットはそう疑問を覚えた、がしかし、理由はすぐに分かった。

「……ふうーっ、夜這いに来ましたわっ！！」

「……………は？」

セシリアの言葉の意味をシャルロットは理解できず、痴呆のようにぽかんと口を開いた。

——夜這いつてなんだろう？

シャルロットは心の中で、自問自答する。

日本人と比べ、やはり乏しい日本の知識を駆使し、『夜這い』なるものの理解に勤めた。

夜這いとは即ち、寝込みを襲う、ということである。

語弊がないよう言っておくが、暗殺とかそんな類いの『襲う』ではない。性的に、行為を執り行うために、『襲う』のである。

と、そこまで考えて、シャルロットはようやく状況の理解に至っ

た。

その証拠に、彼女の顔がみるみる紅葉に染まっていく。一体、何を妄想したというのだろうか。

「ちよっ、セセセセセツ、セシリアアツ。夜這いって、何考えてるのおっ!？」

顔も真っ赤に、激しく動揺するシャルロット。とは打って変わって、一夏はニタリと笑んだ。

それはもう、楽しそうに楽しそうに。

「ふうん、夜這いねえ。何でまた？」

「っ!？」 おっ、男が聞いていいことではありませんわっ! さあ、早く営みを」

セシリアが今までやったことのないような強行手段に出たのは、もちろん理由がある。

(だって、もう……手段は一つしかありませんもの……)

すっかり一夏に嫌われてしまったと思っていた彼女には、他のライバル達を抑え、一夏をものにできると思えばしなかった。

それでも諦められはしない、諦めるわけがない。

残された手は一つ——既成事実を作ってしまうこと。

見も蓋もない言い方をするなら、子を孕む、と言うことだ。

追い詰められた彼女ではあるが、行動力だけは凄まじいものがあった。もう少し、その使い道を改めて欲しいところではあるのだが

……

「今日この日、この瞬間のため……準備を怠りはしませんでしたのよ……」

セシリアはそう言うと、自らの脇に抱えた布らしき物に、チラリと視線を向ける。

「……っか、お前それ何？」

一夏が何気なくセシリアに訊く。

するとセシリアは顔を赤らめて、答えを返す。

「あっ、これはそのっ……わたくし達の夜を良きものにするために、

通販で買っておいた物ですわ」

一夏とシャルロットは、セシリアの持つ布を凝視する。どうやらそれは、情熱的な赤い色をし、丈の短いワンピースのよ
うな形の衣服らしい。

しかし、この衣服は、衣服と呼ぶには生地が薄く、しかも透けて
いる。これでは見に纏ったところで、女として隠さなければならな
い部分が、見事に透けて見えてしまう。

いわゆる、シースルーという奴だ。

最早、隠すという衣服としての存在意義を、見事に無視してしま
っている。赤いシースルーの奥に見え隠れする淫靡な光景は、男性
の視線を集めて止まないだろう。

「いやむしろ、『魅せる』ことを目的としているようで――
」
「つて、これベビードールじゃないのっ!？」

シャルロットの言う通り、あの衣服はベビードールという。

基本的には寝間着なのだが、ただの寝間着では断じてない。
身に纏う者の気分はもちろん、『パートナー』たる者の気分も高
揚させる――要するに、特殊用途向けのセクシーランジェリーであ
る。

ちなみに余談ではあるが、セシリアがこのベビードールをネット
通販で買った際、十八才以下お断りの年齢制限を無視しているのだ
った。

「さすがに、これを着て廊下に出るのは恥ずかしかったので……今、
着替えますわ」

セシリアは火照りきった表情で、脱衣場へ足を向ける。

一夏は、予想以上の面白いことになった、とニタニタしていた。
が、シャルロットは、とある使命感に突き動かされようとしていた。
今ここには、暴走気味のセシリアと状況を楽しんでいるとしか思
えない一夏しかいない。ツッコミ役は、シャルロットしかいない。
もしこのまま、すんなりと進んでしまえば――シャルロットは、
その先の光景を妄想する暇もなく、セシリアの腕を掴んだ。

「セシリアアツ、お願い出てって！ でないとこの小説ノクターン
行きになっちゃううう！！」

「なっ、何をするのです！ ノクターン！？ 何、訳の分からない
ことをっ！！」

セシリアの腕を掴んだシャルロットは、部屋から追い出すべく扉
へと引つ張った。

二人の喧騒が続く中、一夏は愉快そうに呟いた。

「赤のベビードールか。セシリアの奴、中々いい趣味してんじゃね
えか。見直したぞ、うん」

この一件以来、一夏のセシリアに対する好感度が上がったそうな
ついでに、この一件以来、セシリアがエロ担当としての立ち位置
を確固たるものにしたのだった。

短編その1【英国痴女】（後書き）

はい、えゝ、何書こう？f^^；

久しぶりの後書きなんで、戸惑っております、はい。

本編の方は、現在、鋭意製作中です。つつてもまだ、500文字ぐらいですけどね。^^；

ああっそこっ、怒らないでっ、頑張るからゝTOT；

……まあ、気長に待っていてください。

ところで今回、短編を出したのには前書きの他に、も一つ理由があります。

皆さん、おそらく今までのストーリー忘れていたのではなかろうか、と思ひまして。ここは、忘れていてもスラスラ読める短編にしよう、と決めたわけです。

その短編についてですが、私が思うにセッシーが一番、ベビードールとかエロ下着とか似合いそうなんですよね。

セッシーは箒とか真耶のビックリボデーではないですが、なんか、雰囲気のエロい。さすが英国痴女。^^；

それと今回、特別出演してくださいました、古田〇太さんに、惜しみない拍手をゝ（ゝノノ”パチパチパチ

なんか、ビックリなのです。この人が給食のおばちゃんですからね、忍たまの。

パツと見、ドクタケ忍者でしょこの人。けど、おばちゃん似合うゝ。^^

製作スタッフの遊び心に乾杯です。^^

まあ、こんな感じで、他にも鈴と箒の短編出そう、と画策してお

ります。ラウラについても、和解してから作ろう、と思っています。
シャルは『本編でいい思い(?)してるんで、ここは他のヒロイ
ンたちを持ち上げよう、と考えているところですよ。

なんか短編のことばっかだけど、ちゃんと本編作りますからね^
^ ;

では、また会う日まで^^^ /

第十九話【無人機】（前書き）

お久しぶりです、えゝ、忘れた頃にやってくる、銀夢です。（
ω・）ノ

前回の短編を投稿してから、一ヶ月ちよつとですかね。
ちなみに、本編の投稿は4ヶ月ぶりです。

ちよつ、そこつ、石投げないでっ。いたいいたい（ □ ）

さて、前書きを何で埋めるか、何も思い浮かばなくなったぞ。（・。

・；

ほんとに思い浮かばないんで、さそつく本編を楽しみくださゝい。

^^ノ

第十九話【無人機】

「もしもし！？ 織斑くん聞いてます！？ 鳳さんも！？ 聞いてますー！？」

焦燥しきった様子で張り上げた真耶の声が、ピットを揺さぶる。とはいえ、プライベート・チャンネルは声に出さずとも伝わるのだが、焦りがそれを失念させていた。

喋る相手がいないにも関わらず声を張り上げるその姿は、端から見れば変質者そのものである。もしここに警官がいたならば、間違いなく職質の対象となることだろう。

「本人達がやる気なんだ。やらせてみても、いいだろう」

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け、コーヒーでも飲むといい。糖分が足りないからイライラするんだ」

そう言いながら、涼しい顔でスプーンを手に取る。白い粒子の詰まった容器に突っ込み、さらさらとコーヒーの入っているカップに落とす。

まるで、買い物帰りによった喫茶店での光景である。慌てふためく真耶とは対照的に、千冬は平静を保って――

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「……………」

――いなかった。

白い粒子――塩の盛られたスプーンがピタリと止まった。千冬は自分の犯した失態を信じられず、砂糖が入っているであろう――そう信じたい――容器に目を向ける。

見間違いではない。眼球に問題があるわけでもない。白昼夢でも蜃気楼でもなく、その容器には『塩』と書かれていた。

千冬は、とりあえずスプーンに詰まれた塩を容器に戻した。そして二人そろって、塩が投入されたコーヒーを重い気分で覗く。

「……うぶっ」

「……」

スプーン一杯の塩では、コーヒーの見た目も香りも変わらない。だがしかし、激しく不味いであろうこの液体を見た瞬間、真耶は軽い吐き気を催してしまった。

千冬の名誉のため言っておくが、彼女はコーヒーに塩を入れて飲む習慣はない、断じてない。

そんな彼女をフォローしようとしたのか、はたまたイタズラ気分だったのか、真耶は唐突にまくし立てた。

「あ、やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？ だから塩なんて……」

「……」

しかし、ぺらぺらと上下運動を繰り返していた真耶の口が、硬直した。目の前の、どこか穏やかならぬ沈黙を続ける千冬に、真耶の生存本能が警告を発したのだ。死にたくなければ黙れ、と。

「あ……あの……」

「……」

固まる真耶を尻目に、千冬は微塩コーヒーの入ったカップを傾けた。そして、傾けたカップから流れ出たコーヒーの先には、山盛りの塩が積まれた容器。

「ちよっ、織斑先生！？ 何をなさって……」

「……」

塩が一杯に入っていた容器には、今やコーヒーが満たしており、かつてコーヒーの入っていたカップには何もない。

即ち、コーヒーが全て、塩の入った容器に流れてしまったのだ。投入されたコーヒーは、瞬間に塩の山を侵食していく。しかし大量に詰まれた塩は、コーヒーに全て溶け切ることはなく、液体とも固体とも取れぬ『ゲル状の何か』となってしまった。

火山から吹き出たばかりのマグマなら、こんな感じかもしれない。

「山田先生」

「……は、はい？」

千冬は真耶に容器を差し出す。

一方、真耶は嫌な予感に駆られ、汗が噴出していた。

「コーヒーをどうぞ」

「……………」

——絶句。

真耶の聴覚に異常がなければ、千冬はこのゲテモノをコーヒーと呼称し、あまつさえ飲めと言っているのだ。この、大量の塩分と苦い液体が混合した、『ゲル状の何か』を。

真耶は恐怖に顔を引きつかせながら、千冬に抗おうとした。無謀にも。

「いやあの、これはですね…… コーヒーと言うか、そもそも口にしている物では……」

「コーヒーをどうぞ」

「で、ですから……」

「コーヒーをどうぞ」

機械的に同じ台詞を続ける千冬に、真耶は涙腺崩壊寸前だ。ついでに、天敵との遭遇に怯える小動物よろしく、体が小刻みに震えている。

彼女は助けを求め、ピットを見回した。

「……………」

「……………」

「……………」

箒もセシリアも、シャルロットですら顔を背けてしまった。人間誰しも己が身が大切なのだ。おのがみ

哀れな真耶であったが、千冬は慈悲を与えるつもりはないらしい。涙目の真耶を目の当たりにしてなお、絶対的威圧感をもって『ゲル状の何か』を押し付けている。

差し出された『ゲル状の何か』を飲む恐怖か、千冬への恐怖。真耶の本能は、両方の恐怖に板挟みとなった拳句、苦渋の決断を下す

他なかった。

「い……いただきます……」

「熱いので、一気に飲むといい」
容器が真耶に手渡された。

「……………」

「……どうした？ 山田先生」

「……………」

決めたのはいい、いいのだが、真耶はいつまでたっても飲む素振りを見せない。早い話、給食に出てきたピーマンに苦戦する小学生の光景に似ている。

そんな彼女に痺れを切らした千冬が、促すようにスプーンを手渡した。

……これを使って飲め、ということなのだろう。

最早、退路は立たれていた。

いつも間近から千冬を見てきた真耶にとって、千冬を怒らせた結末は悲惨なものだと知っている。出来るならば、今すぐ全てのしがらみを取っ払い、裸足で地球の裏側まで逃走したかった。

もちろん、そんなことは出来ない。千冬の更なる逆鱗に触れるぐらいなら、目の前のこれを飲むほうが遥かにマシだ。

真耶は自分にそう言い聞かせて、スプーンを容器の中にある『ゲル状の何か』に突っ込んだ。

ちやくうつ。

突っ込んだ触感は、塩の触感とも、コーヒーの触感とも、なんとも言い難いものだった。人生初めての感覚に、真耶は例えが見つからない。

そして、スプーンを持ち上げた。

そこからはみ出た『ゲル状の何か』は、にゆるん、と重力に従い容器に落ちる。

「……い、逝きます……」

決死の覚悟の下、スプーンを口へと運ぶ。

「っ……………!？」

『ゲル状の何か』と舌が触れた瞬間、雷のような物が彼女の肉体を駆け巡った。

口の中にどろどろと流れてくる流動物、その中に残った塩の粒子。ぬるぬるしていながらも、ざらざらとした、初体験の衝撃（悪い意味で）。

次に『ゲル状の何か』の標的になったのは、味覚だ。

舌を刺すような苦味と、体全体が萎縮してしまうほどの塩気。それらが、おどろおどろしい融合を遂げ、食すに堪えないモノへと変貌していた。

「うええええええっ」

『苦味と塩気は別々に取るものだ、絶対に同時摂取してはならない』と真耶は心に誓った。深く深く、誓った。

「私は身内ネタで弄られるのが嫌いだ、よく理解するように」

「……………はい。すみませんでしたあ」

しゅん、と真耶は縮こまる。

瞬間、ピットに激しい揺れが襲った。

「……………始まったか」

千冬の表情が険しくなる。

戦闘の激しさを物語る揺れは、緩みきったピットの雰囲気吹き飛ばすのには、十分なものだった。

「織斑先生っ。突入部隊、配置完了。いつでも行けます」

先ほどまでしょんぼりしていたはずの真耶が、真剣な眼差しで情報を伝達する。いつもの彼女からは、創造だに出来ない光景である。「引き続き待機。現在、システムの奪還を行っている。しかし、突入には時間を要する。そう伝える」

「はいっ」

システムが奪還されない限り、ゲートが開くことも遮断シールドが解除されることもない。それまで、彼女等には打つ手がないのだ。

その彼女らに、少女らが割って入った。

「織斑先生っ、突入部隊に私たちも……」

シャルロットとセシリアだ。

だが、二人の懇願虚しく、千冬は首を横に振る。

「……そうだな、奪還出来たらな」

「そ、それって……」

「……ど、どういうことですか？」

思いもよらぬ返事に、動揺を隠し切れない二人。

それを見た千冬は、重々しく口を開く。

「システム奪還が思うように進んでいない。向こうのクラッカーは、相当なやり手だ」

「そんなんっ!？」

「……くっ!」

それは、今考えられる状況で、最悪のものだった。もしこのままシステム奪還がなされなければ、一夏と鈴に全てを託すしかないからだ。

即ち、彼女らはただ見ていただけしか出来ない。一夏と鈴の戦いを。

「……」

歯痒い、ただただ歯痒い。

重い沈黙が、シャルロットとセシリアを支配する。

二人は代表候補生として、IS操縦者として、誇るべき力を持っている。それなのに、この無力感は何なのだろう？

私たちは、ただ祈ることしか――

「……おい」

「……っ、はいっ」

唐突に放たれた千冬の声に、シャルロットとセシリアが反応する。

「一夏がやられるところを、想像してみる」

「……なっ」

「何でそんなんっ……」

意外すぎる千冬の言葉に、二人は反論しかけた。

しかし……。

「想像できるか？ あの一夏がやられるところが」

「……………」

無理である。

どう思考を凝らしても、想像できない。いつも圧倒的な力と、千冬に勝るとも劣らん威厳を放つ彼の、やられるところが。

何をどう想像しても、一夏が絶対的な力で敵をねじ伏せる光景しか思い浮かばない。

「想像できんのは私も同じだ。あの程度の木偶の坊にやられるぐらいなら、とうにセシリアにでもやられている」

「……ですよね」

「何だか心配しても、無駄に思えてきましたわ」

二人は、少し気が楽になった、そんな気がした。

余裕を持ったシャルは、ふとピットの違和感に気づく。

…… 何かが足りない、そう思ったシャルは、『彼女』がいるであろう場所に視線を向ける。

「あれ…… 箒は……」

ついさっきまでそこに居たはずの『箒』が、忽然と姿を消していた――

戦闘続く、アリーナ上空。

高速での飛行を続ける一夏、その彼に向かって襲撃者たるISがビームを繰り出す。放たれたビームは空気を切り裂き、一夏を襲わんと直進する。

「オラ、よつと」

迫りくる熱線を、一夏は一気に高度を下げることで躲す。

さらに、一夏は観客席近くの低空にまで下り、お返しにとビームライフルを放った。一発目、一瞬の隙間を置いて二発目、さらに数秒のタイムラグを置いて三発目。

それらは全て、単純に敵を仕留めるための物ではない。

一発目、二発目と難なく避ける敵IS。しかし、二発目を躲した直後、三発目が敵ISのシールドバリアを揺さぶった。

一夏は予め、敵ISが一発目と二発目を避ける軌道を予測し、相手が来るであろうポイントに時間差での三発目を撃っておいたのだ。しかし、ビームライフルの一撃では決定打には程遠い。

それでも、一瞬の隙が出来た。否、作られた。

「やあああああ!!」

敵ISの背後、双天牙月を手に待ち構えていた鈴が、怒号と共に一撃を振るった。

隙だらけの背中を晒す敵に、回避手段はない。

——はずだった。

「っ!？」

敵が鈴の視界から、突如として消えた。目標を失った双天牙月は、虚しく空を切る。

激しく動揺した彼女は、慌てて辺りを見回した。

鈴の遙か上空、そこに敵の姿を捉えた。

(そうか、あの馬鹿みたいに多いスラスターでっ)

鈴の胸中が指す通り、敵の体中にこれでもかとり付けられたスラスター。これらを一斉稼動し、一瞬の内に飛び上がることで回避したのだ。人間の目にすら映らぬほどの速さで。

必殺の一撃を見事に躲した敵は、特に勝ち誇ることなく、鈴に向けてビームを撃ち放つ。

「くっ!」

迫り来るビームの雨に、鈴は堪らず後退する。一息ついた彼女に、一夏が声をかけた。

「おいおい、今ので決めるよ。アシストしてやってんのに。これで何度目の失敗だ?」

一夏の台詞に、鈴はぴりつと青筋を立て、

「決めるつつたって、あいつ相当強いんだからあつ。そんなに言う

なら、あんたやって見なさいよ！」

と言い放つ。

すると、一夏はわざとらしいジト目を鈴に向けた。

「……俺がねえ。まあ、別に良いが、そうなるとお前良いとこなしだぞ。俺にこてんぱんにされてなあ」

「うう……別に負けた訳じゃないわっ」

鈴、落ち込む。

「ついでに、見知らぬ敵にまでこてんぱんにされてよあ」

「ううう……だって強いんだもん」

鈴、涙目。

「最後、俺に丸投げかあ」

「うううう……あんたには言われたくないわよ……」

鈴は悔しさと不甲斐無さから、すっかり意気消沈してしまった。そんな彼女に、一夏はやれやれと首を振る。

「……鈴、あいつの感情、仕草なんかを見てどう思った？」

「どうって……」

一夏の問いかけに、鈴は少しの間、黙考した。

「……そうね、動揺とか見せない……いや、感情が薄いつて言うか……仕草も無かったように……」

「そうだな、言い切ってしまうなら、人間らしさが無い、ってことだ」

「人間らしさ……」

鈴の表情は、次第に懐疑的なものへと変わっていく。

そして、懐疑心が天井を越したとき、こう切り出した。

「まさかあんた、あのISを動かしてるのは“IS自身”って言いたいわけ？」

「ああ。その、まさかだ」

「……」

鈴はしばし黙考し、しばらくしてから口を開いた。

「……確かに一理あるけど……ううん、やっぱり、あり得ない。I

Sは人が乗らないと、絶対に動かない。そういうものだもの」
彼女の導き出した結論は、一般的に言えば至極当然、というところだ。

かつて、ISが世界を脚光を浴びる前、無人航空機や軍用ロボットなどの、人が登場しない兵器があった。

人が乗らずに遠隔操作で操る無人航空機、人工知能を搭載する軍用ロボット。例えば破壊されても、人的被害は皆無であるため、第五世代戦闘機と並んで重要視された。

ISは、そういった物とは、決定的に違う。

操縦桿のないISは、操縦者の中枢神経系と接続することで、操縦者の思考を読み取って動く。従って、人が乗っていない状態では、うんともすんとも言わないのだ。

しかし一夏は、

「いや、あれは無人機だ。確証がある」

と言い、自らの仮説に絶対の自信を示した。

鈴は一夏の顔を覗き込む。彼の表情には、一点の曇りも無い。いつも見せることの無い、思わず頼りにしてしまいそうな、そんな表情。

（……そんな顔してたら、信じなくなっちゃうじゃない。……ばか）
「……いいわよ、信じる。けど、間違ってたたら、分かってるわよね」
一夏は、ふと昔を思い出す。

昔、中学の文化祭の準備を全てサボった時や、セフレと一緒にいるところを見られた時、よく駅前のクレープを奢らされた。

今回も、タダで甘い物を頂こう、と言う算段なのだろう。

「まあ、いいがな。だが、奢ることは無いだろうよ」

「はいはい。とにかく、あれが無人機って仮定して、攻めましょうか。……で、何すればいい？」

「そうだな、取りあえず、そこで突っ立ってろ」

「……はあ？」

あまりにも予想外の返事に、鈴は間抜けな声を出す。

「だって、さっきの調子だと戦力になりそうに無いし」

「じゃあ何い。一人でやる、って言うの！？ 無茶よ！」

自分への援護を完璧なまでにこなした一夏の実力は、鈴も重々承知している。

しかし、一人で戦うなどという無茶を許容できるはずもなく、しかも事実だとはいえ役立たず呼ばわりされ、彼女は激しく詰め寄った。

「いや、機械との戦い方の手本を見せてやろうと思ってな。じゃ、行ってくる」

しかし一夏は、鈴の言葉をことごとく無視し、無人ISへ飛翔する。

「っ、もっっ！ 人の話、聞きなさいよ！」

鈴の怒声を背に受け、彼は単身、無人ISとの戦いへと赴いた。

第十九話【無人機】（後書き）

……後書きを埋めるネタが無い。（´Д`ぐすん

えっと、取りあえず、千冬の作った塩コーヒーの話でも。

原作では、スプーン一杯の塩を入れただけでした。

がしかし、塩の積まれた容器（喫茶店においてある感じの奴）に
コーヒー一杯分を注ぐ、という暴挙に出たわけですよ、千冬は。

（（（（。Д`；）））がくがくぶるぶる

……キャラ、崩れちゃったかな、千冬。（^^；ゞ

それと、作中にあつた『操縦者の中枢神経系と接続することで、操縦者の思考を読み取って動く』という設定は、勝手に作りました。

（^ー^；）

ISの操縦はイメージが大切みたいですし、何か設定をつくってやらねば……と思ひまして。

第十話でも『神経再接続』という一文がありますし、「神経接続」とは「中枢神経系とISの接続」ということにしよう、と考えたわけです。（o-ω^-）

まあ、ここまで書けばいいか。（´・c`・、ふう）
では、次話でお会いしましょう。（●^ ^●）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2022r/>

IS / DESTINY

2011年9月8日09時28分発行